724
86
724-86
1200501587909

書聖の衆民

724
86

列王紀略

救世軍中將　山室軍平著

民衆の聖書列王紀略上巻第六十四頁第三行以下第八行までを、左の如く改む。

に、父の頭を承繼いだものだ」と、いはれて居る。彼はツロの王から「達人」又「才智ある工人」(歴下二・一三)として、ソロモンに推薦せられた程の藝術家であつた。箴言に、「汝その業に巧なる人を見るか、斯る人は王の前に立たん。かならず賤者の前にたたじ」(箴二二・二九)とあり。ヒラムは實に之に該當すべき人物であつた。彼はその業に巧なるが爲に、二人の王の前に立つの榮譽を贏得たものであつた。此の如く敬虔にして誠實に勞働することは、人のたふとき譽である。(一三、一四)

山室軍平著

民衆の聖書列王紀略 上

東京 救世軍出版及供給部

昭和十二・八・一 寄贈本

書中「舊新約聖書」本文の引用に就ては特に日本聖書協會（The Bible Society in Japan）の承認を得たり。

724
86

はしがき

救世軍の創立者ウイリアム・ブース大將は、曾て英文の聖書一卷を私に贈られた。その扉には、「讀め、信ぜよ、從へ、而して勝て。」の一語を、題して居られたのである。

これは至極簡單ではあれど、最も適切に、私共が聖書を學ぶ心得を教へられたものと思ふ。私共は聖書を讀まねばならぬ。毎日、時を定めて、祈深く、教へられ易い心を以て、之を讀まねばならぬ。私共は聖書を信じねばならぬ。之を神の感動によつて成れるもの、すなはち神の約束の書として、信じねばならぬ。私共は聖

724
86

書の教に從はねばならぬ。「我に對ひて主よ主よといふ者、ことごとくは天國に入らず、たゞ天にいます我が父の御意をおこなふ者のみ、之に入るべし。」とあるからである。私共は又、聖書の御言によつて、勝利を得ねばならぬ。「なんぢら世にありては患難あり、然れど雄々しかれ。我すでに世に勝てり。」と、耶蘇は宣うて居るのである。

かくして眞の基督者は、日々聖書に親しみ、進んでは其の一生を通じて、聖書的生活を營むべきものである。卽ちその身そのまゝ、活ける聖書であるやう、心掛くべきものである。

たゞそれについての問題は、聖書を讀んでも、その中からどんな教訓を學ぶべきか、悟り難い所があるのを、如何にすべきかといふことである。「民衆の聖書」は極めて不完全なものながら、如何にもして聖書の毎章から、少くとも各五六ケ條の心靈的、實行的教訓を學び得べきやう、初心なる聖書研究者の手ほどきをなさんため、著されたものである。

幸に毎卷とも極めて眞實なる讀者があり、之を再讀、三讀して、益を得るところ多きことを通知し來られた向も少からず、著者をして愈々感奮して、事に從はしむるやうな次第である。今その舊約聖書の部第六卷「列王紀略」を世に出さんとするに當り、此の篇がまた神の祝福により、一人でも多く、聖書を讀み、之を信じ、

之に從ひ、而して勝利を得る者を起す、助とならんことを、祈つてやまないのである。

昭和十一年十二月

山室軍平

聖書各卷略號

本書中に用ひられたる聖書各卷の略號は、左表によるのである。

舊約聖書の部

創世記(創)　出エジプト記(出)　レビ記(レビ)　民數記略(民)
申命記(申)　ヨシユア記(ヨシ)　士師記(士)　ルツ記(ルツ)
サムエル前書(サム前)　サムエル後書(サム後)　列王紀略上(列上)　列王紀略下(列下)
歷代志略上(歷上)　歷代志略下(歷下)　エズラ書(エズ)　ネヘミヤ記(ネヘ)
エステル書(エス)　ヨブ記(ヨブ)　詩篇(詩)　箴言(箴)
傳道之書(傳)　雅歌(雅)　イザヤ書(イザ)　エレミヤ記(エレ)
哀歌(哀)　エゼキエル書(エゼ)　ダニエル書(ダニ)　ホゼヤ書(ホゼ)
ヨエル書(ヨエ)　アモス書(アモ)　オバデヤ書(オバ)　ヨナ書(ヨナ)
ミカ書(ミカ)　ナホム書(ナホ)　ハバコク書(ハバ)　ゼパニヤ書(ゼパ)

ハガイ書（ハガ）　ゼカリヤ書（ゼカ）　マラキ書（マラ）

新約聖書の部

マタイ傳福音書（マタ）　マルコ傳福音書（マル）　ルカ傳福音書（ルカ）　ヨハネ傳福音書（ヨハ）
使徒行傳（使）　ロマ書（ロマ）　コリント前書（コリ前）　コリント後書（コリ後）
ガラテヤ書（ガラ）　エペソ書（エペ）　ピリピ書（ピリ）　コロサイ書（コロ）
テサロニケ前書（テサ前）　テサロニケ後書（テサ後）　テモテ前書（テモ前）　テモテ後書（テモ後）
テトス書（テト）　ピレモン書（ピレ）　ヘブル書（ヘブ）　ヤコブ書（ヤコ）
ペテロ前書（ペテ前）　ペテロ後書（ペテ後）　ヨハネ第壹書（ヨハ壹）　ヨハネ第貳書（ヨハ貳）
ヨハネ第參書（ヨハ參）　ユダ書（ユダ）　ヨハネ默示錄（默）

民衆の聖書

列王紀略（上）

目次

はしがき……一
聖書各卷略號……一
列王紀略上總論……一
（一）老いたるダビデ（列王紀略上第一章一—三一）……一
（二）ソロモンの卽位（同、第一章三二—五二）……九
（三）遺命（同、第二章一—二五）……一六
（四）信賞必罰（同、第二章二六—四六）……二三
（五）ソロモンの智慧（同、第三章）……三〇
（六）國運の隆盛（同、第四章）……三九

（七）ソロモンとヒラム（同、第五章）……四六
（八）神の宮の建立（同、第六章）……五二
（九）王宮の造營（同、第七章）……五九
（一〇）獻堂式（同、第八章一—三〇）……六六
（一一）執成の祈（同、第八章三一—六六）……七四
（一二）國威の發揚（同、第九章）……八二
（一三）シバの女王（同、第十章）……八九
（一四）ソロモンの晩年（同、第十一章）……九六
（一五）南北朝の分裂（同、第十二章）……一〇六
（一六）神の人の不從順（同、第十三章）……一一四
（一七）ヤラベアムとレハベアム（同、第十四章）……一二一
（一八）アサ（同、第十五章）……一三〇
（一九）惡しき樹惡しき果（同、第十六章）……一三八

（二〇）預言者エリヤ（同、第十七章）……一四七
（二一）火をもて應ふる神（同、第十八章）……一五四
（二二）靜なる細き聲（同、第十九章）……一六四
（二三）山嶽の神谿谷の神（同、第二十章）……一七二
（二四）ナボテの葡萄園（同、第二十一章）……一八二
（二五）虛僞の預言者（同、第二十二章一—二八）……一九〇
（二六）歷史は審判なり（同、第二十二章二九—五三）……一九八

列王紀略上總論

『義は國を高くし、罪は民を辱しむ。』（箴一四・三四）といふ一語を、事實を以て證明するものがあるとすれば、それは列王紀略上下二卷である」というた人がある。極めて適切なる見解であると思ふ。

ダビデが、イスラエルの十二の支派を統一して、これが王となるに及び、追々國は富み、兵は強くなり、國威が四隣を壓するに至つた。その後を、子のソロモンが嗣いで王位に登り、神の宮を建立し、王宮を造營し、「ソロモンの智慧」といはるゝ優れた識見、智慮を用ひて、内治外交の事に當り、四十年の泰平を樂しむ間に、いつしか氣弛み、心惑ひて、放恣淫逸に流れ、偶像禮拜に陷り、さしもの榮華も、所謂槿花一朝の榮として凋落するに至つた。すなはち耶蘇が、「野の百合は如何にして育つかを思へ。勞せず、紡がざるなり。然れど我なんぢらに告ぐ、榮華を極めたるソロモンだに、その服裝この花の一つにも及かざりき。」（マタ六・二八、二九）と仰せられたやうに、彼の榮華

も案外果敢ないものであつた。其の子レハベアムの時代に、國は分裂して二つとなつた。すなはちユダとベニヤミンとの二つの支派は、ユダの名の下に南の王國をなし、その以外の十の支派は、イスラエルの名の下に北の王國を形造つた。概していへば、ユダ（すなはち南朝）の方には、「その父ダビデの凡てなせし如く、エホバの善と見たまふ事をなし」（列下一八・三）た王も、幾人かあつたが、イスラエル（すなはち北朝）の方は、殆んど凡ての王が所謂「ネバテの子ヤラベアムの罪」（列上一六・三一）を犯し、エホバに代へて金の犢を拜むやうな間違をなし、不信、背德の行爲をなす者のみが、相ついだのである。その結果、南北朝に分れた當時から二百餘年を經て、イスラエルの方は、九箇の異る王朝に屬する十九人の王が位を繼ぎたる後、紀元前七百二十一年アッスリヤ王のために滅され、その人民は俘囚としてその國に連れ行かるゝことゝなつたが、ユダの方は之と異り、兎も角もダビデから一系の子孫が王位を相續し、二十代を重ねて、イスラエルよりは百四十年おくれ、紀元前五百八十一年、遂にバビロン王の滅す所となり、これも同じくその人民は俘囚として、その國へ連れ行かれたのである。

列王紀略は右樣の經過を記したもの故、これはイスラエル王朝時代の歷史である。然しながら單に國內の出來事、又はその對外事情等を書き記したものではなくて、專らイスラエルの子孫と神との關係を書いた記錄である。すなはち神が如何に、その時代のイスラエル人を敎導し、保護し、若くは鞭撻し給うたかを記す歷史である。コースーツが、「歷史は攝理の啓示である」というたのは、特に列王紀略によく當嵌る言であると思ふ。

列王紀略上卷は、イスラエルの十二の支派が南北兩朝に分れて後、一百年內外のことを記したものである。しかもその終の三分の一程には、預言者エリヤが、バアルの崇拜者なるイスラエルの王アハブと、その妻イゼベルとの權威を冒し、唯一人にて奮鬪した狀を詳記してあるのは、注目に値する。

□

今左に南北王朝時代の簡單なる年表を掲ぐれば、左の如し。

南王國ユダ

王名	記錄	大略年代	重要事項
レハベアム	(列王紀略上)一一・四三—一四・三一	九三〇—九一七年	十族の分離 パロ・シシャクの侵入
アビヤム	一五・一—八	九一六—九一四年	偶像排除
アサ	一五・八—二四	九一三—八七三年	ラマの築壘 スリア同盟
ヨシヤパテ	二二・四一—五〇	八七三—八四九年	北朝との和睦 タルシシ船の建造
ヨラム アハジア	(列王紀略下)八・一六—二四 八・二四—九・二八	八四九—八四二年 八四二年	アハブの女との婚姻 北王國訪問中エヒウに弑せらる
アタリア	一一章	八四二—八三六年	アハブの女 ダビデ王家の裔を廢にす
ヨアシ	一二章	八三六—七九七年	バアル禮拜の鼓吹 祭司エホヤダに助けらる
アマジヤ	一四・一—二〇	七九七—七七九年	神殿の修繕 北王國に挑戰す
アザリヤ(ウジヤ)	一五・一—七	七七九—七四〇年	謀叛人に弑せらる 內治外交の成功 癩病となる
ヨタム	一五・三—三八	七四〇—七三六年	攝政數年間 イザヤ初期の預言

北王國イスラエル

王名	記錄	大略年代	重要事項
ヤラベアム	(列王紀略上)一二・一〇—一四・二〇	九三〇—九二三年	金の犢の禮拜
ナダブ	一四・二〇—一五・二七	九三—九二一年	臣バアシヤに弑せらる
バーシヤ	一五・二八—一六・六	九二一—八八八年	第一王朝を滅ぼす
エラ	一六・六—一〇	八八八—八八七年	臣ジムリに弑せらる
ジムリ	一六・一〇—二〇	七日間	第二王朝を滅ぼす
オムリ	一六・二一—二八	八八七—八七五年	第三王朝を滅ぼす サマリア選定
アハブ	一六・二九—二二・四〇	八七五—八五四年	ツロの皇女との結婚 バアル神殿建築 エリヤとエリシヤ スリア戰爭 カルカルの戰
アハジア	二二・四一—列下一・一八(列王紀略下)一・一七—九・二四	八五四—八五三年 八五三—八四二年	戰死 モアブの獨立 エリシヤの預言 臣エヒウに弑せらる
ヨラム			
エヒウ	九章、十章	八四二—八二五年	第四王朝を滅ぼす バアル禮拜を根絕す エホバ禮拜者ヨナダブ
ヨアハズ	一三・一—九	八一四—七九八年	國勢の衰頹 スリヤの壓迫
ヨアシ	一三・一〇—二一	七九八—七八三年	エリシヤ死す
ヤラベアム(二世)	一四・二三—二九	七八三—七四二年	ヨナの預言 アモスの預言 ホゼアの預言 內治外交の成功 領土の擴張 經濟的大發展
ザカリア	一五・八—一二	六ケ月	臣シヤルムに弑せらる
シヤルム	一五・一〇—一五	一ケ月	第五王朝を滅ぼす
メナヘム	一五・一四—二一	七四二—七三七年	メナヘムに弑せらる 第六王朝を滅ぼす
ペカヒヤ	一五・二三—二五	七三七—七三六年	アツスリヤに朝貢 臣ペカに弑せらる

アハズ	十六章	七五六—七八年	イザヤの預言 スリア・イスラエル同盟の脅嚇 ダマスコ王國の滅亡（七三二年） アッスリヤに朝貢 イザヤの感化 宗教改革 反アッスリヤ政策 アッスリヤ王の來襲 エルサレム救はる バビロン王の使來訪 反預言的異教の輸入 アッスリヤ政策 イザヤの殉教？ 反預言的 申命記の發見 大宗教改革 崇邱の廢止 パロネコと戰ひ死す	
ヒゼキヤ	十八章—廿章	七二七—六九九年		
マナセ	二一・一—八	六九八—六四三年		
アモン	二一・九—二六	六四二—六四〇年		
ヨシア	二二・一—二三・三〇	六四〇—六〇八年		
ヨアハズ	二三・三〇—二四	三ケ月	エレミヤ預言の初期 ゼファニヤの預言 ハバククの預言 ヨシア王の子 埃及に曳き行かる ヨシア王の子 アッスリヤの滅亡（六〇六年） 新バビロン帝國建設 カルケミシの戰 バビロン軍の來襲 王及び上層階級の虜囚 所謂第一虜囚（五九七年）	
ヨヤキム	二三・二四—二四・五	六〇八—五九七年		
ヨヤキン（エコニヤ）	二四・六—一六	三ケ月		
ゼデキヤ	二四・一七—二五・二一	五九七—五八六年	青年エゼキエルも共にヨシア王の子 バビロンに叛く エルサレム陷落 南王國滅亡	
滅亡後	二五・二二—三〇	五八六—五六一年	ゲダリヤ知事となる	

ペカ	一五・二五—三一	七五六—七三〇年	第七王朝を滅す アッスリヤの來侵	
ホセア	十七章	七三〇—七二一年	北王國滅亡 アッスリヤ王サルゴン サマリアを陷る 上層階級の虜囚 アッスリヤ下層民の來住	

イシマエルこれを殺す
猶太人埃及に遁る
エレミヤも埃及に曳きゆかる
エホヤキン王バビロンの獄より出さる

（渡邊善太氏著「舊約書の文學」による）

□

列王紀略上卷の内容は、概略左の如くである。

第一　ダビデの最期とソロモンの即位（列上一・一―二・一一）

（一）アドニヤの僭位とソロモンの即位（一・一―五三）

（二）ダビデの遺言とその最期（二・一―一一）

第二　ソロモンの榮華とその末路（二・一二―一一・四三）

（一）ソロモンの正しき審判（三・一二―四六）

（二）ソロモンの祈とその應驗（三・一―四・三四）

（三）神の家の建立と獻堂式（五・一―八・六六）

（四）ソロモンの智慧とシバの女王の來訪（九・一―一〇・二九）

（五）ソロモンの失敗（一一・一―四三）

第三　王國の分裂（一二・一―一六・三四）

（一）レハベアムと十の支派の離反（一二・一―三三）

（二）ヤラベアム（一三・一―一四・三一）

（三）アサ（一五・一―二四）

（四）イスラエルの諸王（一五・二五―一六・三四）

第四　預言者エリヤとアハブ（一七・一―二二・五三）

（一）エリヤとザレパテの女（一七・一―二四）

（二）カルメル山に於けるエリヤ（一八・一―四六）

（三）荒野とホレブ山に於けるエリヤ（一九・一―二一）

民衆の聖書

列王紀略（上）

山室軍平著

一　老いたるダビデ

（列王紀略上第一章一―三一）

一 爰にダビデ王年邁みて老い、寢衣を衣するも溫まらざりければ、二 其臣僕等彼にいひけるは、王わが主のために一人の若き處女を求めしめて、之を王の前にたちて王の左右となり、汝の懷に臥して王わが主を暖めしめんと。三 彼等乃ちイスラエルの四方の境に美き童女を求めて、シュナミ人アビシャグを得て之を王に携れ來れり。四 此童女甚だ美くして王の左右となり、王に事へたり。然れど王之と交はらざりき。五 時にハギテの子アドニヤ自ら高くし、我は王とならんと言ひて、己の爲に戰車と騎兵および自己の前に驅ける者五十人を備へたり。六 其父は彼が生れてより已來、汝何故に然するやと言ひてかれを痛ましめし事なかりき。アドニヤも亦容貌の甚だ美き者にて、アブサロムの次に生れたり。

七彼ゼルヤの子ヨアブおよび祭司アビヤタルと商議ひしかば、彼等之に從ひゆきて助けたり。八されど祭司ザドクとエホヤダの子ベナヤと預言者ナタン、およびシメイとレイならびにダビデに屬したる勇士はアドニヤに與せざりき。九アドニヤ、エンロゲルの近邊なるゾヘレテの石の傍にて羊と牛と肥畜を宰りて、王の子なる己の兄弟および王の臣僕なるユダの人を盡く請けり。一〇されども預言者ナタンとベナヤと勇士とおのれの兄弟ソロモンとを招かざりき。一一爰にナタン、ソロモンの母バテシバに語りていひけるは、汝ハギテの子アドニヤが王となれるを聞かざるか。然るにわれらの主ダビデはこれを知らざるなり。一二されば請ふ、來れ我汝に計を授けて、汝をして己の生命と汝の子ソロモンの生命を救はしめん。一三汝往きてダビデ王の所に入り、之にいへ、王わが主よ、汝は婢に誓ひて汝の子ソロモンは我に繼いで王となり、わが位に坐せんといひ給ひしにあらずや。然るにアドニヤ何故に王となれるやと。一四われまた汝が尙其處にて王と語ふ時に、汝に次いて入り、汝の言を證うすべしと。一五是においてバテシバ寢室に入りて王の所に至るに、王は甚だ老いてシュナミ人アビシャグ王に事へ居たり。一六バテシバ身を鞠め王を拜す。王いふ、何なるや。一七かれ王にいひけるは、わが主汝は汝の神エホバを指して婢に汝の子ソロモンは我に繼いで王となりわが位に坐せんと誓ひ給へり。一八然るに視よ、今アドニヤ王となれり。而して王わが主汝は知り給はず。一九彼は牛と肥畜と羊を饒く宰りて、王の諸子および祭司アビヤタルと軍の長ヨアブを招けり。されど汝の僕ソロモンをば招かざりき。二〇汝王わが主よ、イスラエルの目皆汝に注ぎ、汝が彼等に誰が汝に繼いで王わが主の位に坐すべきを告ぐるを望む。二一王わが主の其父祖と共に寢り給はん時に、我とわが子ソロモンは罪人と見做さるゝにいたらんと。二二バテシバ尙王と語ふうちに、視よ、預言者ナタンも亦入りきたりければ、二三人々王に告げて、預言者ナタン此にありと曰ふ。彼王のまへに入り、地に伏して王を拜せり。二四而してナタンいひけるは、王わが主汝はアドニヤ我に繼いで王となり、わが位に坐すべしといひたまひしや。二五彼は今日下りて牛と肥畜と羊を饒く宰りて、王の諸子と軍の長等と祭司アビヤタルを招けり。しかして彼等はアドニヤのまへに飲食して、アドニヤ王壽かれと言ふ。二六されど汝の僕なる我と祭司ザドクと、エホヤダの子ベナヤと汝の僕ソロモンとは彼請かざるなり。二七此事は王わが主の爲したまふ所なるか。然るに汝誰が汝に繼いで王わが主の位に坐すべきを僕に知らせたまはざるなりと。二八ダビデ王答へていふ、バテシバをわが許に召せと。彼乃ち王のまへに入りて王のまへにたつに、二九王誓ひていひけるは、わが生命を諸〻の艱難の中に救ひ給ひしエホバは活く。三〇我がイスラエルの神エホバを指して誓ひて、汝の子ソロモン我に繼いで王となり、我に代りてわが位に坐すべしといひし如くに、我今日爲すべしと。三一是においてバテシバ躬を鞠め、地に伏して王を拜し、願くはわが主ダビデ王長久に生きながらへ給へといふ。

◎ダビデは七十歲になつて、頽然として老いた。先頃流行した疫病の際には、幸に免れたけれども、何分とる年には逆ふこと能はず、殊に冬の氣候には、寒を覺ゆること人一倍はげしく、襲衣をしても溫らない故、若き處女の體溫に暖めらるゝ工夫

をしたといふのは、隨分窮したものといはねばならぬ。此の如く如何なる王侯貴人も、又は壯年血氣の者も、年を重ぬれば老い、老いては衰弱して、遂に死に至るのが、世の常である。或は秦の始皇帝の如く、不老不死の藥を遠國に求めた者もあれど、遂に之を見出した例がない。そこで大切なるは、私共が肉の生命以上に永遠の生命を望み、物質よりも以上に、靈のものを求むることである。斯て私共は使徒パウロと共に、「我らは落膽せず、我らの外なる人は壞るれども、內なる人は日々に新なり。それ我らが受くる暫くの輕き患難は、極めて大なる永遠の重き光榮を得しむるなり。我らの顧みる所は見ゆる者にあらで、見えぬ者なればなり。見ゆる者は暫時にして、見えぬ者は永遠に至るなり。」（コリ後四・一六—一八）と、いふことが出來よう。（一—四）

◎ダビデの長子アムノンと、（サム後一三・二九）三男アブサロムとは、（サム後一八・一四）前に非業の最期を遂げ、次男ギレアブ（サム後三・三）は、多分早く死んだのであらう。こゝに四男アドニヤなる者あり。父ダビデの老衰した狀を見て、自ら高くし、「我は王とならん」と言ひて、己の爲に戰車と騎兵および、自己の前に驅ける者五十人を備へた。

その父は「彼が生れてより已來、汝何故に然するやと言ひて、かれを痛ましめし事なかりき」とあり。如何に彼が我儘育であつたか、察せらるる。諺に「子を罰せぬ親は、子に罰せらるゝ」とあり。その子の惡を懲しめない者は、必ず自らの怠慢を懲しめらるゝ時が來ることを、いうたのである。ブース夫人（カサリン）は、子に服從を教へるのを極めて大切のことゝ見做し、常にいはれた。「子供等が神をみとめて、その御旨に從ふことを學ぶまでは、親が神になり代つて、彼等を養育するのであるから、彼等をして早くから、親に服從することを學ばしめ、やがて又、自ら進んで神に從ふに至らしめねばならぬ」と。如何にも道理ある言といはねばならない。（五、六）

◎斯てアドニヤは、將軍ヨアブ、祭司アビヤタル等と商議すると、彼等は往いて、之に從ひ助けたといふのである。ヨアブもアビヤタルも共に、ダビデから重用せられ、此の時は早や、どちらも功成り、名遂げて、その上に要むる所もなかつたであらうに、何を苦しんでアドニヤが、自ら王たらんとするのを、助ける氣にはなつたものか、一圓合點のゆかぬ話である。或はアドニヤが、「何分宜しく賴む」と頭を下げて賴んだ爲

に、後へ退けなくなり、つひ之に味方する考になつたのであらうか。それにしても餘りに情實に搦まれ、大義名分を忘るゝ致方といはねばならない。所謂「麒麟も老いては駑馬に劣る」で、彼等は折角い〳〵年まで生存へ、反つてその晩節を辱しめる樣なことを、仕出かしたものである。それにつけても私共は警戒して、よく始あり、又よく終ある聖徒の生活を、營みたきものである。(七—一〇)

◎預言者ナタンは、前にダビデが、ウリヤの妻バテシバを納れた時、侃侃諤諤として正面から之を譴責した。ところがダビデもバテシバも、共に謙つて彼のいふ所を聽き容れ、悔改めてその敎を請ふに至つたのである。したがつて此の度、アドニヤが、自ら王とならんと企つるに際しても、ナタンが先づ宮中に入つて、叛亂を未然に救はん爲に盡力して居るのを見るは、喜ぶべきことである。之を後にヘロデ・アンテパスが、兄弟ピリポの妻ヘロデヤを奪うたのを、バプテスマのヨハネから諫められて、之を獄に投じ、やがてその首を刎ねたのと對照すれば、(マタ一四・一—一二)ダビデとバテシバとの出方は、比較にならぬ程よかつたのである。とかく人の顏を冒かして直諫する程の人が、まさかの時に、一番のたよりになるものである。私共はナタンと同じやうに、眞直に神の御旨を傳ふるその僕を、敬重せねばならぬ。(一一—一四)

◎バテシバは先づ入つてダビデに見え、その親心から、我が子ソロモンの上を案じて、懇ろに訴ふる所あり。そこへ又預言者ナタンが入り來つて、國民の福祉の爲に王が速にその後繼者を確定し、之を中外に發表せんことを求めた故、ダビデもその氣になり、早速その取計を命ずるに至つたのである。此の如く、人は往々他から勸め勵まされねば、つひつひ油斷して、その大切な職分を、なほざりにし勝のものである。罪の悔改に於ても、信仰に於ても、獻身に於ても、服從に於ても、人は稍もすれば、他人から督促せられて後でなくば、自發的に行ふことを難んずるものである。それ故天の使は、ロトとその二人の娘の手を取りて、强ひてソドムの市外に引出したやうな例もあり、(創一九・一六)ヘブル書には又、「汝等のうち誰も、罪の誘惑によりて頑固にならぬやう、今日と稱ふる間に日々互に相勸めよ。」(ヘブ三・一三)「互に相顧み、愛と善き業とを勵まし、集會をやむる或人の習慣の如くせず、互に勸め合ひ云々」(ヘブ一〇・

二四、二五）などと敎へてある。私共は互に勸め、互に勵ましつゝ、神の御業を行はねばならない。（一五―二七）

◎ダビデはバテシバに向うていうた。「わが生命を諸の艱難の中に救ひ給ひしエホバは活く。我がイスラエルの神エホバを指して誓ひて、汝の子ソロモン我に繼いで王となり、我に代りてわが位に坐すべしといひし如くに、我今日爲すべし」と。彼はその以前にも既に早くから、やがてソロモンが神の御旨によつて王位に卽くべきことを、表示して居つたが、（歷上二二・九、同二三・一）それを愈々此の際、實現することに決定したのである。彼はいうた。「わが生命を、諸の艱難の中に救ひ給ひしエホバは活く」と。實際彼は諸の艱難の中に、エホバの救を、重ね重ね經驗した人であつた。「泣いて三度の飯を食つた人でなくば、ほんとうに神の有難いことはわからない。」とも、亦「たゞ艱難に遭ひたる事なき者のみ、奇蹟の時代は過ぎ去りたりといふ。」ともあり。艱難辛苦は神が人を啓發し、訓戒し、懲治し給ふ手段に他ならない。ダビデは過去に、幾多の艱難試煉を突破せしめ給うた神が、又今後我が子ソロモンを指導し、之に保護を

加へ給ふべきことを信じ、喜んで彼をその後繼者としたのである。まことに神は、「われらの避所、また力、なやめるときの最ちかき助」（詩四六・一）にて在し給ふ。（二八―三一）

二　ソロモンの卽位

（列王紀略上第一章三二―五二）

三二ダビデ王いひけるは、わが許に祭司ザドクと預言者ナタン及びエホヤダの子ベナヤを召せと。彼等乃ち王のまへに來る。三三王彼等にいひけるは、汝等の主の臣僕を伴ひわが子ソロモンをわが身の騾に乘せ、彼をギホンに導き下り、三四彼處にて祭司ザドクと預言者ナタンは彼に膏をそゝぎて、イスラエルの上に王と爲すべし。而して汝ら喇叭を吹いてソロモン王壽かれと言へ。三五かくして汝ら彼に隨ひて上り來るべし。彼は來りてわが位に坐し、我に代りて王となるべし。我彼を立ててイスラエルとユダの上に主君となせりと。三六エホヤダの子ベナヤ、王に對へていひけるは、アメン、れがはくは王わが主の神エホバ然言ひたまはんことを。三七れがはくはエホバ、王わが主とともに在せしごとく、ソロモンとともに在して、その位をわが主ダビデ王の位よりも大ならしめたまはんことを。三八斯て祭司ザドクと預言者ナタンおよびエホヤダの子ベナヤ、竝びにケレテ人とペレテ人下り、ソロモンをダビデ王の

騾に乘せて之をギホンに導きいたれり。 三九而して祭司ザドク幕屋の中より膏の角を取りてソロモンに膏をそゝぎて王となせり。而して彼等其處より歡びて上るが故に城邑は喧囂し。汝らが聞ける聲音は是なり。 四六又ソロモン國の位に坐し、 四七且王の臣僕來りてわれらの主ダビデ王に祝を陳べて、願くは汝の神ソロモンの名を汝の名よりも美くし、其位を汝の位よりも大ならしめ給へと言へり。而して王は牀の上にて拜せり。 四八王また斯いへり、イスラエルの神エホバはほむべきかな。エホバ今日わが位に坐する者を與へ給ひて、わが目亦これを見るなりと。 四九アドニヤと共にある賓客皆愕き起ちて、各其途に去りゆけり。五〇 玆にアドニヤ、ソロモンの面を恐れ、起ちて往き壇の角を執へたり。 五一或人ソロモンに告げていふ、アドニヤ、ソロモン王を畏る。彼壇の角を執へて、願くはソロモン王今日我に劍をもて僕を殺さじと誓ひ給へと言ひたりと。 五二ソロモン いひけるは、彼もし善人となるならば、其髪の毛一すぢも地におちざるべし。然れど彼の中に惡の見ゆるあらば死なしむべしと。 五三ソロモン王を拜しければ、ソロモン彼に汝の家に往けといへり。

◎祭司ザドクと、預言者ナタン、及びエホヤダの子ベナヤ等は、いづれも忠誠の士であるから、アドニヤが宴會を催すに當りても、けむたがつて之を呼ばなかつた。そのアドニヤから烟むたがられた人々こそ、老いたるダビデにとつては、斯る場合に最も賴りとすべき人々であつた。それ故ダビデは取敢ず彼等に命じ、ソロモンを王の馬に乘せ、親兵を引具して、エルサレム市の東部ギホンに導きくだり、其處にてソロモンに膏をそゝぎ、彼をイスラエル王となすべきことを命じた。或人の言に、「凡ての人からよくいはるゝ者も、凡ての人から惡くいはるゝ者も、共に信用するに足りない。ただ善人から善くいはれ、惡人から惡くいはるゝ者のみ、眞に賴み甲斐ある人物である」とのことであつた。今ザドクとナタンとベナヤとが、アドニヤから憚られただけ、それだけダビデから信賴せられたといふのは、大きに意味あることである。 私 共は善人に喜ばるる爲には、惡人に厭はるゝことを甘んぜねばならぬ。「凡そ基督耶蘇に在り

て、敬虔をもて一生を過さんと欲する者は、迫害を受くべし」（テモ後三・一二）といふやうな、御教もあるではないか。（三二―三五）

◎ベナヤは王に答へていうた。「ねがはくはエホバ、王わが主とともに在せしごとく、ソロモンとともに在して、その位をわが主ダビデ王の位よりも、大ならしめたまはんことを」と。これはソロモンがダビデにも勝りて、大なる君主とならんことを、祈つたものである。どんな親でも、その子が親より優れた者となるやうにと祈られて、腹を立てる者はない。反つてさうした祈の應驗せられんことを願ひ、その爲に力を盡さうといふのが、親の念願である。それ故耶蘇は曾て、「汝等のうち、誰かその子パンを求めんに石を與へ、魚を求めんに蛇を與へんや。然らば、汝ら惡しき者ながら、善き賜物をその子らに與ふるを知る。まして天にいます汝らの父は、求むる者に善き物を賜はざらんや」（マタ七・九―一一）と教へられた。私共はかうした親心から推しはかつて、神の愛を悟ることが出來るのである。（三六、三七）

◎斯て彼等はダビデから命ぜられた如く、ソロモンを王の馬に乘せ、之をギホンに導きいたり、祭司ザドクは幕屋の中より膏の角をとりて、ソロモンに膏をそゝぎ、然る後ラッパを吹きならし、人民は皆「ソロモン王萬歳」を唱へたのである。イスラエル人の習として、祭司と預言者と王との、三つの重要な役目を勤むる者は、その就任式の際、頭に膏をそゝがるゝといふのは、聖靈をそゝがることの型である。基督といふ名は、「膏そゝがれた者」といふことを意味する。耶蘇は神から膏そゝがれて、祭司と預言者と王と、三つの資格を一人に備へ給ふお方だから、基督と呼ばれ給ふのであつた。「主エホバの御靈われに臨めり。こはエホバわれに膏をそゝぎて、貧しき者に福音をのべ傳ふることを委ね、我を遣して心の傷める者をいやし、俘囚にゆるしをつげ、縛められたるものに解放をつげ云々。」（イザ六一・一）とイザヤがいうたのは、それである。私共も亦、その程度こそ異れ、各自聖靈によつて膏をそゝがれ居るべきものである。「汝らは聖なる者より油を注がれたれば、凡ての事を知る」（ヨハ壹二・二〇）とあるのは、そのことをいうたものである。（三八―四〇）

◎アドニヤ、及び彼と共に居たる賓客は、その食事を終へた頃、忽ち町の賑々しい物

音を聞き、「こは何事か」と驚いて居る所へ、祭司アビヤタルの子ヨナタンが來るのを見て、アドニヤはいうた。「汝は勇ある人なり。嘉音を持ち來れるならん」と。そこでヨナタンは、ソロモンが王位に登つたこと、又その卽位式の順序次第を物語つた。これは善良なるイスラエル人民にとりては、如何にも嘉音であつたに相違ない。然しながら自ら王とならんことを豫期したアドニヤと、その徒とにとつては、これくらゐあしき音信はなかつたのである。今善き音信の中の最も善き音信は、神の子耶蘇が罪人を救はん爲に、世に來り給うたといふ報知である。しかもこれは素直に神に從ふ者にとつては、何よりの惠であると共に、心を頑固にして、神に逆ふ者にとつては、何より迷惑な報知である。「救はるゝ者にも亡ぶる者にも、我らは神に對して基督の香ばしき馨なり。この人々は死よりいづる馨となりて死に至らしめ、かの人々は生命より出づる馨となりて生命に至らしむ。」（コリ後二・一五、一六）と、パウロがいうたのは、同じ道理を語つたものである。（四一—四八）

◎アドニヤと共にありし賓客は、皆驚き、起ちて、其の途に去りゆいたとある。諺

にも、「降り坂と自分の爲には、走らぬ者なし」といふ如く、彼等はおのおの己が利害を考慮して、勝手に歸りゆいたのである。斯してアドニヤがその味方を造らん爲の宴會は、全く不成功に終つた。ナポレオンがロシヤに攻め入らんとする前日、或る貴婦人が彼に向ひ、「人は計畫すれども、神は處理し給ふのであるから、御注意なされ」と忠告すると、彼は傲然として答へて、「否、私が計畫し、私が處理するのである」というたが、それから數日の後、彼は事志と違うて、モスクワにて慘敗を遂げ、以來彼の運命が傾きはじめ、復挽回の途がなかつたのである。「人の心には多くの計畫あり。されど惟エホバの旨のみ立つべし。」（箴一九・二一）それにつけても私共は、己が小き私の爲に小刀細工をするのでなく、神の大なる御力に賴り、その大御心を行はんことを、求むべきものである。（四九）

◎アドニヤは百計盡きて、起ちて往き、祭壇の角を執へ、「願くはソロモン王、今日我に劒をもて僕を殺さじと誓ひ給へ」といひ遣つた。祭壇は昔から、犯罪人の遁れ場となつて居つたからである。（出一二・一三、一四）ソロモンは答へて、「彼もし善人となるなら

ば、其の髪の毛一すぢも地におちざるべし。然れど彼の中に惡の見ゆるあらば、死なしむべし」といひ、アドニヤを壇より曳き下し、その家に放ち歸らしめた。いひかへれば、ソロモンはアドニヤに、其の「悔改に相應しき果を結べ」（マタ三・八）と要求したのであつた。それと同じやうに私共が若し神の前に、其の犯せる罪を悔改めるといふなら、私共はどうしても、その悔改にふさはしき果を結ばねばならぬ。何故かといふに、「すべき善き果を結ばぬ樹は、伐られて火に投入れらる」（マタ七・一九）べきものだからである。（五〇―五三）

三　遺　命

（列王紀略上第二章一―二五）

一ダビデ死ぬる日近よりければ、其子ソロモンに命じていふ、二我は世人の皆往く途に往かんとす。汝は強く丈夫のごとく爲れ。三汝の神エホバの職守を守り、其道に歩行み、其注意と其誡命と其律例と其證言とを、モーセの律法に錄されたる如く守るべし。然らば汝凡て汝の爲すところと凡て汝の向ふところにて榮ゆべし。四又、エホバは其嘗に我の事に付きて語りて、若汝の子等其道を愼み、心を盡し、精神を盡して、眞實をもて吾前に歩まば、イスラエルの位に上る人汝に缺ぐることなかるべしと言ひ給ひし言を堅うし給はん。五又汝はゼルヤの子ヨアブが我に爲したる事、即ち彼がイスラエルの二人の軍の長ネルの子アブネルとエテルの子アマサに爲したる事を知る。彼此二人を切殺し、太平の時に戰の血を流し、戰の血を己の腰の周圍の帶と其足の履に染けたり。六故に汝の智慧にしたがひて事を爲し、其白髪を安然に墓に下らしむるなかれ。七但しギレアデ人バルジライの子等には恩惠を施し、彼等をして汝の席にて食ふ者の中にあらしめよ。彼等はわが汝の兄弟アブサロムの面を避けて逃げし時、我に就きたるなり。八視よ、又バホリムのベニヤミン人ゲラの子シメイ汝とともに在り。彼はわがマハナイムに往きし時、厲しき詛言をもて我を詛へり。然れども彼ヨルダンに下りて我を迎へたれば、我エホバを指して誓ひて、我劍をもて汝を殺さじといへり。九然りといへども彼を辜なき者とする勿れ。汝は智慧ある人なれば、彼に爲すべき事を知るなり。血を流して其白髪を墓に下すべしと。一〇斯てダビデは其父祖と偕に寢りてダビデの城に葬らる。一一ダビデのイスラエルに王たりし日は四十年なりき。即ちヘブロンにて王たりし事七年、エルサレムにて王たりし事三十三年。一二ソロモン其父ダビデの位に坐し、其國は堅固く定まりぬ。一三爰にハギテの子アドニヤ、ソロモンの母バテシバの所に來りければ、バテシバいひけるは、汝は平穩なる事のために來るや。彼いふ平穩なる事のためなり。一四彼又いふ、我は汝に言さんとする事ありと。バテシバいふ、言されよ。一五かれいひけるは、汝の知る如く國は我の有にして、イスラエル皆其面を我に向けて王となさんと爲り。然るに國は轉りてわが兄弟の有となれり。其彼の有となれるはエホバより出たるなり。一六今我一の願を汝に求む。請ふわが面を黜くるなかれ。

バテシバかれにいひけるは、言されよ。一七彼いひけるは、請ふソロモン王に言ひて彼をしてシュナミ人アビシャグを我に與へて妻となさしめよ。彼は汝の面を黜けざるべければなり。一八バテシバいふ、善し。我汝の爲に王に言はんと。一九かくてバテシバ、アドニヤの爲に言はんとてソロモン王の許に至りければ、王起ちて彼を迎へ、彼を拜して其位に坐なほり、王母のために坐を設けしむ。乃ち其右に坐せり。二〇しかしてバテシバいひけるは、我一の細小き願を汝に求む。わが面を黜くるなかれ。王かれにいひけるは、母上よ、求め給へ。我汝の面を黜けざるなり。二一彼いひけるは、請ふシュナミ人アビシャグをアドニヤに與へて妻となさしめよ。二二ソロモン王答へて其母にいひけるは、何ぞアドニヤのためにシュナミ人アビシャグを求めらるゝや。彼のために國をも求められよ。彼は我の兄なればなり。彼と祭司アビヤタルとゼルヤの子ヨアブのために求められよと。二三ソロモン王乃ちエホバを指して誓ひていふ、神我に斯なし、又重れて斯なし給へ。アドニヤは其身の生命を喪はんとて此言を言ひいだせり。二四我を立てゝわが父ダビデの位に上らしめ、其約せし如く我に家を建て給ひしエホバは生く。アドニヤは今日戮さるべしと。二五ソロモン王エホヤダの子ベナヤを遣はしければ、彼アドニヤを擊ちて死なしめたり。

◎ダビデは、死ぬる日の近づいたことを知り、その子ソロモンに遺命して、「我は世人の皆往く途に往かんとす云々」というた。死は人生の旅路に於ける終局ではなくて、ただ通過驛である。其處を通過して永遠の生命に入るか、又は永遠の滅亡に至るかゞ

定まるのである。これは世の人の皆往く途である。たゞ其の多くの者は油斷して、備をして居ない爲に、まさかの場合に狼狽する例のみ多いのである。歌に、「皆人の、往くべき途と、聞きしかど、昨日今日とは、思はざりしに。」とあるのは、それである。然しながら耶蘇は仰せられた。「われは道なり、眞理なり、生命なり。我に由らでは誰にても父の御許にいたる者なし。」（ヨハ一四・六）と。私共は耶蘇てふ道を歩んで、父の御許に到るべき、豫ての覺悟が大事である。（一、二）

◎ダビデはソロモンに向うて、彼が心を盡し、精神を盡し、眞實をもて神の誡命を守り、その御前に歩むに於ては、其の爲す所がすべて榮ゆべく、後世子孫にまでも神の惠の豐に加へらるべきことを、說示した。耶蘇も後に、「さらば凡て、我がこれらの言をききて行ふ者を、磐の上に家をたてたる慧き人に擬へん。雨降り流漲り、風ふきて其の家をうてど倒れず、これ磐の上に建てられたる故なり。」（マタ七・二四、二五）と仰せられた。神に對する信仰を據所として立たぬ家も、國も、共に其の永續は六つかしいものと思はねばならぬ。（三、四）

◎ヨアブと、シメイとは、許し難き罪を犯したにも拘らず、ダビデが世を終る迄、その刑罰を免れて居つた。「惡しき事の報、速にきたらざるが故に、世の人心を專にして惡をおこなふ。」（箴八・一一）然しながら彼等が一切の所行を清算せらるべき時は、終に近づいたのである。之に反してバルジライは、ダビデが流寓漂泊の際、之に親切を盡した故、その子孫が報を受けんとして居るのである。「凡そわが弟子たる名の故に、この小き者の一人に、冷かなる水一杯にても與ふる者は、誠に汝らに告ぐ、必ずその報を失はざるべし。」（マタ一〇・四二）とあるのは、そのことである。「人の播く所は、その刈る所となる」（ガラ六・七）ものだからである。（五一九）

◎斯てダビデは、「其の父祖と偕に寢りて、ダビデの城に葬らる。」とあり。これはシオン山、卽ち後に神の宮を建てられた附近に、葬られたといふ意味である。ヨセホスの記す所によれば、ダビデの葬儀は非常に盛なものにて、その墓には彼の亡骸と共に、多分の金を納められた。それを千三百年の後、アンチオカスの時代に、大祭司ヒルカナスが發掘して、金三千タラント（金一タラントは我が約六萬圓）を得、それを公共のことに用ひたといふのである。ダビデは先祖たちと偕に寢つた。その如く死ぬるとは眠ることである。此の世にて眼を閉し、彼の世にてそれを見開くことである。基督は「死人の中より甦り、眠りたる者の初穗となり」（コリ前一五・二〇）給うた。すなはちパウロの言に、「それダビデは、その代にて神の御旨を行ひ、終に眠りて先祖たちと共に置かれ、かつ朽腐に歸したり。然れど神の甦へらせ給ひし者は朽腐に歸せざりき。」（使一三・三六、三七）とある通である。基督の福音は、私共に死後の生命を約束するものである。（一〇—一二）

◎アドニヤは自ら高くし、王とならんことを求めて、失敗したものである。宜しくその家に留り、謹愼の意を表し居るべき身でありながら、所謂「喉元過ぐれば熱さを忘るゝ」習。またぞろ例の野心が頭を擡げはじめたものと見え、彼はソロモンの母バテシバを通じて、亡父ダビデの妾であつたアビシャグを娶らんことを願ひ出た。これはアビシャグが美人であつた爲のみならず、（列上二・四）亡き王の妻妾は、その位を襲いだ王のみ、自由にし得べき、その時代の風習であつた故、彼がアビシャグを娶るのは、

或る程度に於て、彼がダビデの王位を襲いだことを意味し、さうしたことを手掛りに、他日機を得て今一度、王位を覬覦せんとの下心であつたことは疑がない。それにも拘らず、彼は之を公の沙汰とせず、バテシバを通じ、非公式の私事として取扱はんことを試みた所に、彼の狡猾さを見出さるゝのである。「人おのれの榮譽をもとむるは榮譽にあらず。おのれの心を制へざる人は、石垣なき壞れたる城のごとし。」(箴二五・二七、二八) アドニヤは宜しく克己自制を心掛くべき場合であつた。(一三—二二)

◎『世には冠を得んとして、反つて頭を失ふ者が少くない。』こゝに見ゆるアドニヤの如きは、その一例に過ぎない。彼はその王位に登りたい野心の爲に、かへつて反逆者として、その生命を失ふに至つたのである。彼は反省の機會を與へられた。(列上一・五三) 然しながら彼は反省しなかつた。耶蘇の譬話に、「或人おのが葡萄園に植ゑありし無花果の樹に來りて、果を求むれども得ずして、園丁に言ふ『視よ、われ三年きたりて此の無花果の樹に果を求むれども得ず。これを伐り倒せ、何ぞ徒らに地を塞ぐか。』答へて言ふ『主よ、今年も容したまへ、我その周圍を掘りて肥料せん。その後、果を結ばゝ善し、もし結ばずば伐り倒したまへ』」(ルカ一三・六—九) とあり。私共は機會の去らざる前に、神に立ち歸り、進んで悔改に相應しき、善き果を結ぶやうでありたい。(二三—二五)

四 信賞必罰

(列王紀略上第二章二六—四六)

二六王また祭司アビヤタルにいひけるは、汝の故田アナトテにいたれ。汝は死に當る者なれども、嚮にわが父ダビデのまへに神エホバの櫃を舁き、又凡てわが父の艱難を受けたる處にて汝も艱難を受けたれば、我今日は汝を戮さじと。二七ソロモン、アビヤタルを逐ひいだしてエホバの祭司たらしめざりき。斯エホバがシロにてエリの家につきて言ひ給ひし言應げたり。二八爰に其風聞ヨアブに達りければ、ヨアブ、エホバの幕屋に遁れて壇の角を執へたり。其はヨアブは轉りてアブサロムには隨はざりしかども、アドニヤに隨ひたればなり。二九ヨアブがエホバの幕屋に遁れて壇の傍に居ることソロモンに聞えければ、ソロモン、エホヤダの子ベナヤを遣はしいひけるは、往きて彼を擊てと。三〇ベナヤ乃ちエホバの幕屋にいたり、彼にいひけるは、王斯言ふ、出來れ。彼いひけるは、否、我は此に死なんと。ベナヤ反りて王に告げて、ヨアブ斯言ひ、斯我に答へたりといふ。三一王ベナヤにいひけるは、彼が言ふ如

く爲し、彼を擊ちて葬り、ヨアブが故なくして流したる血を我とわが父の家より除去るべし。三三又エホバはヨアブの血を其身の首に歸し給ふべし。其は彼は己よりも義く且善かりし二の人を擊ち、劍をもてこれを殺したればなり。即ちイスラエルの軍の長ネルの子アブネルと、ユダの軍の長エテルのアマサを殺せり。然るに吾父ダビデは與り知らざりき。三三されば彼等の血は長久にヨアブの首と其苗裔の首に歸すべし。然れどダビデと其苗裔と其家と其位には、エホバよりの平安永久にあるべし。三四エホヤダの子ベナヤ、即ち上りて彼を擊ち、彼を殺せり。彼は野にある己の家に葬らる。三五王乃ちエホヤダの子ベナヤをヨアブに代へて軍の長となせり。王また祭司ザドクをしてアビヤタルに代らしめたり。三六又王人を遣りてシメイを召して之に曰ひけるは、エルサレムに於て汝の爲に家を建てて其處に住み、其處より此にも彼にも出づるなかれ。三七汝が出てキデロン川を濟る日には、汝確に知れ、汝必ず戮さるべし。汝の血は汝の首に歸せん。三八シメイ、王にいひけるは、此言は善し。王わが主の言ひ給へける如く、僕然なすべしと。斯シメイ日久しくエルサレムに住めり。三九三年の後シメイの二人の僕ガテの王マアカの子アキシの所に逃げされり。人々シメイに告げていふ、視よ、汝の僕はガテにありと。四〇シメイ乃ち起ちて其驢馬に鞍置き、ガテに往きてアキシに至り、其僕を尋ねたり。即ちシメイ往きて其僕をガテより携來りしが、四一シメイのエルサレムよりガテにゆきて歸りしことソロモンに聞えければ、四二王人を遣りてシメイを召して之にいひけるは、我汝をしてエホバを指して誓しめ、且汝を戒めて、汝確に知れ。汝が出て此彼に歩く日には、汝必ず戮さるべしと言ひしにあらずや。又汝は我に我聞ける言葉は善しといへり。四三しかるに汝なんぞエホバの誓とわが汝に命じたる命令を守らざりしや。四四王又シメイにいひけるは、汝は凡て汝の心の知る諸〳〵の惡、即ち汝がわが父ダビデに爲したる所を知る。エホバ汝の惡を汝の首に歸したまふ。四五されどソロモン王は福祉を蒙らん。またダビデの位は永久にエホバのまへに固く立つべしと。四六王エホヤダの子ベナヤに命じければ、彼出てシメイを擊ちて死なしめたり。しかして國はソロモンの手に固く立てり。

◎祭司アビヤタルは曾て、ダビデの前に神の櫃を舁きたることあり。(サム後一五・二九)又曾てダビデと艱難を共にしたやうな經歷もあり。(サム前二二・二〇—二三)忠實に勤めてさへ居れば、ソロモンからも相當に敬意を拂はるべき筈であつたが、不幸にして彼は二心であつた。すなはちアドニヤが王とならんとの非望を懷けることを知りつゝ、之に加擔した。(列上一・七)その爲には彼は逐出され、祭司の任務を剝奪せらるゝことゝなつた。後にエリヤはイスラエル人の二心なるを戒め、「汝等何時まで二つの物の間にまよふや。エホバ若し神ならば之に從へ、されどバアル若し神ならば之に從へ。」(列上一八・二一)といふた。ヤコブの書に又、「罪人よ、手を潔めよ、二心の者よ、心を潔くせよ。」(ヤコ四・八)とあり。神は私共が一心をもて彼に仕へ、又一心をもて人に盡すこ

とを、求めて居給ふのである。アビヤタルが二心であつた結果は、多年前エホバがシロにて、エリの子孫につき、「視よ、時いたらん。我汝の腕と、汝の父祖の家の腕を絶ち、汝の家に老いたるもの无らしめん云々」（サム前二・三一）と仰せられた言は、應驗を見たのである。何故かといふに、アビヤタルはエリの血をひく後裔（サム前二二・二〇―二三、同一四・三）であつたからである。（二六、二七）

◎ヨアブはダビデの代にありては、智謀に富んだ、勇敢にして、よく戰ふ武將であつた。然しながら彼はいつしか、其の功名手柄に慢心し、終には王の命をも無視して、勝手なことを行ふに至つたのである。彼が擅に己よりも義しく、且善かりしイスラエル軍の長アブネルと、ユダの軍の長アマサとの、二人を殺した如きは、その最も甚しいものであつた。果はアドニヤに與してその非望を承認し、之と商議するに至つては、（列上一・七）眞に沙汰の限といはねばならぬ。ソロモンがベナヤをして、彼を擊殺さしめたのは、實際止むを得ないことであつた。彼は力量餘あつて、忠誠の念に缺ぐる所があつた。箴言に、「わが子よ、エホバと王とを畏れよ、叛逆者に交ること勿れ。

かゝる者等の災禍は速におこる。」（箴二四・二一、二二）とあり。神の前に眞實なる人は、固よりまたその君國に對しても、忠誠なるべき筈のものである。（二八―三四）

◎ソロモンはヨアブの代に、ベナヤを擧げて軍の長となし、又アビヤタルに代へてザドクを祭司たらしめた。當時ソロモンは、まだ漸く二十歳を越えたばかりの青年にて、殊に國事多端の折柄に際し、その左右にあつて彼を輔佐する、有力なる人材を要することが、最も急であつた。しかも彼が、丁度その需用に應ずべきベナヤとザドクとの如き人物を得たのは、何より喜ばしいことであつた。ギリシャの昔に、白晝提灯をともして街頭を行く者があり。「何をして居るのか」と尋ねると、答へて、「人間を探して歩くのである」というた。此の如く、眞の人材は何時の時代にも、至つて見出し難いものである。古い歌に、「人多き、人の中にも、人ぞなき、人になれ人、人になせ人」とあり。どうか私共は神の御助によつて、幾分でもその時代に貢獻する所ある、有用の器たりたきものである。（三五）

◎シメイは、ダビデがアブサロムを避けて逃れ出でし時、出て來てさんざんに彼を辱

しめ、且呪うたことがあり。(サム後一六・五)その處罰として、彼は一生エルサレムに居住すべく、邑から外に出ることを禁ぜられた。「汝が出てキデロン川を濟る日には、汝確に知れ、汝必ず戮さるべし。汝の血は汝の首に歸せん。」といふのが、彼に對するソロモンからの嚴命であつた。それと似て今日の私共は又、至上者をその住居とし、全能者の蔭にやどつて居るべき者である。(詩九一・一、九)それを離れて迷ひ出づれば、私共の靈魂の生命はあやふい。耶蘇も曾てその道理を教へて、「我に居れ、さらば我なんぢらに居らん。枝もし樹に居らずば、自ら果を結ぶこと能はぬごとく、汝らも我に居らずば亦然り。我は葡萄の樹、なんぢらは枝なり。人もし我にをり、我また彼にをらば、多くの果を結ぶべし。汝ら我を離るれば、何事をも爲し能はず。」(ヨハ一五・四、五)と仰せられた。私共の安全と幸福と又有用なるとは、一にかゝつて、私共が耶蘇に居るか否かにある故、決してその埒外に迷ひ出でぬやう、不斷の注意が肝要である。(三六—三八)

◎三年の後、シメイは二人の僕が逃亡して、ガテに往いたのを、追ひかけてゆき、之

を連戻した。彼の擅に、エルサレムを離れたことがソロモンに聞えると、ソロモンは彼が豫ての約束に反いたのを咎め、之を嚴刑に所することゝなつた。斯してシメイは僕を得た代に、己を失うたのである。幼兒を僕に托して旅行した人があり。數月の後家に歸ると、僕は幼兒の玩具衣服等を持ち來り、何一つ紛失せぬやう、保存しおきたる苦心を、さも誇りがに語り出づるのであつた。そこで肝心な幼兒はどうなつたかと尋ねると、「お子樣は死亡なされました」というたさうである。しかしながら、いくら幼兒の玩具衣服のみ大事に保管しても、肝心な幼兒が死んだのでは、何の役にも立たないではないか。今シメイが二人の僕を、逃亡した先から引戻したのはよいが、その爲に自分の生命を失ふことゝなつたのは、之をたゞ利害の上から打算しても、全く引合はない算段をしたものと、いはねばならない。「人、全世界を贏くとも、己が生命を損せば、何の益あらん。又その生命の代に何を與へんや。」(マタ一六・二六)といふ御言は、この場合に最も適切なる教訓であると思ふ。(三九—四三)

◎ソロモンはシメイを死刑に付す前に、彼に告げて、「汝は凡て汝の心の知る諸の惡、

卽ち汝がわが父ダビデに爲したる所を知る。エホバ汝の惡を汝の首に歸したまふ」といふた。その如く人の諸の惡は、凡てその心に之を知るのである。「人の靈魂はエホバの燈火にして、人の心の奥を窺ふ。」（箴二〇・二七）とある如く、良心は內から私共の行爲を審くものである。又私共の罪惡を指摘し、これが悔改を促してやまないものである。畢竟良心の聲は神の聲である。すなはち聖靈が、私共の胸中に語り給ふところの御聲である。耶蘇の御言に、「かれ來らんとき、世をして罪につき、義につき、審判につきて、過てるを認めしめん。」（ヨハ一六・八）とあるのも、またペンテコステの日に、人々が聖靈に感じ、その罪を示されて、皆「心を刺され」（使二・三七）たといふのも、全くこれが爲である。私共は絕えず良心の囁きに耳を傾け、只管御旨にしたがうて歩んで居たきものである。（四四—四六）

五　ソロモンの智慧

（列王紀略上第三章）

一ソロモン、エジプトの王パロと緣を結び、パロの女を娶りて之を携來り、自己の家とエホバの家とエルサレムの周圍の石垣を建築ることを終るまで、ダビデの城に置けり。二當時まで、エホバの名のために建てたる家なかりければ、民は崇邱にて祭を爲せり。三ソロモン、エホバを愛し、其父ダビデの法憲に歩めり。但し彼は崇邱にて祭を爲し、香を焚けり。四爰に王ギベオンに往きて其處に祭を爲さんとせり。其は彼處は大なる崇邱なればなり。卽ちソロモン一千の燔祭を其壇に獻げたり。五ギベオンにてエホバ夜の夢にソロモンに顯れ給へり。神いひたまひけるは、我何を汝に與ふべきか。汝求めよ。六ソロモンいひけるは、汝は汝の僕わが父ダビデが誠實と公義と正心を以て、汝と共に汝の前に歩みしに因りて、大なる恩惠を彼に示したまへり。又汝彼のために此大なる恩惠を存へて、今日のごとくかれの位に坐する子を彼に賜へり。七わが神エホバ、汝は僕をして我父ダビデに代りて王とならしめ給へり。而るに我は小き子にして出入することを知らず。八且僕は汝の選みたまひし汝の民の中にあり。卽ち大なる民にて其數衆くして、數ふることも書すことも能はざる者なり。九是故に聽き別くる心を僕に與へて、汝の民を鞫かしめ、我をして善惡を辨別ふることを得さしめたまへ。誰か汝の此夥多しき民を鞫くことを得んと。一〇ソロモン此事を求めければ、其言主の心にかなへり。一一是において神かれにいひたまひけるは、汝此事を求めて己の爲に長壽を求めず。又己の爲に富有をも求めず。又己の敵の生命をも求めずして、惟訟を聽き別くる才智を求めたるに因りて、一二視よ、我汝の言に循ひて爲せり。我汝に賢明く聰慧き心を與ふれば、汝の先には汝の如き者なく、汝の後にも汝の如き者興らざるべし。一三我亦汝の求めざる者、卽ち富と貴とをも汝に與ふれば、汝の生の涯、王等の中に汝の如き者あら

ざるべし。一四又汝若汝の父ダビデの歩みし如く吾道に歩みて、わが法憲と命令を守らば我汝の日を長うせんと。一五ソロモン目寤めて視るに、夢なりき。斯てソロモン、エルサレムに至り、エホバの契約の櫃の前に立ち、燔祭を獻げ、酬恩祭を爲して、其諸の臣僕に饗宴を爲せり。一六爰に娼妓なる二人の婦、王の所に來りて其前に立ちしが、一七一人の婦いひけるは、わが主よ、我と此婦は一の家に住む。我此婦と偕に家にありて子を生めり。一八然るにわが生みし後第三日に、此婦もまた生めり。而して我等偕にありき。家には他人の我らと偕に居りし者なし。家には只我等二人のみ。一九然るに此婦其子の上に臥したるによりて、夜の中に其子死にたれば、二〇中夜に起きて婢の眠れる間にわが子をわれの側より取りて、之を己の懐に臥さしめ、己の死にたる子をわが懐に臥さしめたり。二一朝に及びて我わが子に乳を飲ませんとて興きて見るに死にぬたり。我朝に至りて其を熟く視たるに、其はわが生めるわが子にはあらざりしと。二二今一人の婦いふ、否、活けるはわが子、死れるは汝の子なりと。此婦いふ、否、死れるは汝の子、活けるはわが子なりと。彼等斯王の前に論へり。二三時に王いひけるは、一人は此活けるはわが子、死れるは汝の子なりと言ひ、又一人は否、死れるは汝の子、活けるはわが子なりといふと。二四王乃ち劍を我に持來れといひければ、劍を王の前に持來れり。二五王いひけるは、活ける子を二に分ちて、其半を此に、半を彼に與へよと。二六時に其活子の母なる婦人、心其子のために焚くが如くなりて王に言していひけるは、請ふわが主よ、活ける子を彼に與へたまへ。必ず殺したまふなかれと。然れども他の一人は是を我のにも汝のにもならしめず判たせよと言へり。二七王答へていひけるは、活子を彼に與へよ。必ず殺すなかれ。彼は其母なるなりと。二八イスラエル皆王の審理し所の判決を聞きて王を畏れたり。其は神の智慧彼の中にありて審理を爲さしむるを見たればなり。

◎英雄がいつも英雄たるにあらず、時としては、さうした人物に不似合な過に陥る如き例も少くない。こゝにソロモンが、エジプトの王パロと緣を結び、その女を娶りて妻としたとあるのは、所謂結婚政略によつて、國を強くせんとの謀略に出でたものではあらうが、それにしてもイスラエル人が、異邦人の間から妻を娶ることは、その多年の傳統に反し、明に其の律法に背く所の行爲であつた。(申一七・一四―二〇)それにも拘らず、彼は尙エホバを愛し、その父ダビデの法憲に歩んで居つたとある。此の如く、人は兎角善惡正邪を混淆したやうな、不徹底な信仰生活を、營み易いものである。完全の人というては、世界あつて以來唯一人、すなはち耶蘇の他には見出されない。その以外の人物については、私共が之を模倣する前に、先づその事の善惡を篤と見分けて、然る後之を模倣すべき必要がある。(一一四)

◎神はギベオンにて、夜の夢の裡にソロモンに顯れ給うた。プルタークの說に、「道德的の夢を見るのは、その人が道德上に進歩しつゝある徵だ」とあり。孔子は壯年時代

に、屢々周公といふ高徳の人を夢みられたといふことである。これをソロモンの事に就いて考へて見るに、彼が夢の裡にて神に見えたといふのは、畢竟彼が平生から、熱心に神に憧れて居つた結果と見るべく、床しきことといはねばならぬ。其の節、神は彼に向うて、「我何を汝に與ふべきか、汝求めよ。」と仰せられたとあり。耶蘇は後に、ゼベダイの子等がその母と共に來り、他日その御國にて、一人は彼の右に、一人は彼の左に、坐する者とならんことを求めるのに、こたへ、「なんぢらは求むる所を知らず。」（マタ二〇・二二）というて、之を退け給うた。此の如く世には、浮いた榮譽を求むる者あり、當にもならぬ此の世の富を求むる者はあれど、反つてその「無くてかなはぬ唯一つのもの」を、（ルカ一〇・四二）求むることを忘るゝ人のみ多い。氣をつけねばならないことである。（五）

◎ソロモンは夢の裡に、神のたふとき御言に接し、先づ彼がその父ダビデを惠み、大なる恩寵をもて之を保護し給うたことを感謝し、それにも拘らず、その後繼者たる自分が未熟にして、王の務を全うし難きことを憂ふる由を述べ、せめてはその多數の人

民を支配するに相應しき、智慧を與へられんことを願ひ、「聽き別る心を僕に與へて、汝の民を鞫かしめ、我をして善惡を辨別ることを得さしめたまへ」と、求めた。前に彼の兄アブサロムが、己を恃んでその民を鞫かんことを求めたるに反し、（サム後一五・二、三）ソロモンは又遜つて、間違なくその民を鞫かん爲に、上よりの智慧を與へられんことを願ひ出た。ヤコブの書に、「汝らの中、もし智慧の缺ぐる者あらば、咎むることなく、また惜む事なく、凡ての人に與ふる神に求むべし。然らば與へられん」（ヤコ一・五）とあり。今日の私共も、その與へられたる職分を缺なく行はん爲に、上よりの智慧を與へられんことを求めねばならぬ。耶蘇は「神の智慧」（コ前一・二四）にて在し給ふ。私共は心の戸を開いて、彼をその胸の中に迎へ入れ、その衷に囁き給ふ所に從うて、萬事を執行はねばならぬ。（六―九）

◎神はソロモンの私なき願を、喜んで受納れ給ふことゝなつた。卽ち「汝此の事を求めて、己の爲に長壽を求めず、又己の爲に富有をも求めず、又己の敵の生命をも求めずして、惟訟を聽き別る才智を求めたるに因りて、視よ、我汝の言に循ひて爲せ

り。我汝に賢明く聰慧き心を與ふれば、汝の先には汝の如き者なく、汝の後にも汝の如き者興らざるべし。」と、仰せられたのみか。更に又言を添へて「我亦汝の求めざる者、卽ち富と貴とをも汝に與ふれば、汝の生の涯、王等の中に汝の如き者あらざるべし。又汝若し汝の父ダビデの歩みし如く、吾が道を歩みてわが法憲と命令を守らば、我汝の日を長うせん。」との、有難い御言を賜つたのである。これは後に耶蘇が山の上の垂訓に於て、その弟子たちに向ひ、「まづ神の國と神の義とを求めよ、然らば凡てこれらの物は汝らに加へらるべし。」（マタ六・三三）と仰せられたのと似て、所謂神を第一とする者には、他の凡て入用な物は、必ずそれに添へて與へらるべきことを、示されたのである。それ故私共も亦、第一のものを第一において、一切の事を處理せねばならぬ。神は凡て私共の必要なるものをしろしめし給ふ故である。「深山に至寶あり。寶に心なき者、之を得る」といふこともあり。神はその最も無欲なる僕に、最も大なる賜物を與へ給ふものである。（一〇—一五）

◎二人の女が一人の嬰兒を携へて、ソロモンの前に出で、どちらも、「これは我が子で

ある」といひ、相爭ふのを見て、彼は劍を持ち來らしめ、嬰兒を斬つて兩斷となし、その半分づつを二人の女に取らせよ、と判決した。それを聞いて、僞の母は冷然、事の成行を見てゐるに引換へ、眞の母は悲痛に堪へず、「もうようございますから、その子を殺さず、先方の婦人にお渡し下さい。」と、涙ながら叫び出た。それを見てソロモンは、どちらの母がまことの母かを判斷し、嬰兒を彼女に引渡さしむることゝなつた。いふまでもなく、これは神の智慧によれる名裁判であつた。それと同時に、私共は今一度、こゝに有難い親心の發露を見るのである。此の場合に於ける生の母が、よしや裁判には負けても、その子の生きんことを求めた如く、親の情は如何なる犧牲を拂うても、その子の無事成人をのみこれ祈るものである。その如く神はまた、私共人類を子供として愛し、その一人一人に目をかけて、之をいつくしみ給ふのである。後に彼がイスラエルに向ひ、「汝らその諸の咎を悔改めよ。然らば惡汝らを躓かせて、滅すことなかるべし。汝等その行ひし諸の罪を棄て去り、新しき心と新しき靈魂を起すべし。イスラエルの家よ、汝らなんぞ死ぬべけんや。我は死る者の死を好まざる

なり。然れば汝ら悔いて生きよ。」（エゼ一八・三〇―三二）と宣うたのは、同時にまた、彼が私共凡ての人々に對する、その親として愛情を言ひあらはされたものと、見て可いのである。（一六―二七）

◎「イスラエル、皆王の審理し所の判決を聞きて王を畏れたり。そは神の智慧の彼の中にありて、審理を爲さしむるを見たればなり」とあり。人の智慧には限がある。バウロが後に、「誰も自ら欺くな、汝等のうち此の世にて自ら智しと思ふ者は、智くならんために愚なる者となれ。そは此の世の智慧は神の前に愚なればなり。」（コリ前三・一八、一九）というたのは、それである。それ故私共は自らを卑うして、萬事に神の御旨のある所を尋ね、只管之に從ふやうでなくてはならぬ。箴言には又、「汝こゝろを盡してエホバに倚賴め、おのれの聰明に倚ることなかれ。汝すべての途にてエホバをみとめよ、さらばなんぢの途を直くしたまふべし。」（箴三・五、六）といふ、誠命もあるではないか。（二八）

六　國運の隆盛

（列王紀略上第四章）

一ソロモン王はイスラエルの全地に王たり。二其有てる群卿は左の如し。ザドクの子アザリヤは相國、三シシヤの子エリホレフとアヒヤは書記官、アヒルデの子ヨシヤパテは吏官、四エホヤダの子ベナヤは軍の長、ザドクとアビヤタルは祭司、五ナタンの子アザリヤは代官の長、ナタンの子ザブデは大臣にして王の友たり。六アヒシヤルは宮内卿、アブダの子アドニラムは徴募長なり。七ソロモン又イスラエルの全地に十二の代官を置けり。其人々王と其家のために食物を備へたり。卽ち各一年に一月宛食物を備へたり。八其名左のごとし。エフライムの山地にはベンホル、九マカツとシヤラビムとベテシメシとエロンベテハナンにはベンデケル、一〇アルボテにはベンヘセデあり、ショコとヘヘルの全地とは彼擔任てり。一一ドルの高地の全部にはベンアヒナダブあり、彼はソロモンの女タパテを妻とせり。一二アルヒテの子バアナはタアナクとメギドとエズレルの下にザルタナの邊にあるベテシヤンの全地とを擔任ちて、ベテシヤンよりアベルメホラにいたり、ヨクネアムの外にまで及ぶ。一三ギレアデのラモテにはベンゲベルあり、彼はギレアデにあるマナセの子ヤイルの諸村を擔任ち、又バシヤンなるアルゴブの地にある石垣と銅の關を有てる大なる城六十を擔任てり。一四イドの子アヒナダブはマハナイムを擔任てり。一五ナフタリにはアヒマアズあり、彼もソロモンの女バスマテを妻に娶れり。一六アセルとア

ロテにはホシヤイの子バアナあり。一七イツサカルにはバルアの子ヨシヤパテあり。一八ベニヤミンにはエラの子シメイあり。一九アモリ人の王シホンの地および、バシヤンの地オグの地なるギレアデの地にはウリの子ゲベルあり。其地にありし代官は唯彼一人のみ。二〇ユダとイスラエルの人は多くして濱の沙の多きが如くなりしが、飲食して樂めり。二一ソロモンは河よりペリシテ人の地に至るまでと、エジプトの境に及ぶまでの諸國を治めたれば、皆禮物を餽りてソロモンの一生の間事へたり。二二偖ソロモンの一日の食物は細麵三十石、粗麵六十石、二三肥牛十、牧場の牛二十、羊一百、其外に牡鹿、羚羊、小鹿、及び肥えたる禽あり。二四其はソロモン、河の此方をテフサよりガザまで盡く治めたれば、即ち河の此方の諸王を悉く統御めたり。彼は四方の臣僕より平安を得たりき。二五ソロモンの一生の間ユダとイスラエルはダンよりベエルシバに至るまで、安然に各其葡萄樹の下と無花果樹の下に住めり。二六ソロモン戰車の馬の廐四千、騎兵壹萬二千を有てり。二七彼代官等各其月にソロモン王のため、及び總てソロモン王の席に來る者の爲に食を備へて缺くるところなからしめたり。二八又彼等各其職に循ひて、馬および疾足の馬に食はする大麥と藁稿を、其馬の在る處に携へ來れり。二九神ソロモンに智慧と聰明を甚だ多く賜ひ、又廣大き心を賜ふ。海濱の沙のごとし。三〇ソロモンの智慧は東洋の人々の智慧と、エジプトの諸の智慧よりも大なりき。三一彼は凡の人よりも賢く、エズラ人エタンよりも又マホルの子なるヘマンとカルコル及びダルダよりも賢くして、其名四方の諸國に聞えたり。三二彼箴言三千を說けり。又其詩歌は一千五首あり。三三彼又草木の事を論じて、レバノンの香柏より墻に生づる苔に迄及べり。彼また獸と鳥と匐行物と魚の事を論じたり。三四諸の國の人人、ソロモンの智慧を聽かんとて來り、天下の諸の王ソロモンの智慧を聞及びて人を遣せり。

◎明治天皇が御即位の初、そのお側に侍したる者のうちには、岩倉具視、大久保利通、西郷隆盛、その他の諸英傑が居つて、德を成し奉つたといふことである。それと似て、ソロモンが王となりし當時、その左右にあつて彼を輔佐した英俊も少からず、こにはその十一人を擧げてある。中にもヨシヤパテ、ベナヤ、ザドク、アビヤタル、アドニラムの五人は、彼の父ダビデの時代から重用せられた人々にて、ザドクの子アザリヤ、シシヤの子エトホレフとアヒヤ、ナタンの子アザリヤとブザデとの五人は、所謂第二世であつた。すなはちいづれもその父の時代から、王に仕へた人々であつた。（サム後二〇・二三―二六）古語に「將門將を出す」といふことあり。第二世が第一世の志を嗣ぎ、君に忠義を盡すなどいふのは、最も喜ばしいことといはねばならぬ。これはいづれも、ソロモンにとつて、股肱の臣と呼ばるべきもの共であつた。（一―六）

◎ソロモンは又、イスラエルの全地に十二人の代官をおいた。その人々は毎年一ケ月宛、王と其の家との爲に食物を備へたとある。尤も十二人の代官中の二人まで、ソロ

モンの女を妻に娶つた者があるのを見れば、これはソロモンの治世も、相當に年月を重ねた後のことであつたに相違ない。斯して彼等は、イスラエルの全地から租税を王に納めたのである。今私共が國民として納税の義務あることに就いては、使徒パウロの言に、「貢を受くべき者に貢ををさめ、税を受くべき者に税ををさめ、畏るべき者をおそれ、尊ぶべき者をたふとべ」（ロマ一三・七）とあり。耶蘇は又ペテロに命じ、海に行きて釣を垂れ、その得たる魚の口から銀貨一つを取り、納金に當てしめ給うたやうな事實がある。（マタ一七・二四―二七）將又私共が基督者として、その屬する教團や、その指導の任にある人々を支へる爲に、獻金すべきことについては、「御言を敎へらるる人は、敎ふる人と凡ての善き物を共にせよ」（ガラ六・六）とあるのを見ても、之を知ることが出來る。（七―一九）

◎ユダとイスラエルの人々とは、濱の沙の多きが如く繁殖し、しかも彼等はソロモンの支配の下に安樂なる日を送り、「飲食して樂しんだ」とあり。彼等が鼓腹擊壤の狀を察することが出來る。然しながらいふ迄もなく、飲食のたのしみは眞に當座のものに

過ぎない。「人の生くるはパンのみに由るにあらず、神の口より出づる凡ての言に由る。」（マタ四・四）又「神の國は飲食にあらず。義と平和と聖靈によれる歡喜とに在るなり。」（ロマ一四・一七）といふやうな敎もあり。人は罪から救はれて、「その神エホバを喜ぶ」（ネヘ八・一〇）に至るまでは、まことの歡喜を味ふことは出來ないものと、思はねばならぬ。（二〇、二一）

◎ソロモンといふ名が、既に「平和」を意味する如く、彼の時代は全く平和の時代であつた。彼の一生の間は、干戈を執つて敵國と戰ふ如きこともなく、ユダとイスラエルの人々とは、北のダンから南のベエルシバに至るまで、いづれも「安然に各其の葡萄樹の下と、無花果樹の下に住んだ。」今私共の救主耶蘇はまた之と似て、その名を「平和の君」（イザ九・六）と呼ばれ、凡て彼に屬する者に、眞の平和を與へ給ふお方である。すなはち詩人が、「なんぢのわが心にあたへたまひし歡喜は、かれらの穀物と酒との豐なる時にまさりき。われ安然にして臥しまたねぶらん。エホバよ、われを獨にて坦然にをらしむるものは汝なり」（詩四・七、八）というた如き、眞の安心と滿足とは、

たゞ彼によつてのみ與へられるのである。この意味に於て、ソロモンは又或る程度まで、耶蘇の型と見らるゝのである。(二二—二五)

◎それにも拘らず、ソロモンは尙、戰車の厩四千、騎兵一萬二千を有したとあり。これは所謂「文事あるものは必ず武備あり」とか、又は「治に居て亂を忘れず」とかいふ如き精神から出た、取計であらう。それと同じ樣に、今日基督に屬する其の僕等はまた、絕えず武裝をとゝのへて居る必要がある。卽ちパウロが後に、「汝ら主にありて其の大能の勢威に賴りて强かれ。惡魔の術に向ひて立ち得んために、神の武具をもて鎧ふべし。」(エペ六・一〇、一一)といつたのは、それである。神の聖徒たることは、また基督の精兵たることを意味する。私共の聖潔は、所謂戰爭的の聖潔でなくてはならぬ。私共は世にあらんかぎり、罪と惡魔とを向ふにまはし、之と戰ひつづくべき筈のものだからである。(二六—二九)

◎ソロモンの智慧は、東洋の人々の智慧と、エジプトの凡ての智慧よりも大にして、彼はその時代の凡ての人々よりも賢かつた。彼は世にも珍しき賢明なる王者であると共に、また稀なる哲人であつた。それ故彼は能く箴言三千を說いたのである。彼はまた詩人であつた。それ故彼は詩歌一千五百を作つたのである。同時に彼はまた優れた博物學者であつた。それ故彼は「草木の事を論じて、レバノンの香柏より墻に生る苔に迄及び」又、「獸と鳥と匐行物と魚の事を論じた」のである。諸の國人が彼の智慧を聞かんとて、四方から來り集るに至つたのは、不思議もないことゝいはねばならぬ。然しながら彼の箴言にもいうてある如く、「エホバを畏るゝは知識の本」(箴一・七)である。耶蘇基督は「神の智慧」(コリ前一・二四)で在し給ふ。それ故私共は何よりも先づ罪から救はれて耶蘇を心に迎へ、銘々の器量相應に、彼の智慧を分け與へられねばならぬ。「エホバの法はまたくして靈魂をいきかへらしめ、エホバの證詞はかたくして愚なるものを智からしむ。エホバの訓諭はなほくして心をよろこばしめ、エホバの誡命はきよくして眼をあきらかならしむ。エホバを惶みおそるゝ道は、きよくして世々にたゆることなく、エホバのさばきは眞實にしてことごとく正し。」(詩一九・七—九)とあり。耶蘇と偕に歩む者には、さうした眞の智慧を、神から授けらるゝのである。(二九—三四)

七　ソロモンとヒラム

（列王紀略上第五章）

一ツロの王ヒラム、ソロモンの膏そゝがれて、其父に代りて王となりしを聞きて、其臣僕をソロモンに遣せり。ヒラムは恒にダビデを愛したる者なりければなり。二是に於てソロモン、ヒラムに言遣しけるは、三汝の知るごとく、我父ダビデは其周圍にありし戰爭に因りて其神エホバの名のために家を建つること能はずして、エホバが彼等を其足の蹠の下に置き給ふを待てり。四然るに今わが神エホバ、我に四方の太平を賜ひて、敵もなく殃もなければ、五我はエホバのわが父ダビデに語りて、わが汝の位に上らしむる汝の子、其人はわが名の爲に家を建つべしと言ひ給ひしに循ひて、わが神エホバの名の爲に家を建てんとす。六されば汝命じてわが爲にレバノンより香柏を砍出さしめよ。わが僕汝の僕と共にあるべし。又我は凡て汝の言ふ如く、汝の僕の賃銀を汝に付すべし。其は汝の知る如く我等の中にはシドン人の如く、木を砍るに巧みなる人なければなりと。七ヒラム、ソロモンの言を聞きて大に喜び言ひけるは、今日エホバに稱譽あれ。エホバ、ダビデに此夥多しき民を治むる賢き子を與へ給へりと。八斯てヒラム、ソロモンに言遣りけるは、我汝が言ひ遣したる所の事を聽けり。我香柏の材木と松樹の材木とに付いては、凡て汝の望む如く爲すべし。九わが僕レバノンより海に持下らん。而して我これを海より桴にくみて、汝が我に言ひ遣す處におくり、其處にて之をくづすべし。汝之を受けよ。又汝はわが家のために食物を與へてわが望を成せと。一〇斯てヒラムはソロモンに其凡て望む如く、香柏の材木と松の材木を與へたり。一一又ソロモンはヒラムに其家の食物として小麥二萬石を與へ、また清油二十石をあたへたり。斯ソロモン年々ヒラムに與へたり。一二エホバ其言ひ給ひしごとく、ソロモンに智慧を賜へり。またヒラムとソロモンの間睦しくして、二人偕に契約を結べり。一三爰にソロモン王イスラエルの全地に徵募人を興せり。其徵募人の數は三萬人なり。一四ソロモンかれらを一月交代に一萬人づつレバノンに遣はせり。即ち彼等は一月レバノンに二月家にあり。アドニラムは徵募人の督者なりき。一五ソロモン負戴者七萬人、山に於て石を砍る者八萬人あり。一六外に又其工事の長なる官吏三千三百人ありて、工事に作く民を統べたり。一七かくて王命じて大なる石、貴き石を鑿出さしめ、琢石を以て家の基礎を築かしむ。一八ソロモンの建築者とヒラムの建築者およびゲバル人之を砍れり。斯彼等材木と石を家を建つるに備へたり。

◎ツロの王ヒラムは、ダビデを敬愛し、之と懇親を結んで居つたが、彼が死んでソロモンが位を嗣いだことを聞くや、早速臣僕をソロモンに遣して、之を賀せしめた。「君子の交は淡くして水の若く、小人の交は甘くして醴の如し。君子は淡くして以て親しみ、小人は甘くして以て絶つ。彼の故無くして合ふ者は、即ち故無くして離る」と、莊子は敎へた。今ヒラムがダビデ、ソロモンの二代に亙る交を考へて見

るに、これこそ所謂「君子の交」にて、その間が如何にも淡く、しかも極めて眞實であつた。それ故自ら亦永續性を有したのであらう。しかも此の如きこそ、眞に耐久朋と呼ばるべきではないか。(一)

◎こゝに於てソロモンの方からも亦、使節をヒラムの許に遣すことゝなり、彼の父ダビデの宿望であつた、神の宮の建設に、志ある旨を述べて、それに對するヒラムの援助を求めたのである。「されば汝命じて、わが爲にレバノンより香柏を砍出さしめよ。わが僕汝の僕と共にあるべし。又我は凡て汝の言ふ如く、汝の僕の賃銀を汝に付すべし。其は汝の知る如く、我等の中にはシドン人の如く、木を砍るに巧みなる人なければなり。」と、ソロモンは言ひおくつた。元來イスラエルは遊牧の民にして、土木建築等のことには不得手であつた故、ソロモンが斯くヒラムの援助を求めたのは、全く止むを得ざるに出づるのであつた。それにしても、信仰的生活を營んだ親の子として生れた者は、また皆此の場合のソロモンが父ダビデに於けると同じく、宜しく父祖の志を繼承し、愈々神の榮光を顯さん爲に力を盡すべきものである。(二一六)

◎ヒラムはソロモンの言を聞いて大に喜び、「今日エホバに稱譽あれ、エホバ、ダビデに此の夥多しき民を治むる賢き子を與へ給へり。」といつた。世には立流な親に、案外不肖の子を出す場合も少からず。エリも、(サム前二・二三、二四)サムエルも、(サム前八・三)さうした苦い經驗を嘗めたのである。ダビデその人も、長男アムノン(サム後一三・一四)三男アブサロム(サム後一三・三七)等の爲には、いふにいへない苦心をしたのであるが、幸にソロモンの如き敬虔にして、聰明なる子が現れ、彼の遺志を繼ぐことゝなつたのは、最も大なる祝福であつた。今私共基督の救に與つた者は、又皆神の子供たる特權を與へられたものであるから、したがつてまた、神の前に其の孝順なる子供であるべき筈である。「從順なる子等の如くして、前の無知なりし時の慾に效はず、汝らを召し給ひし聖者に效ひて、自ら凡ての行狀に潔かれ。錄して『われ聖なれば、汝らも聖なるべし』とあればなり。」(ペテ前一・一四―一六)と、ペテロは敎へたのである。(七)

◎ヒラムは、ソロモンの依賴に對して快諾を與へた。すなはち彼は、ソロモンの望むがまゝに、香柏の材木と松の材木とを砍り、之をレバノンより地中海に持ち下り、筏

にくんで、イスラエルに送り届けることゝなつた。ソロモンがそれに對して相當の支拂をしたのは、申すまでもないことである。「ヒラムとソロモンの間睦じくして、二人偕に契約を結べり」といふのは、その有樣であつた。此の如く異る國々、異る人民が有無相通じ、長短相補うて、平和の中に親しき交をするのは、最も望ましいことである。明治天皇の御製に、「まじはりを、むすぶ國々、よろこびを、いひかはす代ぞ、うれしかりける。」とあり。どうか四海浪立たず、平和のうちに友誼を厚くしたきものである。(八―一二)

◎ソロモンはイスラエルの全地から、徵募人三萬人をあげ、別に負載者七萬人、山にて石を砍る者八萬人を使役し、工事の長なる官吏三千三百人をして、之を監督せしめた。つまり十五六萬の人が、その爲に働いたのであるから、それが如何に大仕掛の工事であつたか、想像せらるゝ。それにしても、その徵募人を使用するに當り、三組交代にて、一月働いては二月家に歸らしめたといふのを見れば、彼が如何に思ひ遣りある仕方で、人民を使役したかを察せらるゝ。「雪の日や、あれも人の子、樽拾ひ」といふ句もあり。人の上に立つ善き指導者は、その部下の者を愛し、同情を以て之を使用するやうでなくてはならぬ。(一三―一六)

◎「かくて王命じて、大なる石、貴き石を鑿出さしめ、琢石を以て家の基礎を築かしむ」とあり。之を信仰的にいへば、耶蘇は神の國が據つて立つ所の「隅の首石」(マタ二一・四二)である。「造家者らの棄てたる石は、これぞ隅の首石となれる。これ主によりて成れるにて、我らの目には奇しきなり。」とある通である。然のみならず、或る意味からいへば、私共も亦、神の家の建設の爲に、鑿出された箇々の石材の如きものである。預言者イサヤの書に、「義をおひ求め、エホバを尋ねもとむるものよ、我にきけ。なんぢらが斫出されたる磐と、なんぢらの掘出されたる穴とをおもひ見よ。なんぢらの父アブラハム、及びなんぢらを生みたるサラをおもひ見よ。われ彼をその唯一人なりしときに召し、之を祝してその子孫をまし加へたり。」(イザ五一・一、二)とあり。神は溪谷の間に轉つて居つた磐の如き私共をも斫出し、神の家の建設に、大切な資料として用ひ給ふのである。その御名を讃めよ。(一七、一八)

八　神の宮の建立

（列王紀略上第六章）

一イスラエルの子孫のエジプトの地を出たる後四百八十年、ソロモンのイスラエルに王たる第四年、ジフの月即ち二月に、ソロモン、エホバのために家を建つることを始めたり。二ソロモン王のエホバの爲に建てたる家は長さ六十キュビト、濶さ二十キュビト、高さ三十キュビトなり。三家の拜殿の廊は家の濶さに循ひて長さ二十キュビト、家の前の其濶さ十キュビトなり。四彼家に造り附の格子ある窓を施けたり。五又家の墻壁に附けて四周に連接屋を建て、家の墻壁即ち拜殿と神殿の墻壁の周圍に環らせり。又四周に旁房を造れり。六下層の連接屋は濶さ五キュビト、中層のは濶さ六キュビト、第三層のは濶さ七キュビトなり。即ち家の外に階級を造り、環らして何物をも家の墻壁に挿入らざらしめ。七家は建つる時に鑿石所にて鑿り、預備へたる石にて造りたれば、造れる間に家の中には鎚も鑿も其外の鐵器も聞えざりき。八中層の旁房の戸は家の右の方にあり。螺旋梯より中層の房にのぼり、中層の房より第三層の房にいたるべし。九斯彼家を建終り、香柏の椽と板をもて家を葺けり。一〇又家に附けて五キュビトの高さなる連接屋を建環らし、香柏をもて家に交接けたり。一一爰にエホバの言ソロモンに臨みて曰く、一二汝今此家を建つ。若し汝わが法憲に歩み、わが律例を行ひ、わが諸の誡命を守りて之にしたがひて歩まば、我はわが汝の父ダビデに言ひし語を汝に固うすべし。一三我イスラエルの子孫の中に住みわが

民イスラエルを棄てざるべし。一四斯ソロモン家を建終れり。一五彼香柏の板を以て家の墻壁の裏面を作れり。則ち家の牀板より頂格の墻壁まで木をもて其裏面をはり、また松の板を以て家の牀板をはれり。一六又家の奥に二十キュビトの室を牀板より墻壁まで香柏をもて造れり。即ち家の内に至聖所なる神殿を造れり。一七家即ち前にある拜殿は四十キュビトなり。一八家の内の香柏は瓠と咲ける花を雕刻めるものなり。皆香柏にして石は見えざりき。一九神殿は彼其處にエホバの契約の櫃を置かんとて家の内の中に設けたり。二〇神殿の内は長さ二十キュビト、濶さ二十キュビト、高さ二十キュビトなり。純金をもて之を蔽ひ、又香柏の壇を覆へり。二一又ソロモン純金をもて家の内を蔽ひ、神殿の前に金の鏈をもて間隔を造り、金をもて之を蔽へり。二二又金をもて殘る所なく家を蔽ひ、遂に家を飾ることを悉く終へたり。また神殿の傍にある壇は皆金をもて蔽へり。二三神殿の内に橄欖の木をもて二のケルビムを造れり。其高さ十キュビト、二四其ケルブの一の翼は五キュビト、又其ケルブの他の翼も五キュビトなり。一の翼の末より他の翼の末までは十キュビトあり。二五他のケルブも十キュビトなり。其ケルビムは偕に同量同形なり。二六此のケルブの高さ十キュビト、彼ケルブも亦しかり。二七ソロモン家の内の中にケルビムを置き、ケルビムの翼を展しければ、此ケルブの翼は此墻壁に及び、彼ケルブの翼は彼墻壁に及びて、其兩翼家の中にて相接はれり。二八彼金をもてケルビムを蔽へり。二九家の周圍の墻壁には皆内外ともにケルビムと棕櫚と咲ける花の形を雕み、三〇家の牀板には内外ともに金を蔽へり。三一神殿の入口には橄欖の木の戸を造れり。其木匡の門柱は五分の一なり。三二其二の扉も亦橄欖の木なり。ソロモン其上にケルビムと棕櫚と咲ける花の形を雕刻み、金をもて蔽へり。即ちケルビムと棕櫚

の上に金を鍍せたり。 三三斯ソロモン亦拜殿の戸のために橄欖の木の門柱を造れり。卽ち四分の一なり。三四其二の戸は松の木にして、此戸の兩扉は摺むべく、彼戸の兩扉も摺むべし。 三五ソロモン其上にケルビムと棕櫚と咲ける花を彫刻み、金をもてこれを蔽ひて善く其彫工に適はしむ。 三六また鑿石三層と香柏の厚板一層をもて內庭を造れり。 三七第四年のジフの月にエホバの家の基礎を築き、 三八第十一年のブルの月、卽ち八月に、凡て其箇條のごとく、其定例のごとくに家成りぬ。斯ソロモン之を建つるに七年を涉れり。

◎イスラエル人がエジプトを出て後、モーセの時代が四十年、ヨシュアの時代が十七年、士師の時代が三百九十九年、エリの時代が四十年、サムエル及びサウルの時代が四十年、ダビデの時代が四十年、ソロモンが王位に卽いて後、神の宮の建立に取掛るまでの四年を合せて、計四百八十年といふことになる。その間は概ね幕屋で神を拜み、又犧牲をさゝげなどして居つたのが、今は堂々たる大建築物の中にて、禮拜を執行はるべき時節となつたのである。この神の宮の建立は、イスラエルの歷史に特筆大書せらるべき大事件であつた。それにも拘らず、後にジョージ・フォックスがいつたやうに、「まことの神の宮は木や石で造つたものでなく、私共活きた人間が、それである。」私共は神をその心に宿し、その身も靈魂も一切を獻げて、たゞ神の御旨の行はれん爲にのみ、生活するやうでなくてはならぬ。ソロモンがエルサレムに神の宮を建立する爲に苦心した如く、私共はその五尺の身體を、活ける神の宮たらしめん爲に、努力すべきものである。(一一四)

◎十數萬人の職工、勞働者が、神の宮の建設に掛つて居るのであるから、さぞや大混雜を極めたであらうかといふに、さうではなくて、「家は建つる時に鑿石所にて鑿り、預備へたる石にて造りたれば、造れる間に家の中には、鎚も鑿も其の外の鐵器も聞えざりき。」とある如く、至つて莊重に、又靜肅に、工事を進めたものと見える。後に預言者エリヤが神の山ホレブに立ちて、エホバを待望む時、大なる强き風が山を裂き、岩を碎いたけれども、神は風の中に在し給はず。風の後に地震があつたが、神は地震の中に在し給はず。地震の後に火があつたが、神はその火の中にも在し給はず。火の後に靜なる細き聲ありて、それが神の御聲であつたといふことがある。(列上一九・一一、一二)それにつけても私共は、世俗の雜音の爲に妨げられぬよう、心靜に神に見

え、又その御旨を行うてゐたきものである。(五—一〇)

◎こゝにエホバの言がソロモンに臨み、「汝今此の家を建つ、若し汝わが法憲に歩み、わが律例を行ひ、わが諸の誡命を守りて、之にしたがひて歩まば、我はわが汝の父ダビデに言ひし語を汝に固うすべし。我イスラエルの子孫の中に住み、わが民イスラエルを棄てざるべし。」と仰せられた。此の如く神はその僕等が奉仕に疲れ、責任の重荷を感じて居るやうな場合に、屢々その御聲を送つて、私共を激勵し給ふのである。使徒パウロがコリントに在つて傳道に苦心する時、神は夜の幻の中に彼に向ひて、「おそるな、語れ、默すな。我なんぢと偕にあり云々」(使一八・九、一〇)と宣ひ、彼が地中海上にて暴風に襲はれ、いたく惱んで居る際には、同じく夜の夢の中に現れ、「パウロよ、懼るな、なんぢ必ずカイザルの前に立たん。視よ、神は汝と同船する者をことごとく汝に賜へり」(使二七・二四)と仰せられた。神はその御名の爲に苦勞する聖徒を忘れず、之をその時々の必要に應じて、奬勵鼓舞し給ふのである。(一一—一四)

◎いふ迄もなく、神の宮の中にて最もたふときは、その奥の院ともいふべき、至聖所

であつた。固より靈なる神を禮拜する爲の宮であるから、所謂御神體の如きものは何もない。たゞそこに、「エホバの契約の櫃」を安置せらるゝに過ぎなかつた。しかも其の至聖所と、其の前にある拜殿、すなはち聖所との間には、障蔽の幕があり。一年に唯一回、祭司が其の幕をくゞつて、至聖所に入り得べき規定であつたが、後年耶蘇が十字架上に息絶え給ふと同時同刻に、その幕は上より下まで、裂けて二つとなつた。(マタ二七・五一)これはその以來、祭司のみならず何人も、耶蘇の執成にたよりさへすれば、直ちに進んで神に見え、その深く且大なる恩惠に與り得べきことを、暗示せられたものである。「神は靈なれば、拜する者も靈と眞とをもて拜すべきなり。」(ヨハ四・二四)とは、基督によつて示された、最も貴き福音の眞理である。(一五—二二)

◎こゝに金をもて蔽うたとか、金を鍍せたとか、いふやうな記事が、十一回までもくり返されて居る。すなはち神の宮の壇も牀板も、悉く金を以てはりつめ、又金を以て蔽うてあつた。これは人が純粹まじりなき心を以て、神を禮拜すべきことを暗示するものであつた。私共は亦純金の如き眞實と至誠とを以て、神の御前に罷り出づべ

きものである。明治天皇の御製に、「目に見えぬ、神の心に、通ふこそ、人の心の、まことなりけれ。」とあり。古語に「至誠神に通ずる」などといふのは、何れもこれをいうたものである。(二三—三五)

◎神の宮の建立が成就するまでには、滿七年を要した。それさへ十數萬の人々を用ひて漸く完成したのを見れば、それが如何なる大工事であつたかを、察するに餘がある。之を信仰的にいへば、この神の宮は後にあらはるべき耶蘇の型であつた。耶蘇は曾て自らのことを、「宮」と呼び給うた。(ヨハ二・一九)彼は宮である。卽ち彼は人の中に宿り給うた神である。いひかへれば、彼は「インマヌエル」卽ち「神われらと偕に在す」(マタ一・二三)者であつた。私共もまた、彼を通じて神を拜み、進んで私共銘々の中に神を宿し、それぞれ一箇の神の宮たるに至るべきものである。「汝ら知らずや、汝らは神の宮にして、神の御靈なんぢらの中に住み給ふを。」(コリ前三・一六)と、パウロがいうたのは、それである。私共は凡ての罪より潔められ、神をその心に宿す者となつて居らねばならぬ。(三六—三八)

九　王宮の造營

(列王紀略上第七章)

ソロモン己の家を建てしが、十三年を經て全く其家を建て終へたり。二彼レバノン森の家を建てたり。其長さは百キュビト、其濶さは五十キュビト、其高さは三十キュビトなり。香柏の柱四行ありて柱の上に香柏の梁あり。三四十五本の柱の上なる梁の上は香柏にて蓋へり。柱は一行に十五本あり。四また窗三行ありて牖と牖と三段に相對ふ。五戸と戸柱は皆大木をもて角に造り、牖と牖と三段に相對へり。六又柱の廊を造れり。其長さ五十キュビト、其濶さ三十キュビトなり。柱のまへに一の廊あり。また其柱のまへに柱と階あり。七又ソロモン審判を爲すために、位の廊卽ち審判の廊を造り、牀板より牀板まで香柏をもて蔽へり。八ソロモンの居住る家は其廊の後の他の庭にありて、其工作同じかりき。ソロモン亦其娶りたるパロの女のために家を建てしが、此廊に同じかりき。九是等は內外とも基礎より檐にいたるまで、又外面にては大庭にいたるまで、皆鑿石の量にしたがひて鋸にて剖きたる貴き石をもて造れるものなり。一〇又基礎は貴き石、大なる石、卽ち十キュビトの石、八キュビトの石なり。一一其上には鑿石の量に循ひて貴き石と香柏あり。一二又大庭の周圍には、三層の鑿石と一層の香柏の厚板あり。エホバの家の內庭と家の廊におけるが如し。一三爰にソロモン人を遣してヒラムをツロより召び來れり。一四彼はナフタリの支派なる嫠婦の子にして、其父はツロの人にて銅の細工人なり。ヒラム

は銅の諸〻の細工を爲すの智慧と慧悟と智識の充ちたる者なりしが、ソロモン王の所に來りて其諸の細工を爲せり。 一五彼銅の柱二を鑄たり。其高さ各々十八キュビトにして、各十二キュビトの繩を環らすべし。一六又銅を鎔かして柱頭を鑄て、柱の巔に置ゆ。この頭の高さも五キュビト、かの頭の高さも五キュビトなり。 一七柱の上にある頭の爲に組物の網と鏈樣の梳物を造れり。此頭に七つ、彼頭に七つあり。 一八又二行の石榴を一の網工の上の四周に造りて、柱の上にある頭を蓋ふ。他の頭をも亦然せり。 一九柱の上にある頭は四キュビトの百合花の形にして、廊におけるがごとし。 二〇二の柱の頭の上には又、網工の外なる腹の所に接きて石榴あり。他の柱の四周にも石榴二百ありて相列べり。 二一此柱を拜殿の廊に竪つ。卽ち右の柱を立てて其名をヤキンと名づけ、左の柱を竪てて其名をボアズと名づく。 二二其柱の上に百合花の形あり。斯其柱の作成れり。 二三又海を鑄なせり。此邊より彼邊まで十キュビトにして、其四周圓く、其高さ五キュビトなり。其四周は三十キュビトの繩を環らすべし。 二四其邊の下には四周に瓠瓜ありて之を環れり。卽ち一キュビトに十づつありて、海の周圍を圍めり。其瓠瓜は海を鑄たる時に二行に鑄たるなり。 二五其海は十二の牛の上に立てり。其三は北に向ひ、三は西に向ひ、三は南に向ひ、三は東に向ふ。海其上にありて、牛の後は皆内に向ふ。 二六海の厚さは手寬にして其邊は百合花にて杯の邊の如くに作れり。海は二千斗を容れたり。 二七又銅の臺十を造れり。一の臺の長さ四キュビト、其濶さ四キュビト、其高さ三キュビトなり。 二八其臺の製作は左のごとし。臺には嵌板あり。嵌板は邊の中にあり。 二九邊の中にある嵌板の上に獅子と牛とケルビムあり。又邊の上に座あり。獅子と牛の下に花飾の垂下物あり。 三〇其臺には各四の銅の輪と銅の軸あり。其四の足には肩のごとき者あり。其肩のごとき者は洗盤の下にありて、凡の花飾の旁に鑄つけたり。 三一其口は頭の内より上は一キュビトなり。其口は圓く一キュビト半にして座の作の如し。又其口には雕工あり。其鏡板は四角にして圓からず。 三二四の輪は鏡板の下にあり。輪の手は臺の中にあり。各高さ一キュビト半、 三三輪の工作は戰車の輪の工作の如し。其手と緣と輻と轂とは皆鑄物なり。 三四臺の四隅に四の肩の如き者あり。其肩のごとき者は臺より出づ。 三五臺の上の所の高さ半キュビトは其周圍圓し。又臺の上の所の手と鏡板も臺より出づ。 三六其手の板と鏡板には其各〻の隙處に循ひて、ケルビムと獅子と棕櫚を雕刻み、又其四周に花飾を造れり。 三七是のごとく十の臺を造れり。其鑄法と量と形は皆同じ。 三八又銅の洗盤十を造れり。洗盤は各四十斗を容れ、洗盤は各四キュビトなり。十の臺の上には各一の洗盤あり。 三九其臺五を家の右の旁に、五を家の左の旁に置き、家の右の東南に其海を置けり。 四〇ヒラム又鍋と火鏟と鉢とを造れり。斯ヒラム、エホバの家の爲にソロモン王に爲せる諸の細工を成終へたり。 四一卽ち二の柱と、其柱の上なる頭の二の毬と、柱の上なる其頭の二の毬を蓋ふ二の網工と、 四二其二の網工の爲の石榴四百、是は一の網工に石榴二行ありて、柱の上なる二の毬を蓋ふ。 四三又十の臺と、其臺の上の十の洗盤と、 四四一の海と、其海の下の十二の牛、 四五および鍋と火鏟と鉢是なり。ヒラムがソロモン王にエホバの家のために造りし此等の器は、皆光明ある銅なりき。 四六王ヨルダンの低地に於てスコテとザレタンの間の黏土の地にて之を鑄たり。 四七ソロモン其器甚だしく多かりければ、皆懽ずに措けり。その銅の重さしれざりき。 四八又ソロモン、エホバの家の諸の器を造れり。卽ち金の壇と、供前のパンを載する金の案、 四九および純金の燈臺、是は神殿

のまへに、五は右に、五は左にあり。又金の花と燈盞と燈鉗、五〇純金の盆と剪刀と鉢と皿と滅燈器と、至聖所なる内の家の戸のためおよび拜殿なる家の戸のためなる金の肘鉸是なり。斯ソロモン王のエホバの家のために爲せる諸〳〵の細工終れり。是において ソロモン其父ダビデが奉納めたる物卽ち金銀および器を携へいりて、エホバの家の寶物の中に置けり。

◎ソロモンは、エホバの家を建つるに七年を費し、己が家を建つるには十三年かゝつた。つまり後者は殆んど、前者に倍する歳月を要したわけである。これは前者に對しては、父ダビデの時代から大分準備してあつたに拘らず、後者にはそれがなかつた爲、餘計な時日を費したのだといふ說もあれど、いづれにしても、彼がその己の爲に建てた家が、神の宮よりも多年を要したことだけは、いひ逃るべからざる事實であつた。それと同じ樣に、人は大に神の爲に盡して居るつもりでも、後でふりかへつて見ると、やはりその幾層倍か多く、己の爲に盡して居るやうな事實を、見出し勝のものである。それ故私共は、神への奉仕を勵んだ上にも、又勵んで、はじめて眞に、神に忠義なる僕となり得るのである。絕えずその心掛を怠つてはならない。(一)

◎ソロモンはレバノン森の家を建て、柱の廊を造り、審判の座を造り、又自分の住む家と、その娶りたるパロの女の住む家とを建てた。それと似て、私共は若し、木や石を積んで家を建てるのでなくば、少くともその一生涯を通じて、己が品性なり、又人格なりを建設して居るものである。「汝らは神の建築物なり。」(コリ前三・八) とパウロがいうたのは、それである。ラポエターの說に、「人はその行動、視聽、言語、步行等のアルハベットを用ひて、品性を綴るものだ」とあり。フンボルトはまた、「私共は此の世にある間に、築き上げた品性をのみ、あの世まで携へ行くことが出來る」というて居る。私共は神の御助によつて、よく永久に、あの世までも携へ行かるべき品性なり、又人格なりを建築してゐたいものである。(二—一二)

◎モーセの時代には、ベザレルなる者があり。神はその靈を彼に充して、「智慧と了知と智識と諸〳〵の工に長けしめ、奇巧を盡して、金銀および銅の作をなすことを得せしめ」(出三一・三、四) 給うたとあり。同じ神は又、ソロモンの時代に、「銅の諸〳〵の細工を爲すの智慧と慧悟と智識の充ちたる」ヒラムを起し、ソロモンの許に來つて、諸

の細工をなさしめ給うた。このヒラムの父はツロの人にて、銅の細工人であつたが、その母はイスラエル人にて、ナフタリの支派に屬するものであつた。「彼はその母の心に、父の頭を承繼いだものだ」と、いはれて居る。彼はツロの王でありながら、亦、銅の細工人として勞働することを厭はなかつた。箴言に「汝その業に巧なる人を見るか、斯る人は王の前に立たん。かならず賤者の前にたゝじ。」(箴二二・二九)とあり。然しながらヒラムは、その業に巧なると共に、彼自らが王であつたといふのは、たゝといことであつた。つとめ働くことは、一般民衆の務であると共に、また王者にとつての光榮だからである。(一三、一四)

◎ヒラムは巨大なる銅の柱二つを鑄て、之を拜殿の廊に竪てた。その右のものをヤキン(樹立)又左のものをボアズ(有力)と名づけた。タッカー中將の「ブース夫人傳」に、「ソロモンはエホバの家を建つるに當り、二本の柱を拜殿の前に竪て、右なるをヤキン、左なるをボアズと名づけた如く、救世軍てふシオンの拜殿の前には、又更生と成聖との二本の柱が立つて居る。卽ち罪を赦されるといふ光榮ある恩惠に竪く立つと共に、罪より潔めらるゝといふ特權は、これが力とならねばならぬ云々」とあり。つまり救と聖潔とが、神の拜殿の前に建てられた二本の柱であり、私共は誰も皆、その門をくゞつて後に、はじめて神を見ることを得べきものだといふ意味であらう。尤なる說といはねばならない。(一五—二二)

◎ヒラムはその得意とする銅を用ひて、海(水盤)、臺、洗盤、その他のものを調製した。これらの器は、皆「光明ある銅」にて造られ、その器が甚だ多かつた爲に、その重さを知り得なかつたといふのである。しかもこれらは皆、一定の樣式によつて、頗る入念に、又永久に用ひらるべきやう、造られたのである。或る染物屋が、他の同業者の企て及ばない程、美しい色艶のある染物をするので、或人がその染料を尋ねて見ると、別段他の同業者のと異る所がないので、不思議に思ひ、「何か此の外に尙混ぜ合せたものは、ないのですか。」と問ふと、「如何にも、も一つある。それは私の腦味噌である。」と答へたといふ話がある。私共はソロモンの爲に、諸〳〵の細工をしたヒラムと同じ樣に、その爲す業に腦味噌を混じ、心の誠を打込んで、之を造り上げるや

うでありたい。言換れば、私共は「その良心を手腕に運用する人物」でありたきものである。(二三—四七)

◎最後にソロモンは又、エホバの家のために諸〻の器を造り、しかもそれを殘らず純金もて造つた。すなはち金の壇と、金の案と、金の燈臺等をはじめとし、一つ一つの器を殘らず純金にて造つたのである。斯して彼の父ダビデの時から計畫せられた神の宮の建設は、首尾よくその工を竣へた。「事をおこなふエホバ、事をなしてこれを成就るエホバ、その名をエホバと名のる者かく言ふ、汝われに籲求めよ、われ汝に應へん。また汝が知らざる大なる事と、祕密たることゝを汝に示さん。」(エレ三三・二、三)とあり。私共の神は事を行ふのみならず、事をなして、之を成就る神である。私共はウイリアム・ケレーと共に、「神に大事を求め、神の爲に大事を企つ」ることを、躊躇してはならない。(四八—五一)

一〇 獻堂式

(列王紀略上第八章一—三〇)

一爰にソロモン、エホバの契約の櫃をダビデの城、即ちシオンより舁上らんとて、イスラエルの長老と、諸の支派の首、イスラエルの子孫の家の長等を、エルサレムにてソロモン王の所に召集む。二イスラエルの人皆エタニムの月即ち七月の節筵に當りて、ソロモン王の所に集まれり。三イスラエルの長老皆至り、祭司櫃を執りあげて、四エホバの櫃と集會の幕屋と、幕屋にありし諸〻の聖き器を舁上れり。即ち祭司とレビの人之を舁きのぼれり。五ソロモン王および其許に集れるイスラエルの會衆、皆彼と偕に櫃の前にありて羊と牛を獻げたりしが、其數多くして書すことも數ふることも能はざりき。六祭司エホバの契約の櫃を其處に舁きいれたり。即ち家の神殿なる至聖所の中のケルビムの翼の下に置めたり。七ケルビムは翼を櫃の所に舒べ、且ケルビム上より櫃と其杠を掩へり。八杠長かりければ、杠の末は神殿の前の聖所より見えたり。然れども外には見えざりき。其杠は今日まで彼處にあり。九櫃の内には二の石牌の外何もあらざりき。是はイスラエルの子孫のエジプトの地より出たる時、エホバの彼等と契約を結び給へる時に、モーセがホレブにて其處に置めたる者なり。一〇斯て祭司聖所より出けるに、雲エホバの家に盈ちたれば、一一祭司は雲のために立ちて供事ること能はざりき。其はエホバの榮光エホバの家に盈ちたればなり。一二是に於てソロモンいひけるは、エホバは濃き雲の中に居らんといひ給へり。一三我誠に汝のために住むべき家、永久に居るべき所を建てたりと。一四王其面を轉けてイスラエルの凡の會衆を祝せり。時にイスラエルの會衆は皆立ちぬたり。一五彼言ひけるは、イスラエルの神エホバ

は譽むべき哉。エホバは其口をもて吾父ダビデに言ひ、其手をもて之を成し遂げ給へり。一六即ち我は吾民イスラエルをエジプトより導き出せし日より、我名を置くべき家を建てしめんために、イスラエルの諸の支派の中より何れの城邑をも選みしことなし。但ダビデを選みてわが民イスラエルの上に立たしめたりと言ひ給へり。一七夫イスラエルの神エホバの名のために家を建つることは、わが父ダビデの心にありき。一八然るにエホバわが父ダビデにいひ給ひけるは、わが名のために家を建つること汝の心にあり。汝の心に此事あるは善し。一九然れども汝は其家を建つべからず。汝の腰より出づる汝の子、其人吾名のために家を建つべしと。二〇而してエホバ其言ひ給ひし言を行ひ給へり。即ち我わが父ダビデに代りて立ち、エホバの言ひ給ひし如く、イスラエルの位に坐し、イスラエルの神エホバの名のために家を建てたり。二一我又其處にエホバの契約を藏めたる櫃のために一の所を設けたり。即ち我等の父祖をエジプトの地より導き出し給ひし時に、彼等に爲し給ひし者なりと。二二ソロモン、イスラエルの凡の會衆の前にて、エホバの壇のまへに立ち、其手を天に舒べて、二三言ひけるは、イスラエルの神エホバよ、上の天にも下の地にも汝の如き神なし。汝は契約を持ちたまひ、心を全うして汝のまへに歩むところの汝の僕等に恩惠を施したまふ。二四汝は汝の僕わが父ダビデに語ひ給へる所を持ちたまへり。汝は口をもて語ひ、手をもて成し遂げたまへること今日のごとし。二五イスラエルの神エホバよ、然れば汝が僕わが父ダビデに語りて、若し汝の子孫其道を愼みて、汝がわが前に歩めるごとくわが前に歩まば、イスラエルの位に坐する人、わがまへにて汝に缺くること無かるべしといひたまひし事を、ダビデのために持ち給へ。二六然ればイスラエルの神よ、爾が僕わが父ダビデに言ひたまへる爾の言に效驗あらしめ給へ。二七神果して地の上に住み給ふや。視よ、天も諸の天の天も、爾を容るるに足らず。況て我が建てたる此家をや。二八然れどもわが神エホバよ、僕の祈禱と懇願を顧りみて、其號呼と僕が今日爾のまへに祈る祈禱を聽き給へ。二九願くは爾の目を晝夜此家に、即ち爾が我名は彼處に在るべしといひたまへる處に向ひて開きたまへ。願くは僕の此處に向ひて祈らん祈禱を聽き給へ。三〇願くは僕と爾の民イスラエルが此處に向ひて祈る時に、爾其懇願を聽き給へ。爾は爾の居處なる天において聽きて赦し給へ。

◎神の宮は出來たが、神がその中に在さないなら、それは靈魂のなき肉體、火をともさぬ燈臺、又は居住者のなき家屋の如きものである。こゝにソロモンが、神の臨在をあらはす所のエホバの契約の櫃を、新に落成した神の宮に移したのは、喜ぶべきことであつた。今私共基督者は、皆いづれも「聖靈の宮」（コリ前六・一九）たるべきものである。すなはち基督の靈を、その胸中に宿して居るべき筈のものである。「基督の御靈なき者は、基督に屬する者にあらず。」（ロマ八・九）私共はパウロの如く、「我基督と偕に十字架につけられたり。最早われ生くるにあらず、基督我が内に在りて生くるなり。」（ガラ二・二〇）と、いひ得るやうでなくてはならぬ。（一―五）

◎契約の櫃には、「マナを納れたる金の壺と、芽したるアロンの杖と、契約の石碑と」（ヘブ九・四）の、三品を納めてあつたが、そのうちマナを納れたる金の壺と、芽したるアロンの杖とは、いつのまにやら紛失し、ソロモンの時代になつては、たゞ二箇の石碑のみ殘つて居つた。この石碑といふのは、所謂十誡を五つ宛刻んだものであつた。元來アロンの杖は、彼が祭司としての職務をあらはすものであつた。然るに後日「大祭司なる基督」（ヘブ四・一四）が現れ給ふに及んでは、最早私共が祭司に執成を求むべき必要がなくなつたのである。又マナはイスラエル人が、四十年間、曠野にさまようた時代には、なくてかなはぬものであつたが、今は私共が「生命のパンなる耶蘇」（ヨハ六・四八）に養はるゝ時代となつて見れば、これも私共に何等直接の關係なきものとなつた。それ故アロンの杖と、マナを納れたる金の壺とが紛失したかというて、餘り多くの遺憾はない。たゞし二箇の石碑が代表する所の神の律法に至つては、いつまでも存在せねばならない、大切なものである。耶蘇も曾て、「われ律法また預言者を毀つために來れりと思ふな。毀たんとて來らず、反つて成就せん爲なり。誠に汝らに告ぐ天地の過ぎ往かぬうちに、律法の一點、一畫も廢ることなく、悉く全うせらるべし。」（マタ五・一七、一八）と仰せられて居る。契約の櫃の中に、二箇の石碑のみ、保存せられて居つたといふのは、暗示に富んだことゝいはねばならない。（六―九）

◎祭司が聖所から出た時、エホバの榮光がその家に盈ち、祭司は雲のために、立ちて奉仕することも能はぬ程であつた。これはソロモンによつてなされた一切の處置を、神が嘉納し給うた徵であつた。それと同じ樣に、私共は亦一切のことに於て、神に嘉せらるゝやうな奉仕を、心掛けねばならぬ。私共はこの世の旅路を終へて、神の御前に立つ時、「宜いかな、善かつ忠なる僕、なんぢは僅なる者に忠なりき。我なんぢに多くの物を掌どらせん。汝の主人の歡喜にいれ。」（マタ二五・二三）と、いはるゝやうな生活を、營んでゐたいものである。（一〇）

◎ソロモンは、イスラエルの凡ての會衆を祝福し、彼等に語りて、「イスラエルの神エホバは、其の口をもて吾が父ダビデに言ひ、其の手をもて之を成し遂げ給へり」というた。神は實行家である。その口にていふ所を、手にて成し遂げ給ふお方である。そ

れ故エリサベツは、「信ぜし者は幸福なるかな。主の語り給ふことは、必ず成就すべければなり。」（ルカ一・四五）というたのである。ジョージ・ミューラーは、神の約束に對する確信の上に、その孤兒教育の事業を營み、驚くべき祈禱の應驗を實驗して居つた。その日記に記錄せられた祈禱の應驗の事實だけでも、實に二萬餘件に達して居つたさうである。私共の神は無責任な空論家ではない。反つて何處までも言責を重んじ、そのいうた所は必ず實行し給ふお方である。（一一―一六）

◎その以前ダビデの存命中、神は彼に向ひて、「わが名のために家を建つること、汝の心にあり。汝の心に此の事あるは善し。然れども汝は其の家を建つべからず。汝の腰より出づる汝の子、其の人吾が名のために家を建つべし。」と仰せられた。つまりダビデが幻に見たところを、ソロモンが實地に行うたのである。その如く私共は、その時々に幻を見ねばならぬ。「幻なき民は滅ぶ。」（箴二九・一八）といふこともあり。「神いひ給はく、末の世に至りて、我が靈を凡ての人に注がん。汝らの子女は預言し、汝らの若者は幻影を見、なんぢらの老人は夢を見るべし。」（使二・一七）とある如く、私

共が聖靈に感ずる時には、私共は幻を見るのが常である。基督教が歐羅巴に入つたはじめは、パウロが夜の幻に、一人のマケドニヤ人の、來つて彼等を助けんことを求むると見たのに原因する。私共は神から來る幻を見凝めつゝ、それを事實に行はん爲に努力したいものである。（一七―二一）

◎ソロモンは凡ての會衆の前にて、エホバの壇の前に立ち、その手を天に伸べて祈をした。これは聖書に記された、最も大なる祈の一つである。その中に彼はいうた。「神果して地の上に住み給ふや。視よ、天も、諸〻の天の天も、爾を容るゝに足らず。況て我が建てたる此の家をや云々」と。彼は神が天地に充つるお方であるなら、之を所謂神の宮に封じ込むことの出來ない道理を、よくよく承知して居つた。それにも拘らず、かうした神の宮を設けたわけは、それをして宗教、又禮拜の中心たらしめん爲に過ぎなかつたのである。後にパウロがアテネ人に向ひ、「世界とその中のあらゆる物を造り給ひし神は、天地の主に在せば、手にて造れる宮に住み給はず。みづから凡ての人に生命と息と萬の物とを與へ給へば、物に乏しき所あるが如く、人の手にて事ふる

ことを要し給はず。」(使一七・二四、二五)というたのも、思ひ合さるゝではないか。懷疑家なるコリンスが一農夫を捉へ、「御身の信ずる神は大なる神か、小き神か」と尋ねると、農夫は答へて、「神は天地も容れ能はぬ程、大なる神であると共に、又來つて私共一人一人の胸に宿り給ふ程、小き神である。」というて、感心された話がある。活ける眞の神に榮えあれ。(二二—三〇)

一一　執成の祈

(列王紀略上第八章三一—六六)

三一若し人其隣人に對ひて犯せることありて、其人誓をもて誓ふことを要められんに、來りて此家において爾の壇の前に誓ひなば、三二爾天において聽きて行ひ、爾の僕等を鞫き、惡しき者を罪して、其道を其首に歸し、義き者を義として、其義に循ひて之に報いたまへ。三三若爾の民イスラエル爾に罪を犯したるがために、敵の前に敗られんに、爾に歸りて爾の名を崇め、此家にて爾に祈り願ひなば、三四爾天において聽き、爾の民イスラエルの罪を救して、彼等を爾が其父祖に與へし地に歸らしめ給へ。三五若彼等が爾に罪を犯したるが爲に、天閉ぢて雨无からんに。彼等若此處にむかひて祈り、爾の名を崇め、爾が彼等を苦めたまふときに其罪を離れなば、三六爾天において聽き、爾の僕等爾の民イスラエルの罪を救したまへ。爾彼等に其歩むべき善道を敎へたまふ時は、爾が爾の民に與へて產業となさしめたまひし爾の地に雨を降したまへ。三七若國に饑饉あるか、若くは疫病枯死朽腐噬亡ぼす蝗蟲あるか、若くは其敵國にいりて彼等を其門に圍むか、如何なる災害、如何なる疾病あるも、三八若一人か或は爾の民イスラエル皆、各己の心の災を知りて、此家に向ひて手を舒べなば、其人如何なる祈禱、如何なる懇願を爲すとも、三九爾の居處なる天に於て聽きて赦し行ひ、各の人に其心を知り給ふ如くその道々にしたがひて報いたまへ。其は爾のみ凡の人の心を知り給へばなり。四〇爾かく彼等をして爾が彼等の父祖に與へたまへる地に居る日に、常に爾を畏れしめたまへ。四一且又爾の民イスラエルの者にあらずして、爾の名のために遠き國より來る異邦人は、四二(其は彼等爾の大なる名と强き手と伸べたる腕を聞き及ぶべければなり。)若來りて此家にむかひて祈らば、四三爾の居處なる天に於て聽き、凡て異邦人の爾に顧求むる如く爲し給へ。爾かく地の諸の民をして爾の名をしらしめ、爾の民イスラエルの如く爾を畏れしめ、又我が建てたる此家は爾の名をもて稱呼らるるといふことを知らしめ給へ。四四爾の民其敵と戰はんとて爾の遣したまふ所に出たる時、彼等若爾が選み給へる城とわが爾の名のために建てたる家の方に向ひてエホバに祈らば、四五爾天において彼等の祈禱と懇願を聽きて彼等を助け給へ。四六人は罪を犯さゞる者なければ、彼等爾に罪を犯すことありて、爾彼等を怒り、彼等を其敵に付し、敵かれらを虜として遠近を論はず敵の地に引きゆかん時は四七若彼等虜れゆきし地に於て、自ら顧みて悔い、己を虜へゆきし者の地にて、爾に願ひて、我等罪を犯し、悖れる事を爲したり。我等惡を行ひたりと言

ひ、 四八己を虜へゆきし敵の地にて一心一念に爾に歸り、爾が其父祖に與へたまへる地、爾が選み給へる城とわが爾の名のために建てたる家の方に向ひて爾に祈らば、 四九爾の居處なる天において爾彼等の祈禱と懇願を聽きて彼らを助け、 五〇爾の民の爾に對ひて犯したる事と爾に對ひて過てる其凡の罪過を赦し、彼等を虜へゆける者の前にて彼等に憐を得させ、其人々をして彼等を憐れましめたまへ。 五一其は彼等は爾がエジプトより即ち鐵の爐の中よりいだしたまひし爾の民爾の產業なればなり。 五二願くは僕の祈願と爾の民イスラエルの祈願に、爾の目を開きて凡て其爾に顧求むる所を聽き給へ。 五三其は爾彼等を地の凡の民の中より別ちて、爾の產業となしたまへばなり。神エホバ爾が我等の父祖をエジプトより導き出せし時、モーセによりて言ひ給ひし如し。

五四 ソロモン 此祈禱と祈願を悉くエホバに祈り終りし時、其天にむかひて手を舒べ、膝を屈め居たるを止めて、エホバの壇の前より起ちあがり、 五五立ちて大なる聲にてイスラエルの凡の會衆を祝して言ひけるは、 五六エホバは譽むべきかな。エホバは凡て其言ひ給ひし如く、其民イスラエルに太平を與へ給へり。其僕モーセによりて言ひ給ひし其善言は、皆一も違はざりき。 五七願くは我等の神エホバ我等の父祖と偕に在せしごとく、我等とともに在せ。我等を離れ給ふなかれ。我等を棄てたまふなかれ。

五八願くは我等の心を己に傾けたまひて、其凡の道に歩ましめ、其我等の父祖に命じたまひし誡命と法憲と律例を守らしめたまへ。五九願くはエホバの前にわが願ひし是等の言、日夜われらの神エホバに近くあれ。而してエホバ日々の事に僕を助け、其民イスラエルを助けたまへ。 六〇斯して地の諸〻の民にエホバの神なることゝ、他に神なきことを知らしめ給へ。六一されば爾等我等の神エホバとともにありて、今日の如く爾らの心を完全うしエホバの法憲に歩み、其誡命を守るべしと。 六二斯て王および王と偕にありしイスラエル、皆エホバの前に犧牲を獻げたり。 六三ソロモン酬恩祭の犧牲を獻げたり。即ち之をエホバに獻ぐ。其牛二萬二千羊十二萬なりき。斯王とイスラエルの子孫皆エホバの家を開けり。 六四其日に王エホバの家の前なる庭の中を聖別め、其處にて燔祭と穀祭と酬恩祭の脂とを獻げたり。是はエホバの前なる銅の壇小くして、燔祭と穀祭と酬恩祭の脂とを受くるにたらざりしが故なり。 六五其時ソロモン七日に七日合て十四日、我等の神エホバのまへに節筵を爲せり。イスラエルの大なる會衆、ハマテの入處よりエジプトの河にいたるまで悉く彼と偕にありき。 六六第八日にソロモン民を歸せり。民は王を祝し、エホバが其僕ダビデと其民イスラエルに施したまひし諸〻の恩惠のために、喜び且心に樂みて、其天幕に往けり。

◎祈の中にもわけて貴きは、執成の祈である。ソロモンはその國人の爲に執成の祈をした。彼が後世子孫の爲に獻げた祈は、後に耶蘇がその弟子たちの爲に執成し給うた、ヨハネ傳第十七章の祈を思ひ合さしむるものがある。彼は先づその人民が訴訟事を神の御前に持來る時、その御助によつて正邪曲直を間違なく審き得るやうにと祈つた。人は兎角行がかりや情實の爲に、事の判斷をあやまり易さものである。それ故ソクラテスは毒杯を仰がされ、基督は十字架につけられ給うた樣な、實例さへある。私共

は神を敬うて、正しき審判をなし得るやう、その導を祈り求めねばならない。(三一、三二)

◎ソロモンは、イスラエルの民が罪を犯した報として、敵に破らるゝ場合、天閉ぢて雨无からん場合、又は同じ理由によつて、「若し國に饑饉あるか、若くは疫病、枯死、朽腐、噬亡ぼす蝗蟲あるか、若くは其の敵、國に入りて、彼等を其の門に圍むか」等の場合に、神の宮に向うて手を舒べ、悔改の祈をするに於ては、之を赦し給はんことを祈つて居る。テマン人エリバズもいうた様に、「災禍は塵より起らず、艱難は土より出でず。」(ヨブ五・六)神の御許なしには、いかなる運命も私共に來らぬものであるから、私共が艱難試煉に陷つたやうな場合には、その原因が何處にあるかを考へて、自らを反省すべき筈である。しかもその反省の結果として、自らに罪と過とのあることを見出したならば、素直に悔改めて、神の赦を求むべきは、申す迄もないのである。「神の懲し給ふ人は幸福なり。然れば汝全能者の儆責を輕んずる勿れ。神は傷つけ又裹み、擊ちていため、又その手をもて善く醫し給ふ。」(ヨブ五・一七、一八)といふことも

あるではないか。(三三—四〇)

◎ソロモンは又、イスラエル人にあらざる異邦人が、遠き國より來り、神の宮に向ひて祈る時には、神が彼等を顧み、その願を聽き屆け給はんことを求めた。これはエホバ神が、イスラエル人にとつて、國民的の神であると共に、又世界人類にとつて、共同の父で在し給ふからである。眞理に國境がない。神は一視同仁である。神の前には此の國、彼の民といふ如き隔のあらう筈がない。耶蘇の御言に、「誰にても神の御意を行ふものは、是わが兄弟、わが姉妹、わが母なり。」(マル三・三五)とあり。ウイリアム・ブース大將は又、「救世軍に外國人なし」というて居られる。私共の神は人種、國籍、或は皮膚の色の異同を問はず、あらゆる人民を子として愛し給ふお方である。(四一—四三)

◎ソロモンは又、他日イスラエル人が神に背いた結果、敵國から攻められ、其の人民が捕虜として遠國に連れ行かれた場合を豫想し、彼等が敵地にて一心一念に神に立歸り、悔改むる場合には、神がその祈禱と懇願とを聽き容れ、凡ての罪過を赦し、「彼等

を虜へゆける者の前にて、彼等に憐を得させ」給はんことを願うた。これは後に、ダニエルが、バビロンに連れ行かれた捕虜であつたに拘らず、その人民から厚き信任を受け、その國政に參與するに至つた如き事例をいふのである。(ダニ六・一、二) 神はその行屆いた攝理を、徧く諸國諸民の上に行ひ給ふ故である。(四四—五三)

◎ソロモンは、エホバに祈ることを終りし時、大聲に凡ての會衆を祝福していうた。

「願くばエホバの前にわが願ひし是等の言、日夜われらの神エホバに近くあれ。而してエホバ日々の事に僕を助け、其の民イスラエルを助けたまへ」と。如何にもその如く、神はその人民が宮にて禮拜する時と同じく、またその日常生活に於て、神を崇めんことを期待し給ふ。「日々に我等の荷をおひたまふ主、われらのすくひの神はほむべきかな。神はしばしば、われらを助けたまへる神なり。死よりのがれうるは主エホバに由る。」(詩六八・一九、二〇) 又「汝の能力は、汝が日々に需むるところに循はん。」(申三三・二五) 等とあるのは、それである。ウイリアム・ブース大將の言に、「眞の救世軍人にとつては、その毎日が殘らず安息日であるべく、三度の食事が悉く主の聖餐である

べきものぞ。」というてある。私共はその日常の生活に於て、神を崇める者でなくてはならぬ。(五四—六一)

◎斯て王および王と偕にありしイスラエル人が、皆エホバの前に犧牲を獻げた爲、銅の壇だけでは足りなくて、宮の庭を聖別め、其處にて燔祭と禮祭と酬恩祭の脂とを獻げ、十四日間に亘りて、エホバの前に節筵を爲しゝに、人民は王を祝し、「エホバが其の僕ダビデと、其の民イスラエルに施したまひし、諸の恩惠のために喜び、且心に樂しみて、其の天幕に往いた」とある。斯の如くイスラエル人は、神に犧牲を獻ぐることによつて、大なる祝福を得たのである。私共も亦神から恩惠を受くることの幸福を知ると共に、神に犧牲を獻ぐることの喜を、味ひ知らねばならぬ。基督は「我がために人、なんぢらを罵り、また責め、詐りて各樣の惡しきことを言ふときは、汝ら幸福なり。喜び喜べ、天にて汝らの報は大なり。汝等より前にありし預言者等をも、斯く責めたりき。」(マタ五・一一、一二) と仰せられ。使徒等は又、「御名のために、辱しめらるゝに相應しき者とせられたるを、喜んだ」(使五・四一) といふやうな例もある。私共

は「基督のために、啻に彼を信ずることのみならず、また彼のために苦しむことをも賜り居る」（ピリ一・二九）からである。（六二―六六）

一二　國威の發揚

（列王紀略上第九章）

一ソロモン、エホバの家と王の家を建つる事を終へ、且凡てソロモンが爲さんと欲ひし望を遂げし時、二エホバ再びソロモンに、嘗てギベオンにて顯現れたまひし如くあらはれ給ひて、三彼に言ひ給ひけるは我は爾が我まへに願ひし祈禱を聽きたり。我爾が建てたる此家を聖別めて、わが名を永く其處に置くべし。且わが目とわが心は恒に其所にあるべし。四爾若爾の父ダビデの歩みし如く、心を完うして正しく我前に歩み、わが爾に命じたる如く凡て行ひて、わが法憲と律例を守らば、五我は爾の父ダビデに告げて、イスラエルの位に上る人爾に缺くること無かるべしと言ひし如く、爾のイスラエルに王たる位を固うすべし。六若爾等又は爾等の子孫全く轉きて我にしたがはず、わが爾等の前に置きたるわが誡命と法憲を守らずして、往きて他の神に事へ之を拜まば、七我イスラエルをわが與へたる地の面より絶たん、又わが名のために我が聖めたる此家をば、我わがまへより投げ棄てん。而してイスラエルは諸の民の中に諺語となり、嘲笑となるべし。八且又此家は高くあれども、其傍を過ぐる者は皆之に驚き嘶きて言はん。エホバ何故に此地に此家に斯爲したまひしやと。九人答へて、彼等は己の先祖をエジプトの地より導き出せし其神エホバを棄て、他の神に附從ひ、之を拜み之に事へしに因りて、エホバ此の凡の害悪を其上に降せるなりと言はん。一〇ソロモン二十年を經て二の家即ちエホバの家と王の家を建てをはり、ヒラムにガリラヤの地の城邑二十を與へたり。二其はツロの王ヒラムはソロモンに凡て其望に循ひて、香柏と松の木と金を供給りたればなり。一二ヒラム、ツロより出てソロモンが己に與へたる諸邑を見しに、其目に善からざりければ、一三我兄弟よ、爾が我に與へたる此等の城邑は何なるやといひて、之をカブルの地となづけたり。其名今日まで のこる。一四嘗てヒラムは金百二十タラントを王に遣れり。一五ソロモン王の徴募人を興せし事は是なり。即ちエホバの家と自己の家と、ミロとエルサレムの石垣と、ハゾルとメギドンとゲゼルを建てんが爲なりき。一六エジプトの王パロ曾て上りてゲゼルを取り、火を以て之を燬き、其邑に住めるカナン人を殺し、之をソロモンの妻なる其女に與へて粧奩と爲せり。一七ソロモン、ゲゼルと下ベテホロンと、一八バアラと國の野にあるタデモル、一九及びソロモンの有てる府庫の諸邑、其戰車の諸邑、其騎兵の諸邑、竝にソロモンがエルサレム、レバノンおよび其凡の領地に於て、建てんと欲ひし者を盡く建てたり。二〇凡てイスラエルの子孫に非ざるアモリ人、ヘテ人、ペリジ人、ヒビ人、エブス人の遺存る者、二一其地に在りて彼等の後に遺居る子孫、即ちイスラエルの子孫の滅し盡すことを得ざりし者に、ソロモン奴隷の徴募を行ひて今日に至る。二二然れどもイスラエルの子孫をば、ソロモン一人も奴隷と爲さざりき。其は彼等は軍人、彼の臣僕、牧伯、大將たり、戰車と騎兵の長たればなり。二三ソロモンの工事を管理れる首なる官吏は五百五十人にして

工事に働く民を治めたり。二四爰にパロの女ゞビデの城より上りて、ソロモンが彼の爲に建てたる家に至る。其時にソロモン、ミロを建てたり。二五ソロモン、エホバに築きたる壇の上に、年に三次燔祭と酬恩祭を獻げ、又エホバの前なる壇に香を焚けり。ソロモン斯家を全うせり。二六ソロモン王エドムの地紅海の濱に於て、エラテの邊なるエジオンゲベルにて船數隻を造れり。二七ヒラム海の事を知れる舟人なる其僕を、ソロモンの僕と偕に其船にて遣せり。二八彼等オフルに至り、其處より金四百二十タランントを取りて、これをソロモン王の所に携來る。

◎神は前に、ソロモンが位に卽いて間もなく、ギベオンにて彼に顯れ、「我何を汝に與ふべきか、汝求めよ」と仰せられ、彼が己の爲に長壽を求めず、己の爲に富有を求めず、又己の敵の生命をも求めずして、惟訟を聽き別る才智を求めたるを嘉し、其の願の如く、彼に賢明く、聰慧き心を與ふると共に、その求めざりし富と貴とをも、附添へて與ふべきことを示し給うた。(列上三・五—一四) それから二十餘年を經て、ソロモンがエホバの家と王の家とを建つることを竣へた時、神は重ねて彼に顯れ、彼がその後の生活について心得べきことを、懇ろに示し給うたのは、行屆いた御取計といはねばならない。斯して神は、ソロモンが生活の首途に在る時之を顧み、今は復その得意の頂上に在る時、之を戒めて、その晩節を全うせしめんとし給うたのである。

「神よ、なんぢわれを、幼少より教へたまへり。われ今にいたるまで、汝のくすしき事跡をのべ傳へたり。神よ、ねがはくはわれ老いて頭髮しろくなるとも、我がなんぢの力を次代にのべ傳へ、なんぢの大能を世にうまれいづる凡ての者に宣傳ふるまで、我をはなれ給ふなかれ。」(詩七一・一七、一八) と、詩篇の作者はいうて居る。私共をして誤りなく生活の門出をなさしめ、又間違なく生活の終を全うせしむる者は、神である。たゞ神のみ私共の一生を通じて、力と導とを與へ給ふことを得るのである。(一—三)

◎かくて神はソロモンに向ひ、彼とその子孫とが何處までも心を全うして、正しく神の前に歩み、その憲法と律例とに服從して幸福を得べく、さもなくばあらゆる禍を身にうけて、果は諸〻の民の中に諺語となり、嘲笑となるべきことを示し給うた。グランド將軍はその乘つた馬車が、過つて通りがかりの婦人に傷を負はせたのを見て、慇懃にその罪を謝し、快く三十弗の罰金を拂うて、交通規則の違反に對する處分を甘受した。これは彼が身を以て、如何に國法を遵守すべきかを、示したものといふこ

とが出來る。私共も亦さうした素直な心掛を以て、國の法律を重んじ、又神の法憲に服從したいものである。(四—九)

◎ソロモンは、ツロの王ヒラムが、香柏と、松の木と、金とを供給して、建築工事に多大の便宜を與へたるに對し、其の謝禮として、ガリラヤの城邑二十を與へた。そこでヒラムはツロより出でて、ソロモンが己に與へた諸邑を見分したが、あまり氣に入らなかつた故、「我が兄弟よ、爾が我に與へたる此等の城邑は何なるや」といひて、之をカブル(氣に入らぬ、又は役立たぬ)の地と名づけた。元來ツロの人は商工業が得手で、殊に外國貿易に長じた人民ゆゑ、農業牧畜のことを好まず、ヒラムがガリラヤの城邑を喜ばなかつたのも、主として之が爲であらうといふことである。然しながら此の事があつたにも拘らず、ソロモンとヒラムとの交情は、その以後と雖も、更に變りがなかつたのを見れば、彼等の友誼は、目前の小利害を超越するものであつたのが偲ばれて、床しいことに覺えらるゝ。彼等は算盤勘定以上の、交を結んで居つたのである。(一〇—一四)

◎ソロモンは神の家と己が住宅とを造り上げた後、更に幾多の城邑を建設した。その爲には「凡てイスラエルの子孫に非ざるアモリ人、ヘテ人、ペリジ人、ヒビ人、エブス人の遺存れる者、其の地に在りて彼等の後に遺居れる子孫、卽ちイスラエルの子孫の滅し盡すことを得ざりし者」に對し、奴隷の徵募を行うたが、イスラエルの子孫は一人も奴隷として用ひなかつた。これはモーセの律法に、「汝の兄弟、零落れて汝に身を賣ることあらば、汝これを奴隷のごとくに使役ふべからず。汝の有つ奴隷は男女ともに、汝の四周の異邦人の中より取るべし。男女の奴隷は是る者の中より買ふべきなり。」(レビ二五・三九、四四)とあるのを、そのまゝ實行したものといふことが出來よう。斯して彼がイスラエル人を、奴隷として用ひなかつたのは善い。ついでに異邦人をも奴隷として用ひなかつたら、更に善かつたであらう。けれども此の如きは、新約の時代に至り、基督の光に照されて後に、はじめて學び得べき教訓であつた。これはソロモンの智慧を以てしても、尙悟り得ない眞理にて、他日「ソロモンより大なる者」(ルカ一一・三一)の出現を待ち、はじめて徐々に、解決せらるべき問題であつた。(一五—二四)

◎「ソロモン、エホバに築きたる壇の上に、年に三次、燔祭と酬恩祭を獻げ、又エホバの前なる壇に香を焚けり」とあり。イスラエルの子孫は、そのエジプトを出た最初から、「汝無酵パンの節筵を守るべし。汝七週の節筵、すなはち麥秋の初穗の節筵（ペンテコステ）を爲し、又年の終に收藏の節筵をなすべし。年に三回、汝の男子みな、主エホバ、イスラエルの神の前に出づべし。」（出三四・一八、二二、二三）と命ぜられて居つた。今ソロモンが神の宮にて、エホバに築きたる壇の上に、毎年三度の祭を行うたのは、古の律法に定められた所を、事新しく實行し、その死んだ文字に新しき生命を吹込んだものといふべく、喜ばしきことの至である。（二五）

◎ソロモンはエドムの地、紅海の濱に於て、數隻の船を造つた。しかもヒラムから「海の事を知れる舟人」を送られ、その援助によつてオフルに至り、其處より金四百二十タラント（金一タラントは我が約六萬圓に當る）を得來つたとあり。このオフルといふのは、今の印度であつたとも、又は南アラビヤであつたとも、いはれて居る。斯してソロモンは、海運の業によつて多分の利益を得た。彼は黃金の力を解する者であつた。それにも拘らず、彼は神に屬ける智慧と聰明との、それにも勝つて貴きことを知つて居つた。すなはちその箴言に、「智慧を求め得る人、および聰明をうる人は幸福なり。そは智慧を獲るは銀を獲るに愈り、その利は精金よりも善ければなり。智慧は眞珠よりも貴し。汝の凡ての財寶も之と比ぶるに足らず。」（箴三・一三―一五）というたのは、それである。（二六―二八）

一三　シバの女王

（列王紀略上第十章）

一シバの女王、エホバの名に關はるソロモンの風聞を聞き及び、難問を以てソロモンを試みんとて來れり。二彼甚だ多くの部從、香物と甚だ多くの金と寶石を負ふ駱駝を從へて、エルサレムに至る。彼ソロモンの許に來り、其心にある所を悉く之に言ひたるに、三ソロモン彼に其凡の事を告げたり。王の知らずして彼に告げざる事なかりき。四シバの女王ソロモンの諸〻の智慧と其建てたる家と、五其席の食物と其臣僕の列坐る事と、其侍臣の伺候、および彼等の衣服と其酒人と、其エホバの家に上る階級とを見て、全く其氣を奪はれたり。六彼王にいひけるは、我が自己の國にて爾の行爲と爾の智慧に付いて

聞きたる言は眞實なりき。 七然れど我來りて目に見るまでは其言を信ぜざりしが、今視るに、其半も我に聞えざりしなり。爾の智慧と昌盛はわが聞きたる風聞に越ゆ。 八常に爾の前に立ちて爾の智慧を聽くこれら是等の人、爾の臣僕は幸福なるかな。 九爾の神エホバは讃むべきかな。エホバ爾を悅び、爾をイスラエルの位に上らせ給へり。エホバ永久にイスラエルを愛し給ふに因りて、爾を王となして公道と義を行はしめ給ふなりと。 一〇彼乃ち金百二十タラント及び甚だ多くの香物と寶石とを王に饋れり。シバの女王のソロモン王に饋りたるが如き多くの香物は重れて至らざりき。 一一オフルより金を載來りたるヒラムの船は、亦オフルより多くの白檀木と寶石とを運び來りければ、 一二王白檀木を以てエホバの家と王の家とに欄干を造り、歌謠者のために琴と瑟を造れり。是の如き白檀木は至らざりき。亦今日までも見たることなし。 一三ソロモン王、王の例に循ひてシバの女王に物を饋りたる外に、又彼が望に任せて凡て其求むる物を饋れり。斯て彼其臣僕等と共に歸りて其國に往けり。 一四偖一年にソロモンの所に至れる金の重量は六百六十六タラントなり。 一五外に又商賈および商旅の交易、竝にアラビヤの王等と國の知事等よりも至れり。 一六ソロモン王展金の大楯二百を造れり。其大楯には各六百シケルの金を用ひたり。 一七又展金の干三百を造れり。一の干に三斤の金を用ひたり。王是等をレバノン森林の家に置けり。 一八王又象牙をもて大なる寶座を造り、純金を以て之を蔽へり。 一九其寶座に六の階級あり。寶座の後に圓き頭あり。坐する處の兩旁に扶手ありて、扶手の側に二の獅子立てり。 二〇又其六の階級に十二の獅子此旁彼旁に立てり。是の如き者を作れる國はあらざりき。 二一ソロモン王の用ひて飲める器は皆金なり。又レバノン森林の家の器も皆純金にして、銀の物無かりき。銀はソロモン

の世には貴まざりしなり。 二二其は王海にタルシ、の船を有ちて、ヒラムの船と倶にあらしめ、タルシシの船をして三年に一度、金銀象牙猿猴および孔雀を載せて來らしめたればなり。 二三抑ソロモン王は富有と智慧に於て天下の諸の王よりも大なりければ、 二四天下皆神がソロモンの心に授け給へる智慧を聽かんとて、ソロモンの面を見んことを求めたり。 二五人々各その禮物を携へ來る。卽ち銀の器、金の器、衣服、甲冑、香物、馬、騾毎歲定分ありき。 二六ソロモン戰車と騎兵を集めたるに、戰車千四百輛、騎兵一萬二千ありき。ソロモン之を戰車の城邑に置き、或はエルサレムにて王の所に置けり。 二七王エルサレムに於て銀を石の如くに爲し、香柏を平地の桑樹の如くに爲して多く用ひたり。 二八ソロモンの馬を獲たるはエジプトとコアよりなり。卽ち王の商賈コアより價値を以て取れり。 二九エジプトより上り出る戰車一輛は銀六百にして、馬は百五十なりき。斯の如くヘテ人の凡の王等およびスリアの王等のために其手をもて取出せり。

◎シバの女王は、エホバの名に關はるソロモンの風聞を聞き及び、難問を以て之を試みんとて出で來つた。耶蘇は後に彼女のことを、「南の女王」（ルカ一一・三一）と呼び給うた。これは多分、エテオピヤの女王であつたらうとのことである。いづれにしても彼女が、その富貴と權勢とを以て滿足せず、エホバの道を學ばん爲に、千里を遠しとせずして出で來つたのは、敬服に値する。後にエテオピヤの女王カンダケの權官にして、

凡ての寶物を掌どる閹人が、禮拜の爲にエルサレムに上り、歸りの馬車の中にて、謙遜つてピリポの教をうけたといふ物語も、思ひ合さるゝのである。(使八・二六―三九)耶蘇は此の女王のことについて、「南の女王、審判のとき、今の代の人と共に起きて、之が罪を定めん。彼はソロモンの智慧を聽かんとて、地の極より來れり。視よ、ソロモンよりも勝るもの此處に在り。」(ルカ一一・三一)と仰せられた。私共は彼女に負けない程の熱心を以て、耶蘇にある智慧を尋ね求めねばならぬ。實に彼はソロモンよりも勝る、「神の智慧」(コリ前一・二四)で在し給ふからである。(一―三)

◎シバの女王は、ソロモンの諸の智慧と、其の建てたる家と、その前後左右に奉仕する侍臣の樣子などを見て、全く氣を奪はれたのである。彼女はソロモンに向うていうた。「我が自己の國にて、爾の行爲と爾の智慧に付いて聞きたる言は眞實なりき。然れど我來りて目に見るまでは、其の言を信ぜざりしが、今視るに其の半も我に聞えざりしなり。爾の智慧と昌盛は、わが聞きたる風聞に越ゆ」と。私共の基督に於ける也亦此の如く、之に近づけば近づく程、その智慧と能力との絶大なるを見出し、今更

のやうに驚嘆する他はないのである。「エッサイの株より一つの芽いで、その根より一つの枝はえて、實をむすばん。その上にエホバの靈とゞまらん。これ智慧聰明の靈、謀略才能の靈、知識の靈、エホバをおそるゝ靈なり。」(イザ一一・一、二)又「基督には、智慧と知識との凡ての寶藏れあり。」(コロ二・三)等とあり。私共は教へられ易い謙遜な態度を以て、基督に在る智慧と知識とを分け與へられんことを、求めねばならぬ。私共はマリヤと同じ樣に、屢々「耶蘇の足下に坐し、御言を聽く」(ルカ一〇・三九)心がけがなくてはならぬ。(四―七)

◎女王はソロモンの、聞きしに勝る智慧と知識とに驚いていうた。「常に爾の前に立ちて、爾の智慧を聽く是等の人、爾の臣僕は幸福なるかな」と。彼女はソロモンの侍臣の、ソロモンから受くる教訓と感化とを、羨しく覺えたのである。その如く神の聖徒は、絶えず周圍の人々に、神々しき感化を及ぼして、居るべきものである。「薔薇のある所は、土もまた香ばしい」とは、さうした狀をいふのである。女王は又、そのことについて神を讃め、「爾の神エホバは讃むべきかな。エホバ爾を悅び、爾をイスラエル

の位に上らせ給へり云々」というた。その如く私共は年中絶えず、その身を以て、神の榮光をあらはし、出會ふほどの人々をして、神を讃美せしむるようでありたきものである。(八、九)

◎南の女王が、多分の金と、甚だ多くの香物と寶石とを、ソロモンに饋りたるに對し、ソロモンからも、その返禮として莫大の贈物をなし、「又彼が望に任せて、凡て其の求むる物を饋れり」とあり。彼等の間には、豪奢な贈答品を取交された。然しながら彼等は、さうした此の世の富も、神の前にはその價値少きものであることを、心得て居つた。卽ちソロモンが書いたといはるゝ傳道の書には、「貨財增せばこれを食む者も增すなり。その所有主は唯目にこれを見るのみ。其の外に何の益かあらん。我また日の下に患の大なる者あるを見たり。すなはち財寶のこれを蓄ふる者の身に害をおよぼすことある、是なり。」(傳五・一一、一三)とある。それにつけても私共は、己がために財寶を地に積むのでなくて、反つて財寶を天に積まねばならぬ。(マタ六・一九、二〇) 私共は又「基督の測るべからざる富」(エペ三・八)を獲得し、之を教外の人々にまでも宣傳へ得

るやうでありたい。(一〇—一三)

◎偖一年に王の許に至れる金の重量は、六百六十タラント(金一タラントは約我が六萬圓に當る)にて、「商賣および商旅の交易、竝にアラビヤの王等と、國の知事等よりも至れり」とあり。ソロモンはそれらを用ひて大楯小楯を造り、又象牙をもて大なる寶座を造り、純金を以て之を蔽うた。彼がレバノンの森木の家に用ふる器物は皆純金にして、銀のものはなかつたのである。所謂ソロモンの榮華も、こゝに至つて極まつたといはねばならない。然しながら後に耶蘇は宣うた。「又なにゆゑ衣のことを思ひ煩ふや。野の百合は如何にして育つかを思へ、勞せず、紡がざるなり。然れど我なんぢらに告ぐ、榮華を極めたるソロモンだに、その服裝この花の一つにも及かざりき。今日ありて明日、爐に投げ入れらるゝ野の草をも、神はかく裝ひ給へば、まして汝らをや。あゝ信仰うすき者よ。」(マタ六・二八—三〇)と。されば私共は何を食ひ、何を飲み、何を著んとて思ひ煩ふことなく、それらの事は一切天の父の御手にまかせて、先づ神の國と神の義とを求めるやうでなくてはならぬ。(一四—二三)

◎ソロモンはその最初、ギベオンにて夜の夢にエホバに見え、富と貴とを求めずして、ただ賢明く、聰慧を心を求めたので、神は喜んでその求むる智慧を彼に與ふると共に、また彼が求めざりし富と貴とをも、彼に加へ給うた。此の如く棄てる者は得るのである。神の爲に失ふ者は、與へらるゝのである。耶蘇がその弟子にむかひ、「まことに汝らに告ぐ、我がため、福音のために、或は家、或は兄弟、あるひは姉妹、或は父、或は母、或は子、或は田畑をすつる者は、誰にても今、今の時に百倍を受けぬはなし。卽ち家、兄弟、姉妹、母、子、田畑を迫害と共に受け、また後の世にては、永遠の生命を受けぬはなし。」(マル一〇・二九、三〇)と仰せられたのも、その道理を示されたものである。(二四—二九)

一四　ソロモンの晩年

(列王紀略上第十一章)

一ソロモン王パロの女の外に、多くの外國の婦を寵愛せり。卽ちモアブ人、アンモニ人、エドミ人、シドン人、ヘテ人の婦を寵愛せり。二エホバ曾て是等の國民についてイスラエルの子孫に言ひ給ひけらく、爾等は彼等と交はるべからず。彼等も亦爾等と交はるべからず。彼等必ず爾等の心を轉して彼等の神々に從はしめんと。しかるにソロモン彼等を愛して離れざりき。三彼妃公主七百人、嬪三百人あり。其妃等彼の心を轉せり。四ソロモンの年老いたる時、妃等其心を轉移して他の神に從はしめければ、彼の心其父ダビデの心の如く、其神エホバに全からざりき、五其はソロモン、シドン人の神アシタロテに從ひ、アンモニ人の惡むべき者なるモロクに從ひたればなり。六ソロモン斯エホバの目のまへに惡を行ひ、其父ダビデの如く全くはエホバに從はざりき。七爰にソロモン、モアブの憎むべき者なるケモシの爲、又アンモンの子孫の憎むべき者なるモロクのためにエルサレムの前なる山に崇邱を築けり。八彼又其異邦の凡の妃の爲にも然せしかば、彼等は香を焚きて己々の神を祭れり。九ソロモンの心轉りてイスラエルの神エホバを離れしによりて、エホバ彼を怒り給ふ。エホバ嘗て兩次彼に顯はれ、一〇此事に付いて彼に他の神に從ふべからずと命じ給ひけるに、彼エホバの命じたまひし事を守らざりしなり。一一エホバ、ソロモンに言ひ給ひけるは、此事爾にありしに因り、又汝わが契約とわが爾に命じたる法憲を守らざりしに因りて、我必ず爾より國を裂きはなして之を爾の臣僕に與ふべし。一二然れど爾の父ダビデの爲に爾の世には之を爲さざるべし。我爾の子の手より之を裂きはなさん。一三但し我は國を盡くは裂きはなさずして、わが僕ダビデのために又わが選みたるエレサレムのために、一の支派を爾の子に與へんと。一四是に於てエホバ、エドミ人ハダデを興してソロモンの敵と爲したまふ。彼はエドム王の裔なり。一五曩にダビデ、エドムに事ありし時、軍の長ヨアブ上りて其戰死せし者を葬り、エドムの男を

盡く擊殺しける時に方りて、一六（ヨアブはエドムの男を盡く絶つまで、イスラエルの群衆と偕に六月其處に止れり）。一七ハダデ其父の僕なる數人のエドミ人と共に逃げてエジプトに往かんとせり。時にハダデは尙小童子なりき。一八彼等ミデアンを起出てパランに至り、パランより人を伴ひてエジプトに往き、エジプトの王パロに詣るに、パロ彼に家を與へ、食糧を定め、且土地を與へたり。一九ハダデ大にパロの心にかなひしかば、パロ已の妻の妹即ち王妃タベネスの妹を彼に妻せり。二〇タベネスの妹彼に男子ゲヌバテを生みければ、タベネス之をパロの家の中にて乳離れせしむ。ゲヌバテ、パロの家にてパロの子の中にありき。二一ハダデ、エジプトに在りてダビデの其先祖と偕に寢りたると、軍の長ヨアブの死にたるを聞きしかば、ハダデ、パロに言ひけるは、我を去らしめてわが國に往かしめよと。二二パロ彼にいひけるは、爾我と共にありて何の缺けたる處ありてか、爾の國に往かん事を求むる。彼言ふ、何も無し。然れども願くは我を去らしめよ、去らしめよ。二三神又エリアダの子レゾンを興して、ソロモンの敵となせり。彼は其主人ゾバの王ハダデゼルの許を逃去りたる者なり。二四ダビデがゾバの人を殺したる時に、彼人を自己に集めて一隊の首領となりしが、彼等ダマスコに往きて彼處に住み、ダマスコを治めたり。二五ハダデが爲したる害の外に、レゾン、ソロモンの一生の間イスラエルの敵となれり。彼イスラエルを惡みてスリアに王たりき。二六ゼレダのエフラス人ネバテの子ヤラベアムはソロモンの僕なりしが、其母の名はゼルヤと曰ひて嫠婦なりき。彼も亦其手を擧げて王に敵す。二七彼が手を擧げて王に敵せし故は此なり。ソロモン、ミロを築き、其父ダビデの城の缺損を塞ぎ居たり。二八其人ヤラベアムは大なる能力ある者なりしかば、ソロモン此少者が事に勤むるを見て、之を立ててヨセフの家の凡の役を督らしむ。二九其頃ヤラベアム、エルサレムを出し時、シロ人なる預言者アヒヤ路にて彼に遭へり。彼は新き衣服を着ゐたりしが、彼等二人のみ野にありき。三〇アヒヤ其着たる新き衣服を執へて之を十二片に裂き、三一ヤラベアムに言ひけるは、爾自ら十片を取れ。イスラエルの神エホバ斯言ひたまふ、視よ、我國をソロモンの手より裂きはなして、爾に十の支派を與へん。三二（但し彼はわが僕ダビデの故に因り、又わがイスラエルの凡の支派の中より選みたる城エルサレムの故に因りて、一の支派を有つべし。）三三其は彼等我を棄てシドン人の神アシタロテと、モアブの神ケモシと、アンモンの子孫の神モロクを拜み、其父ダビデの如くわが道に歩みてわが目に適ふ事、わが法憲とわが律例を行はざればなり。三四然れども我は國を盡くは彼の手より取らざるべし。我が選みたるわが僕ダビデ、わが命令とわが法憲を守りたるに因りて、我彼が爲にソロモンを一生の間主たらしむべし。三五然れど我其子の手より國を取りて、其十の支派を爾に與へん。三六其子には我一の支派を與へて、わが僕ダビデをしてわが己の名を置かんとてわがために擇みたる城エルサレムにて、わが前に常に一の光明を有たしめん。三七我爾を取らん。爾は凡て爾の心の望む所を治め、イスラエルの上に王となるべし。三八爾若わが爾に命ずる凡の事を聽きて吾が道に歩み、我目に適ふ事を爲し、わが僕ダビデが爲せし如く、我が法憲と誡命を守らば、我爾と偕にありて、わがダビデの爲に建てし如く、爾のために鞏固き家を建てゝ、イスラエルを爾に與ふべし。三九我之がためにダビデの裔を苦めん。されど永遠には非じと。四〇ソロモン、ヤラベアムを殺さんと求めければ、ヤラベアム起ちてエジプトに逃遁れ、エジプトの王シシヤクに至りて、ソロモンの死ぬるまてエジプトに居たり。四一ソロ

モンの其餘の行爲と凡て彼が爲したる事および其智慧は、ソロモンの行爲の書に記さるゝにあらずや。

四二ソロモンのエルサレムにてイスラエルの全地を治めたる日は四十年なりき。四三ソロモン其父祖と偕に寢りて其父ダビデの城に葬らる。其子レハベアム之に代りて王となれり。

◎ソロモンは女色の爲にその身を誤つた。イスラエルに王たらん者は、「妻を多くその身に有ちて、心を迷はすべからず。」（申一七・一七）とは、モーセの時代からの訓戒にて、女色の戒むべきことについては、所謂ソロモンの箴言の中にも、多く之を教へてある。たとへば「小子等よ、いま我にきけ、我が口の言に耳を傾けよ。なんぢの心を淫婦の道にかたむくる勿れ。またこれが徑に迷ふこと勿れ。そは彼は多くの人を傷つけて仆せり、彼に殺されたる者ぞ多かる。その家は陰府の途にして死の室に下りゆく。」（箴言七・二四―二七）又「なんぢの力を女につひやすなかれ。」（箴三一・三）等いふ如きは、それである。それにも拘らず、ソロモンは千人からの妻妾を蓄へ、淫蕩なる生活の極を盡した。しかもそれは彼が老年に至つて後、愈々劇しくなつたものゝ如く見える。此の如く世の所謂偉人の生活の、最後の數頁は、頽廢氣分に滿されて、殆んど見るに忍びざるものが多くある。人は晩節を汚さぬやう、注意することが大事である。（一一四）

◎彼が寵愛する后等は、彼の心を移して、あだし神に從はしめた。彼はヱホバ神を捨てたわけではないけれども、その父ダビデの如く、全き心を以て之に事ふることをせず、同時にシドン人の神アシタロテ、アンモニ人の神モロク等いふ偶像を拜み、その爲に宮を設けなどするに至つた。斯して「ソロモンの智慧」と謳はれた程の智慧者が、終に偶像禮拜者となつたといふのは、殆んど想像にも及ばない話である。アラビヤ人にてサバットといふ者があり、一度は基督に對する信仰を受容れながら、やがて又之を捨て、反つてマホメット教に有利なことを書きなどしたものゝ、一向その心に滿足を覺えなかつた。彼はいうたのである。「私は不愉快である。私は熱い砂の山を、頭に被つて居るやうに覺える。私は何をなしつゝあるかを知らずに、ただ動き廻つて居るのである。」と。眞の神を知りながら、之に叛いた者の生涯は、概して皆此の如く、不安で悲慘なものである。（四一八）

◎神はソロモンを怒り給うた。曾ては彼を愛し、（サム後一二・二四）之を悅び給うた（列上

一〇・九)こともあつたが、今は反つて之を怒り給ふこととなつたのは、神が彼に對する御意を變へ給うたのではなくて、彼が神に對する態度を變へたからである。「なんぢ憐憫あるものには憐憫あるものとなり、完全きものには完全きものとなり、きよきものには潔きものとなり、僻むものにはひがむ者となり給ふ。」(詩一八・二五、二六)とあり。ソロモンが神に對して僻む者となつた結果は、神が又彼に對して僻む者となり給うたのである。使徒パウロは、ロマにある聖徒に向ひて、「神の仁慈と、その嚴肅とを見よ。嚴肅は倒れし者にあり。仁慈はその仁慈に止る汝にあり。」(ロマ一一・二二)というて居る。心得て置かねばならぬことである。(九―一三)

◎神はエドミ人ハダデと、又ゾバ人レゾンとを興して、ソロモンの敵とならせ給うた。前にダビデがエドム人と戰うた時、その將軍ヨアブは、エドムの男子を盡く擊殺したのであるが、その際エドム王の子なるハダデは、なほ小童子であり。その父の僕等數人に助けられて、逃れてエジプトに行き、追々成人するにつれて、その國を復興せんとする志あり、隨つてソロモンに反抗するに至つたのである。彼はソロモンの側から見れば叛逆者であつたが、エドミ人から見れば、立派な愛國者であつたらうと思ふ。それにつけても私共は、一小童子を輕んじてはならない。獨逸に小學校の教師があり、その教子に出會ふ毎に、脱帽して丁寧に會釋をした。「子供等に對して、あまり禮儀に過ぎるではありませんか」といふ者があると、彼は答へて、「他日この子供等の中から、如何なる偉人が出ないとも限らない故、之を尊敬するのであります。」というたが、後年果して彼の教子の中から、マルチン・ルーテルを出したといふ話がある。少年は末畏ろしいものであるから、之を尊重して、なるべく速に、彼等を神に來らしむるやう、教へ導きたきものである。(一四―二五)

◎シロ人なる預言者アヒヤは、道にてエフラタ人ネバテの子ヤラベアムに會ひ、その著たる新しき衣服を執へて、之を十二片に裂き、彼に向うていうた。「爾自ら十片を取れ。イスラエルの神エホバ斯く言ひ給ふ。視よ、我國をソロモンの手より裂きはなして、爾に十の支派を與へんと。」ヤラベアムが優れて善かつた爲に、かうした選を受けたのでなく、ソロモンが惡しき事を行うた爲に、神は彼を用ひて、之を懲し給ふて

ととなつたのである。青神はイスラエル人をして、カナン人を征服せしむるに當り、

「汝の神ヱホバ、汝の前より彼らを逐ひはらひたまはん後に、汝心に言ふなかれ。云く、我の義しきがために、ヱホバ我をこの地に導きいりて、これを獲させ給へりと。そはこの國々の民の惡しきがために、ヱホバこれを汝の前より逐ひはらひ給ふなり。汝の往きてその地を獲るは、汝の義しきによるにあらず、又なんぢの心の直きによるに非ず、この國々の民惡しきが故に、汝の神ヱホバ、之を汝の前より逐ひはらひ給ふなり。」(申九・四、五) と仰せられた如く。ヤラベアムがイスラエルの、十の支派を支配するに至つた理由も、また彼の義しきによるにあらず、その心の直きによるに非ず、全くソロモンの爲す所惡しきが故に、かくなりたるものである。ヤラベアムは宜しく謙遜つて、神が彼に命ずる凡てのことを聽き、その道に歩み、その眼に適ふことをなすべき筈であつたが、不幸にして彼は、さうした信仰と服從の精神とに、缺げて居つたのである。(二六—四〇)

◎朝に快晴であつた一日も、夕には淫雨を齎すことがある如く、明るいソロモンの生涯は、暗い最後を以て幕を下さるゝことゝなつた。傳道之書はソロモンが、晩年に著したものだといふ說がある。若し果してさうだとすれば、その中にも、「我は金銀を積み、王等と國々の財寶を積み上げたり。また歌詠男女を得、世の人の樂なる妻妾を多く得たり。斯く我は大なる者となり、我より先にエルサレムにをりし諸の人よりも大になりぬ。我が智慧も亦わが身を離れざりき。凡そわが目の好む者は我之を禁ぜず、凡そわが心の悅ぶ者は我之を禁ぜざりき。卽ち我はわが諸の勞苦によりて快樂を得たり。是は我が諸の勞苦によりて得たる所の分なり。我わが手にて爲したる諸の事業、および我が勞して事を爲したる勞苦を顧みるに、皆空にして風を捕ふるが如くなりき。日の下には益となる者あらざるなり。」(傳二・八—一一) といひ。又その最後に、「多く書をつくれば竟なし。多く學べば體疲る。事の全體の歸する所を聽くべし。云く、神を畏れ、その誡命を守れ。是は諸の人の本分たり。」(傳一二・一二、一三) といふた如き、彼が多年の生活と行動とから學び得た、體驗を語るものとして、意義極めて深長なるを覺えしめる。(四一—四三)

一五　南北朝の分裂

（列王紀略上第十二章）

一爰にレハベアム、シケムに往けり。其はイスラエル皆彼を王と爲さんとてシケムに至りたればなり。二ネバテの子ヤラベアム、尙エジプトに在りて聞けり。ヤラベアムはソロモン王の面をさけて逃げさりエジプトに住居たるなり。三時に人衆、人を遣して彼を招けり。斯てヤラベアムとイスラエルの會衆皆來りてレハベアムに告げて言ひけるは、四汝の父我等の軛を難くせり。然れども爾今爾の父の難き役と爾の父の我等に蒙らせたる重き軛を輕くせよ。然らば我等爾に事へん。五レハベアム彼等に言ひけるは、去りて三日を經て再び我に來れと。民乃ち去れり。六レハベアム王、其父ソロモンの生ける間其前に立ちたる老人等と計りていひけるは、爾等如何に教へて此民に答へしむるや。七彼等レハベアムに告げて言ひけるは、爾若今日此民の僕となり、之に事へて之に答へ、善き言を之に語らば、彼等永く爾の僕となるべしと。八然るに彼老人の教へし教を棄て、自己と俱に生長ちて己のまへに立つ少年等と計れり。九即ち彼等に言ひけるは、爾等何を教へて我等をして此我に告げて、爾の父の我等に蒙むらせし軛を輕くせよと言ふ民に答へしむるやと。一〇彼と偕に生長ちたる少年、彼に告げていひけるは、爾に告げて爾の父我等の軛を重くしたれど、爾これを我等のために輕くせよと言ひたる此民に、爾斯言ふべし。我が小指はわが父の腰よりも大し。一一またわが父爾等に重き軛を負はせたりしが、我は更に爾等の軛

を重くせん。我父は鞭にて爾等を懲したれども、我は蠍をもて爾等を懲らさんと、爾斯彼等に告ぐべしと。一二ヤラベアムと民、皆王の告げて第三日に再び我に來れと言ひし如く、第三日にレハベアムに詣りしに、一三王荒々しく民に答へ、老人の教へし教を棄て、一四少年の教の如く彼等に告げて言ひけるは、我父は爾等の軛を重くしたりしが、我は更に爾等の軛を重くせん。我父は鞭を以て爾等を懲したれども、我は蠍をもて爾等を懲さんと。一五王斯民に聽かざりき。此事はエホバより出たる者なり。是はエホバその嘗てシロ人アヒヤに由りて、ネバテの子ヤラベアムに告げし言を行はんとて爲したまへるなり。一六斯イスラエル皆王の己に聽かざるを見たり。是に於て民王に答へて言ひけるは、我等ダビデの中に何の分あらんや。エサイの子の中に產業なし。イスラエルよ、爾等の天幕に歸れ。ダビデよ、今爾の家を視よと。而してイスラエルは其天幕に去りゆけり。一七然れどもユダの諸邑に住めるイスラエルの子孫の上には、レハベアム其王となれり。一八レハベアム王徵募頭なるアドラムを遣しけるに、イスラエル皆石にて彼を擊ちて死なしめたれば、レハム王急ぎて其車に登り、エルサレムに逃げたり。一九斯イスラエル、ダビデの家に背きて今日に至る。二〇爰にイスラエル皆ヤラベアムの歸りしを聞きて、人を遣して彼を集會に招き、彼をイスラエルの全家の上に王と爲せり。ユダの支派の外はダビデの家に從ふ者なし。二一ソロモンの子レハベアム、エルサレムに至りて、ユダの全家とベニヤミンの支派の者卽ち壯年の武夫十八萬を集む。斯くてレハベアム國を己に歸さんが爲に、イスラエルの家と戰はんとせしが、二二神の言神の人シマヤに臨みて曰く、二三ソロモンの子ユダの王レハベアム、及ユダとベニヤミンの全家並に其餘の民に告げて言ふべし。二四エホバ斯言ふ、爾等上るべからず。爾等の兄弟なるイス

ラエルの子孫と戰ふべからず。各人其家に歸れ。此事は我より出たるなりと。彼等エホバの言を聽き、エホバの言に循ひて轉り去りぬ。　二五ヤラベアムはエフライムの山地にシケムを建てて其處に住み、又其所より出てペヌエルを建てたり。　二六爰にヤラベアム其心に謂ひけるは、國は今ダビデの家に歸らん。二七若此民エルサレムにあるエホバの家に禮物を獻げんとて上らば、此民の心ユダの王なる其主レハベアムに歸りて我を殺し、ユダの王レハベアムに歸らんと。　二八是に於て王計議りて二の金の犢を造り、人々に言ひけるは、爾らのエルサレムに上ること既に足れり。イスラエルよ、爾をエジプトの地より導き上りし汝の神を視よと。　二九而して彼一をベテル

◎所謂「ソロモンの榮華」は、その頂上に達し、果は頽廢氣分が國に滿つるに至つた。そこへソロモンが死んだのであるから、その後繼者たる者は、宜しく氣を引締めて、庶政一新を試むべき時であつたが、不幸にして彼の子レハベアムは、その人でなに安ゑ、一をダンに置けり。　三〇此事罪となれり。そは民ダンに迄往きて其一の前に詣でたればなり。三一彼又崇邱の家を建て、レビの子孫にあらざる凡民を祭司となせり。　三二ヤラベアム八月に節期を定めたり。卽ち其月の十五日なり。ユダにある節期に等し。而して壇の上に上りたり。ベテルにて彼斯爲し、其作りたる犢に禮物を獻げたり。又彼其作りたる崇邱の祭司をベテルに立てたり。　三三かく彼其ベテルに造れる壇の上に八月の十五日に上れり。是は彼が己の心より造り出だしたる月なり。而してイスラエルの人々のために節期を定め、壇の上にのぼりて香を焚けり。

かつた。ソロモンは「妃、公主七百人、嬪三百人」（列上一一・三）計一千人の妻妾を有したにも拘らず、レハベアム一人を除いては、如何なる子供があつたか、傳へられてゐない。しかもレハベアムは暗愚であつた。「愚なる子は其の父の憂となり、亦これを生める母の煩勞となる。」（箴一七・二五）ソロモンの家庭は極度に華麗であつたに拘らず、その內面生活は零であつた。否、零よりも惡しかつたのであらう。彼は如何にも憫然なる家庭の人であつたと、いはねばならない。（一一五）

◎イスラエルの人民は、エフライム人ネバテの子なる、ヤラベアムを先に立て、來つてレハベアムにいうた。「汝の父我等の軛を難くせり。然れども爾今、爾の父の難き役と、爾の父の我等に蒙らせたる重き軛を輕くせよ。然らば我等爾に事へん」と。レハベアムは、三日の後に返事をすべき約束をなしおき、其の父ソロモンが生ける間、其の前に立ちたる老人等と、そのことについて相談すると、彼等は答へて、「爾若し今日此の民の僕となり、之に事へて之に答へ、善き言を之に語らば、彼等永く爾の僕となるべし」と忠告した。所謂「使ふ者は使はれろ」とは、その謂であつた。基督も後に、

「大ならんと思ふ者は、汝らの役者となり、頭たらんと思ふ者は、凡ての者の僕となるべし。」（マル一〇・四三、四四）又「食事の席に著く者と、事ふる者とは、何れか大なる、食事の席に著く者ならずや。然れど我は汝らの中にて事ふる者のごとし。」（ルカ二二・二七）と仰せられた。けれどもレハベアムは、之に聽き從ふ程の、眞實と謙遜とを、缺いで居つたのである。（六―一一）

◎レハベアムは老人等の教を棄て、「自己と倶に生長ちて、己のまへに立つ少年等」の入智慧にしたがひ、イスラエルの人民に答へた。「我が父は、鞭を以て爾等を懲したれども、我は蠍をもて爾等を懲さん」と。これは何處までも高慢にして、思ひやりなき暴言であつた。「傲慢はアダムを樂園から、サウルを王位から、ハマンを宮廷から、ネブカデネザルを人の世から、逐ひ出した」といふことがある。同じ傲慢がレハベアムを、イスラエル人民の支配者たる立場から、逐出したのである。「馬の爲には策あり。驢馬の爲には銜あり。愚なる者の背のために杖あり。」（箴二六・三）レハベアムはその暗愚なるが爲に、懲罰の杖をうけないわけには行かなかつた。（一二―一五）

◎こゝに於てイスラエル人は、その十二の支派の中、ユダとベニヤミンとを除き、餘の十にてヤラベアムを擁立し、別に一國をなすことゝなり、たゞユダの支派のみは、ベニヤミンと共に、レハベアムを王として戴くことゝなつた。斯て國は二つに分れ、南朝のユダと北朝のイスラエルとの、對立を見ることゝなつたのである。すなはち神が前にソロモンに語り、「汝わが契約と、わが爾に命じたる法憲を守らざりしに因りて、我必ず爾より國を裂きはなして、之を爾の臣僕に與ふべし。然れど爾の父ダビデの爲に、爾の世には之を爲さゞるべし。我爾の子の手より之を裂きはなさん。但し我は國を盡くは裂きはなさずして、わが僕ダビデの爲に、又わが選みたるエルサレムのために、一つの支派を爾の子に與へん。」（列上一一・一一―一三）と仰せられた通であつた。神は愛の神であると共に、また正義の神にて在し給ふ。その御怒は、「不義をもて眞理を阻む人の、もろもろの不虔と不義とに對ひて、天より顯れ」（ロマ一・一八）ざるを得ないのであつた。（一六―二〇）

◎レハベアムは國を己に復さんが爲に、イスラエルと戰はんとし、ユダの全家とベニヤ

ミンの支派の壯丁、十八萬人を召集した。然しながら神の言が、神の人シマヤを通じて彼等に臨み、「エホバ斯く言ふ、爾等上るべからず。爾等の兄弟なるイスラエルの子孫と戰ふべからず。各々其の家に歸れ、此の事は我より出でたるなり。」とのことに、彼等は餘儀なく戰爭をやめて、各々その家に歸つた。その昔、アブラハムとロトとの牧者の間に、競爭のあつた時、アブラハムはロトに向ひ、「我等は兄弟の人なれば、請ふ、我と汝の間、およびわが牧者と汝の牧者の間に、競爭あらしむる勿れ。地は皆爾の前にあるにあらずや。請ふ我を離れよ、爾もし左にゆかば我右にゆかん。又爾右にゆかば我左にゆかん。」(創一三・八、九)というて、平和のうちに、その問題を解決したことがある。耶蘇の御言にも、「なんぢの劍をもとに收めよ。すべて劍をとる者は劍にて亡ぶるなり。」(マタ二六・五二)とあり。血腥い戰爭は何處までも、避けたきものである。永久平和の基督の治世こそ、眞に慕はしいではないか。(二一—二四)

◎ヤラベアムは、エフライムの山地なるシケムに北朝の都を定め、後、其處より出でてペヌエルに移つた。彼は又北王國の人民が、引續きエルサレムにある神の宮に詣づるやうでは、その民心を收攬し難いことを憂へ、乃ち金の犢二つを造り、一つを國の南境なるベテルに、一つを北境なるダンに置いて、「爾らのエルサレムに上ること、既に足れり。イスラエルよ、爾をエジプトの地より導き上りし汝の神を視よ」といひ、その他にも又、崇邱の家を建て、そこにて神を拜むことゝし、レビの子孫にあらざる常の人民を祭司に任じ、これ迄七月十五日に營んだ結芽節を、一ケ月後の八月十五日に改め、斯して極力イスラエルの民心を、ユダから引離さうと力めた。彼が斯く政略上から宗教及びその禮拜を弄んだのは、彼の時代の人民をあやまるのみならず、長く後世子孫にまでもその禍を遺した。すなはち後に神がイスラエルの王バアシヤを責めて、「爾はヤラベアムの道に歩行み、わが民イスラエルに罪を犯させて、其の罪をもてわが怒を激したり。」(列上一六・二)と宣うた如き、又惡王アハブに就いて、「彼はネバテの子、ヤラベアムの罪を行ふことを、輕き事となせしが云々」(列上一六・三一)と記された如きは、その一二の實例に過ぎない。此の如く罪は自らを傷つくるのみならず、同時に他人を害し、現在を禍するのみならず、併せて後世子孫にまで

も、累を及ぼすことを知つて、深く警戒する所がなくてはならぬ。(二五—三三)

一六　神の人の不從順

(列王紀略下第十三章)

一視よ、爰に神の人エホバの言に由りてユダよりベテルに來れり。時にヤラベアムは壇の上に立ちて香を焚きゐたり。二神の人乃ちエホバの言を以て壇に向ひて呼ばはり言ひけるは、壇よ、壇よ、エホバ斯言ひ給ふ。視よ、ダビデの家にヨシアと名づくる一人の子生るべし。彼爾の上に香を焚く所の崇邱の祭司を爾の上に獻げん。且人の骨爾の上に燒かれんと。三是日彼異蹟を示して言ひけるは、是はエホバの言ひ給へる事の異蹟なり。視よ、壇は裂け其上にある灰は傾出れんと。四ヤラベアム王、神の人がベテルにある壇に向ひて呼ばはりたる言を聞ける時、其手を壇より伸し、彼を執へよと言ひけるが、其彼に向ひて伸したる手枯れて再び屈縮ることを得ざりき。五而して神の人がエホバの言を以て示したる異蹟の如く、壇は裂け、灰は壇より傾出れたり。六王答へて神の人に言ひけるは、請ふ爾の神エホバの面を和め、わが爲に祈りて我手を本に復らしめよ。神の人乃ちエホバの面を和めければ、王の手本に復りて前の如くに成れり。七是に於て王神の人に言ひけるは、我と與に家に來りて身を息めよ。我爾に禮物を與へんと。八神の人王に言ひけるは、爾假令爾の家の半を我に與ふるも、我は爾と共に入らじ。又此所にてパンを食はず、水を飲まざるべし。九其はエホバの言我にパンを食ふ勿れ。水を飲む勿れ。又爾が往ける途より歸る勿れと命じたればなりと。一〇斯彼他途を往き、自己がベテルに來れる途よりは歸らざりき。一一爰にベテルに一人の老いたる預言者住みゐたりしが、其子等來りて是日神の人がベテルにて爲したる諸事を彼に宣べたり。亦神の人の王に言ひたる言をも其父に宣べたり。一二其父彼等に、彼は何の途を往きしやといふ。其子等ユダより來りし神の人の往きたる途を見たればなり。一三彼其子等に言ひけるは、我爲に驢馬に鞍おけと。彼等驢馬に鞍おきければ、彼之に乘り、一四神の人の後に往きて、橡の樹の下に坐するを見、之にいひけるは、汝はユダより來れる神の人なるか。其人然りと言ふ。一五彼其人にいひけるに、我と偕に家に往きてパンを食へ。一六其人いふ、我は汝と偕に歸る能はず。汝と偕に入る能はず。又我は此處にて爾と偕にパンを食はず、水を飲まじ。一七其はエホバの言我に、爾彼處にてパンを食ふなかれ。水を飲む勿れ。又爾が往ける途より歸り往く勿れと言ひたればなりと。一八彼其人にいひけるは、我も亦爾の如く預言者なるが、天の使エホバの言を以て我に告げて、彼を爾と偕に爾の家に携れかへり、彼にパンを食はしめ、水を飲ましめよといへりと。是其人を誑けるなり。一九是に於て其人彼と偕に歸り、其家にてパンを食ひ、水を飲めり。二〇彼等が席に坐せし時、エホバの言其人を携歸りし預言者に臨みければ、二一彼ユダより來れる神の人に向ひて呼ばはり言ひけるは、エホバ斯言ひたまふ。爾エホバの口に違き、爾の神エホバの爾に命じたまひし命令を守らずして歸り、二二エホバの爾にパンを食ふ勿れ。水を飲む勿れと言ひ給ひし處にて、パンを食ひ、水を飲みたれば、爾の屍は爾の父祖の墓に至らざるべしと。二三其人のパンを食ひ、水を飲みし後、彼其人のため卽ち己が携歸りたる預言者の爲に驢馬に鞍おけり。二四斯て其人往きけるが獅子途にて之に遇ひて

之を殺せり。而して其屍は途に棄てられ、驢馬は其傍に立ち、獅子も亦その屍の側に立てり。二五人々經過て途に棄てられたる屍と、其屍の側に立てる獅子を見て來り、彼老いたる預言者の住める邑にて語れり。二六彼人を途より携歸りたる預言者聞きて言ひけるは、其はエホバの口に違きたる神の人なり。エホバの彼に言ひ給ひし言の如く、エホバ彼を獅子に付し給ひて、獅子彼を裂き殺せりと。二七しかして其子等に語りて言ひけるは、我ためにロバに鞍おけと。彼等鞍おきければ、二八彼往きて其屍の途に棄てられ、驢馬と獅子の其屍の傍に立てるを見たり。獅子は屍を食はず、驢馬をも裂かざりき。二九預言者乃ち神の人の屍を取りあげて、之を驢馬に載せて携歸れり。而して其老いたる預言者邑に入り、哀哭みて之を葬れり。三〇即ち其屍を自己の墓に置め、皆之がために、嗚呼わが兄弟よといひて哀哭めり。三一彼人を葬りし後、彼其子等に語りて言ひけるは、我が死にたる時は神の人を葬りたる墓に我を葬り、わが骨を彼の骨の側に置めよ。三二其は彼がエホバの言を以てベテルにある壇にむかひ、又サマリアの諸邑に在る崇邱の凡の家に向ひて呼ばはりたる言は、必ず成るべければなり。三三斯事の後ヤラベアム其惡しき途を離れ歸ずして、復凡の民を崇邱の祭司と爲せり。即ち誰にても好む者は之を立てければ、其人は崇邱の祭司と爲れり。三四此事ヤラベアムの家の罪戾となりて、遂に之をして地の表面より消失せ滅亡に至らしむ。

◎イスラエルの王ヤラベアムは、前に金の犢二つを造り、その一つをベテルに置き、程なく自分でもその地に出掛けて、壇の上に立ち、香を焚いてゐた。するとそこへ、ユダからベテルに遣された神の人があり、彼の名はサドンというたと、ヨセホスの書には記してある。彼はヤラベアムの前の壇に向ひ、呼はりていうた。「壇よ、壇よ、エホバ斯く言ひ給ふ、後年ダビデの家にヨシアと名づくる男子が生れるであらう。彼は壇の上に香を焚く、崇邱の祭司を殺し、血祭として壇の上に獻ぐべく、且人の骨を壇の上に燒くであらう。さうした出來事の將來に起るべき、現在の異蹟として、壇は裂け、其の上にある灰は傾出れるであらう」と。これは彼が神の啓示により、それから三百五六十年も後に起るべき出來事(列下二三・一五—二〇)を預言し、ヤラベアムの形式的、政略的の宗教を否認し、眞實なる生命の宗教を主張したものである。ヤラベアムは之を聞いて、その手を壇より伸し、「彼を執へよ」というたが、その伸したる手が忽ち枯れて、再び屈縮ることを得ず、同時に神の人のいうた如く、壇は裂け、その上にある灰は傾出れたのを見て、さすがのヤラベアムも我を折り、神の人に向ひ、「請ふ、爾の神エホバの面を和め、わが爲に祈りて我が手を本に復らしめよ。」と嘆願した故、神の人がエホバの面を和めると、王の手は本に復りて、前の如くなつたといふのであ

る。この場合のヤラベアムは、古のエジプト王パロと同じ様に、神から懲罰をうけてその懲罰を取去られんことを求めたけれども、禍の一たび過ぐるや、忽ち復もとの背教と罪惡とに復つたものゝ如く見える。（出一〇・一七）所謂「喉元過ぐれば熱さ忘るゝ」とは、その謂である。（一一六）

◎斯て後、ヤラベアムは神の人に向ひ、「我と與に家に來りて身を息めよ。我爾に禮物を與へん。」と誘うたが、神の人は斷然拒絶し、「爾假令、爾の家の半を我に與ふるも、我は爾と共に入らじ。又此の所にてパンを食はず、水を飲まざるべし。其はエホバの言、我にパンを食ふ勿れ、水を飲む勿れ、又爾が往ける途より歸る勿れと、命じたればなり。」というた。神の人が斯く俗權を輕く見て、その惑す所とならざるやう、心掛けたのは至つて善い。「この世に效ふな。」（ロマ一二・二）又「汝ら人の虛しき言に欺かるな、神の怒はこれらの事によりて、不從順の子らに及ぶなり。この故に彼らに與する者となるな。汝ら舊は闇なりしが、今は主に在りて光となれり。光の子供のごとく歩め。」（エペ五・六―八）等とあるのは、基督の僕が世俗に對して執るべき態度を、示したものである。（七―一〇）

◎ベテルに一人の老いたる預言者があり。ユダより來れる神の人のことを聞いて、之をその家に誘ひ、天の使の告だと僞り、彼にパンを食はせ、又水を飲ませた。この老いたる預言者といふのは、多分若い時、サムエルの預言者學校に學んだ者で、後年信仰が鈍り、熱心が冷え、それでもなほ預言者の名義のみは、保存して居つたものであらうと、いうた人がある。いづれにもせよ、彼は虛僞の預言者であつた。若し彼が眞面目な預言者であつたとすれば、ヤラベアムの行動に對しても、何とか警告せずにはゐられなかつた筈であらう。不幸にして神の人は、さうした虛僞の預言者のために誤られた。彼は不信仰なヤラベアムの誘惑を辭し得たけれども、みだりに神の名を稱ふる虛僞の預言者のために惑されたのである。此の如く曖昧な友は、いつでも公然の敵より恐しいもの故、決して油斷してはならない。（一一―一九）

◎神の人は、虛僞の預言者のいふがまゝに、飲食した。斯して彼は、エホバの前に不從順であつた。アダムとエバとが、禁ぜられたる果實を食うて、樂園を逐ひ出された

如く、この神の人は又、禁ぜられた飲食物を攝つて、その爲に滅亡に陷つたのである。「人はパンのみにて生くる者にあらず、人はエホバの口より出づる言によりて生くる者なり。」(申八・三)といふ、御誡命も想ひ出でらるるではないか。(二〇—二五)

◎神の人は途にて、獅子の嚙み殺す所となつた。虚僞の預言者はその屍を取りあげ、之を驢馬に載せ、持歸つて墓に葬つた。しかもその屍を己の墓に納め、自分が死んだ時には、その骨を彼の骨の側に納めんことを、その子等に命じた。それから三百餘年を經て、ユダの王ヨシアの時代となり、その昔ヤラベアムが、ベテルに築いた祟邱を毀ちたる際、其處に見ゆる石碑に眼をとめ、「これは何なるや」と問ふと、邑の人人が答へて、「其は汝がベテルの壇にむかひて爲せるこの事等を、ユダより來りて宣べたる神の人の墓なり。」(列下二三・一七)といつたとあり。神の人は斯して非業の最期を遂げたけれども、その口から出た神の御言は、終に成就せられたのである。古語に、「その人を以て、その言を廢せず」とあり。如何なる人の口から出づるにもせよ、それが神の御言である以上は、謹んで之を承るだけのたしなみを有ちたきものである。(二六—三二)

◎ヤラベアムは、その惡しき途を離れずして、反つて勝手氣儘な生活をつゞけた。「此の事ヤラベアムの家の罪戾となりて、遂に之をして地の表面より消失せ、滅亡に至らしむ」とある如く、彼の罪惡はその家族を滅したのである。(列上一五・二九)惡病が往々その父祖から子孫に遺傳する如く、罪と禍とはまた、屢々血統に傳はり、それが後になる程、愈々凶暴を加へる例も少からず。ヤラベアムの場合が、正しくそれであつた。罪惡は個人をも、家庭をも、將又國民をさへも、破滅に陷さずしては止まないものである。(三三、三四)

一七　ヤラベアムとレハベアム

(列王紀略上第十四章)

一　當時ヤラベアムの子アビヤ疾みゐたり。二ヤラベアム其妻に言ひけるは、請ふ起ちて裝を改へ、人をして汝がヤラベアムの妻なるを知らしめずしてシロに往け。彼處にわが此民の王となるべきを我に告げ

たる預言者アヒヤなる。 三汝の手に十のパン及び菓子と一瓶の蜜を取りて彼の所に往け。彼汝に此子の如何になるかを示すべしと。 四ヤラベアムの妻是爲し、起ちてシロに往き、アヒヤの家に至りしが、アヒヤは年齡の爲に其目凝りて見ることを得ざりき。 五エホバ、アヒヤにいひ給ひけるは、視よ、ヤラベアムの妻其子疾めるに因りて、其に付きて汝に一の事を諮れんとて來る。汝斯斯彼に言ふべし。其は彼入り來る時、其身を他の人とすべければなり。 六彼が戶の所に入來れる時、アヒヤ其履聲を聞きて言ひけるは、ヤラベアムの妻入れよ。汝何ぞ其身を他の人とするや。我汝に嚴酷き事を告ぐるを命ぜらる。 七往きてヤラベアムに告ぐべし、イスラエルの神エホバ斯言ひ給ふ。我汝を民の中より擧げ、我民イスラエルの上に汝を君となし、 八國をダビデの家より裂き離して之を汝に與へたるに、汝は我僕ダビデの我が命令を守りて一心に我に從ひ、唯わが目に適ふ

事のみを爲せしが如くならずして、 九汝の前に在りし凡の者よりも惡を爲し、往きて汝の爲に他の神と鑄たる像を造り、我が怒を激し、我を汝の背後に棄てたり。 一〇是故に視よ、我ヤラベアムの家に災害を下し、ヤラベアムに屬する男はイスラエルにありて繫がれたる者も繫がれざる者も、盡く絕ち、人の塵埃を殘りなく除くが如く、ヤラベアムの家の後を除くべし。 一一ヤラベアムに屬する者の邑に死ぬるたば、犬之を食ひ、野に死ぬるたば、天空の鳥之を食はん。エホバ之を語ひ給へばなり。 一二爾起ちて爾の家に往け。爾の足の邑に入る時子は死ぬべし。 一三而してイスラエル皆彼の爲に哀みて彼を葬らん。ヤラベアムに屬する者は唯是のみ墓に入るべし。其はヤラベアムの家の中にて彼はイスラエルの神エホバに向ひて善き意を懷けばなり。 一四エホバ、イスラエルの上に一人の王を興さん。彼其日にヤラベアムの家を斷絕べし。但し何れの時なるか今即ち是なり。 一五又エホバ、イスラエルを擊ちて水に搖撼ぐ葦の如くになし給ひ、イスラエルを其父祖に賜ひし此善地より拔き去りて、之を河の外に散らし給はん。彼等其アシラ像を造りてエホバの怒を激したればなり。 一六エホバ、ヤラベアムの罪の爲にイスラエルを棄て給ふべし。彼は罪を犯し、又イスラエルに罪を犯さしめたりと。 一七ヤラベアムの妻起ちて去りテルザに至りて家の閾に臻れる時子は死れり。 一八イスラエル皆彼を葬り、彼の爲に哀めり。エホバの其僕預言者アヒヤによりて言ひ給へる言の如し。 一九ヤラベアムの其餘の行爲、彼が如何に戰ひしか、如何に世を治めしかは、視よ、イスラエルの王の歷代志の書に記載さる。 二〇ヤラベアムの王たりし日は二十二年なりき。彼其父祖と偕に寢りて、其子ナダブ之に代りて王となれり。 二一ソロモンの子レハベアムはユダに王たりき。レハベアムは王と成れる時四十一歲なりしが、エホバの其名を置かんとてイスラエルの諸の支派の中より選みたまひし邑なるエルサレムにて、十七年王たりき。其母の名はナアマといひてアンモニ人なり。 二二ユダ其父祖の爲したる諸の事に超えてエホバの目の前に惡を爲し、其犯したる罪に由りてエホバの震怒を激せり。 二三其は彼等も諸の高山の上と諸の青木の下に祟邱と碑とアシラ像を建てたればなり。 二四其國には亦男色を行ふ者ありき。彼等はエホバがイスラエルの子孫の前より逐攘ひ給ひし國民の中にありし、諸の憎むべき事を倣ひ行へり。 二五レハベアム王の第五年に、エジプトの王シシヤク、エルサレムに攻め上り、 二六エホバの家の寶物と王の家の寶物を奪ひたり。即ち盡く之を奪ひ、亦ソロモンの造りたる金の楯を皆奪ひたり。 二七レハベアム王其代に銅の楯を造りて王の家の門を守る、侍衞の長の手に付せり。 二八王のエホバの家に入る毎に侍衞之を負ひ、復之を侍衞の房に携歸れり。 二九レハベアムの其餘の行

爲と其凡て爲したる事はユダの王の歴代志の書に記さるゝに非ずや。三〇レハベアムとヤラベアムの間に戰爭ありき。三一レハベアム其父祖と偕に寢りて、其父祖と共にダビデの城に葬らる。其母の名はナアムといひてアンモニ人なり。其子アビヤム之に代りて王と爲れり。

◎イスラエルの王ヤラベアムは、その子アビヤが病んで居るのを憂へ、妻をして裝を改へてシロに行き、預言者アヒヤを訪ね、その子の病が癒ゆべきか否かを問はしめた。この預言者アヒヤは前にヤラベアムに向ひ、彼が他日、イスラエルの王位に登るべきことを告げたる人であつた。(列上一一・三一)。ヤラベアムは金の犢を造つてその前に禮拜するなど、政略的形式的の宗教は有つて居つたが、まさかの時に據つて立つべき、何等の個人的宗教を有しなかつた。それ故その子の病氣した時にも、預言者アヒヤの前年の厚意を思ひ出で、それさへ妻をして裝を扮して、その子の病の如何になり行くべきかを問はしむる以上に、爲すべき所を知らなかつたのである。言ひ換へれば、彼は陰陽師に吉凶禍福を尋ぬる程度の宗教しか、有たなかつたのである。彼は「イラエスルの民籍に遠く、約束に屬する諸般の契約に與りなく、世に在りて希望なく、神なき者」(エペ二・一二)であつた。何といふ憫れな漢子であつたらうか。(一一四)

◎アヒヤは神の啓示により、その來訪したる婦人が、ヤラベアムの妻であることを豫知し、直ちに神の嚴重なる命令を傳へて、「往きてヤラベアムに告ぐべし。イスラエルの神エホバ、斯く言ひ給ふ、我汝を民の中より擧げ、我が民イスラエルの上に汝を君となし、國をダビデの家より裂き離して之を汝に與へたるに、汝は我が僕ダビデの我が命令を守りて、一心に我に從ひ、唯わが目に適ふ事のみを爲せしが如くならずして、汝の前に在りし凡ての者よりも惡を爲し、往きて汝の爲に他の神と鑄たる像を造り、我が怒を激し、我を汝の背後に棄てたり云々」というた。ダビデは神の前に大なる罪惡を犯したけれども、それにも拘らず、大體から言へば、彼は一心に神に從ひ、唯その眼に善しと見給ふことを行はんと心掛けた。けれどもヤラベアムには、さうした眞實を見出すことが出來なかつた。それ故彼とその家族との上には、間もなく劇しい、神の義罰が、落ち來らんとするのであつた。(列上一五・二九)或人の說に、「神の御旨に適ふ人がたゞ二種類あり。一つは神の道を知り得た故、熱心に之を行ふ者と、今一つは

神の道がまだ解らぬ故、一心に之を求むる者と、たゞ是のみだ」というてある。私共はいつ、いかなる場合にも、常に全き心を以て神の旨に從ひ、之に事へ奉らねばならぬ。(五—一三)

◎こゝに「エホバ、イスラエルの上に一人の王を興さん。彼其の日にヤラベアムの家を絶つべし云々」とあるのは、約二年の後、イッサカル人バアシヤが興つて、ヤラベアムの子なるナダブとその一族とを、悉く滅すべきことを指したのである。(列上一五・二九、三〇)つゞいて「エホバ、ヤラベアムの罪の爲に、イスラエルを棄て給ふべし。彼は罪を犯し、又イスラエルに罪を犯さしめたり。」とある如く、一人の罪人は他に多くの罪人を生ずる種子である。ジョン・バンヤンの説に、「悪人が地獄で出會うた他の悪人から、『私が今日、かうした場所に落ちて來ることとなつたのは、全く御身の悪しき感化によるのである』と、怨まるゝのを聞く位、つらいことはないであらう。」というてある。悪人は自分で罪を犯すのみならず、他人に罪を犯さしめ、人を滅亡に至らしむるものであるから、そのことを心得置きて、きつと警戒する所がなくてはならぬ。(一四—一六)

◎ヤラベアムの妻は、歸つて家の敷居をまたぐ時、その子は死んだ。この子については預言者アヒヤが、「爾起ちて爾の家に往け。爾の足の邑に入る時子は死ぬべし。而してイスラエル、皆彼の爲に哀みて彼を葬らん。ヤラベアムに屬する者は唯是のみ墓に入るべし。其はヤラベアムの家の中にて、彼はイスラエルの神エホバに向ひて、善き意を懷けばなり」というた如く。唯彼一人が、ヤラベアムの家族には珍しく、神に向うて善き意を懷く者であつた。隨つて彼たゞ一人が、人民から惜まれて世を去つたのである。「神に愛せらるゝ者は早く召される」といふ諺は、彼の身の上に當嵌るのであつた。彼が若くして死んだことは、其の身にとつての祝福であつた。即ち彼はその後にのこつて罪悪をつゞけ、神の怒を招いた彼の家族の誰よりも、遙に幸福であつたに相違ない。畢竟人はその善く生きるか、悪しく生きるかゞ最大の問題である。彼が世に在る日の、いく分、長いと短いと位、餘り多く問題とするに足りないのである。私共の地上に於ける生活は、殊にその量よりも質を重しとするからである。(一七—

二〇）

◎こゝにイスラエル王ヤラベアムの死んだことゝ、次いで復、ユダの王レハベアムの最期のことゝを、記してある。レハベアムはソロモンの子であつたが、その母の名はナアマというて、アンモニ人であつた。ナアマは美人を意味する。ソロモンは彼女が美人であつた爲に、その異邦人にして、又異教徒なるに拘らず、之を納れて妻とし、その間にレハベアムを擧げたのであらう。しかもかうした事情の下に生れた彼と、その治下のユダ王國とは、神を忘れて甚しき罪を犯すやうになつた。「ユダ、其の父祖の爲したる諸の事に超えて、エホバの目の前に惡を爲し、其の犯したる罪に由りて、エホバの震怒を激せり。其は彼等も、諸の高山の上と諸の青木の下に、祟邱と碑とアシラ像を建てたればなり。其の國には亦男色を行ふ者ありき。彼等はエホバが、イスラエルの子孫の前より逐攘ひ給ひし國民の中にありし、諸の憎むべき事を倣ひ行へり。」とあるのは、それである。それにつけても後にパウロが、「不信者と軛を同じうすな。釣合はぬなり。義と不義と何の干與かあらん、光と暗と何の交際かあらん、基督とベリアルと何の調和かあらん、信者と不信者と何の關係かあらん、神の宮と偶像と何の一致かあらん云々。」（コリ後六・一四―一六）と戒たのは、如何にも尤のことゝ言はねばならぬ。（二一―二四）

◎エジプト王シシヤクが、エルサレムに攻め上り、エホバの家と王の家との寶物を悉く奪ひ、ソロモンがその全盛時代に造つた金の楯をも盗み去ると、レハベアムはその代に銅の楯を造り、侍衛の長の手に付し、その出入の際には、携へて列に加はらしめた。それと同じ樣に、世には古聖徒から傳來の、高き生活標準を取失ひ、その代に好い加減な、間に合せの低い生活標準を掲げて、滿足する者がある。もつと明白にいへば、世には往々、凡ての罪より潔めらるるてふ「全き愛」の標準を取失ひ、その代に罪を犯しては悔改め、罪を犯しては復悔改むる、中途半端な信仰生活に甘んずる者が少くない。然しながら、「耶蘇の血はすべての罪より我らを潔む」（ヨハ壹一・七）るのである。「彼は已に賴りて神にきたる者のために、執成をなさんとて常に生くれば、之を全く救ふことを得給ふ」（ヘブ七・二五）のである。私共は全き聖潔以下の、如何な

る生活にも滿足してはならない。ブラムエル・ブース夫人の言に、「新に生るゝことは貴き經驗である。けれどもたゞそれのみに安んじ、進んで全き聖潔の惠に入らざらしむるものは、惡魔の業である。」というてある。それ故私共は、たゞ新生だけに安んぜずして、聖潔の惠に生きねばならぬ。この點に於て、私共はレハベアムが金の楯を失うて、その埋合に銅の楯を用ひたやうな、眞似をしたくないものである。（二五—三一）

一八　アサ

（列王紀略上第十五章）

一ネバテの子ヤラベアム王の第十八年に、アビヤム、ユダの王となり、二エルサレムにて三年世を治めたり。其母の名はマアカといひてアブサロムの女なり。三彼は其父が己のさきに爲したる諸の罪を行ひ、その心其父ダビデの心の如く其神エホバに完全からざりき。四然るに其神エホバ、ダビデの爲にエルサレムに於て彼に一の燈明を與へ、其子を其後に興し、エルサレムを固く立たしめ賜へり。五其はダビデはヘテ人ウリヤの事の外は、一生の間エホバの目に適ふ事を爲して、其己に命じ給へる諸の事に背かざりければなり。六レハベアムとヤラベアムの間には、其一生の間戰爭ありき。七アビヤムの其餘の行爲と凡て其爲したる事はユダの王の歷代志の書に記載さるゝにあらずや。アビヤムとヤラベアムの間に戰爭ありき。八アビヤム其先祖と俱に寢りしかば、之をダビデの城に葬りぬ。其子アサ之に代りて王と爲れり。九イスラエルの王ヤラベアムの第二十年にアサ、ユダの王となり、一〇エルサレムにて四十一年世を治めたり。其母の名はマアカといひてアブサロムの女なり。一一アサは其父ダビデの如くエホバの目に適ふ事を爲し、一二男色を行ふ者を國より逐ひ出し、其父祖等の造りたる諸の偶像を除けり。一三彼は亦その母マアカのアシラの像を造りしがために、之を貶して太后たらしめざりき。而してアサ其像を毀ちてキデロンの谷に焚棄てたり。一四但し崇邱は除かざりき。然れどアサの心は一生の間エホバに完全かりき。一五彼其父の獻納めたる物と己のをさめたる物、金銀器をエホバの家に携へいりぬ。一六アサとイスラエルの王バアシヤの間に一生の間戰爭ありき。一七イスラエルの王バアシヤ、ユダに攻上り、ユダの王アサの所に誰をも往來せざらしめん爲にラマを築けり。一八是に於てアサ王エホバの家の府庫と王の家の府庫に殘れる所の金銀を盡く將りて之を其臣僕の手に付し、之をダマスコに住めるスリアのヘジョンの子タブリモンの子なるベネハダデに遣して言ひけるは、一九わが父と爾の父の間の如く、我と爾の間に約を立てん。視よ、我爾に金銀の禮物を餽れり。往きて爾とイスラエルの王バアシヤとの約を破り、彼をして我を離れて上らしめよ。二〇ベネハダデ、アサ王に聽きて自己の軍勢の長等を遣してイスラエルの諸邑を攻め、イヨンとダンとアベルベテマアカ及びキンネレテの全地とナフタリの全地とを擊てり。二一バアシヤ聞及びラマを築くことを罷めてテルザに止り。二二是に於てアサ王令

をユダ全國に降したり。一人も免かれし者なし。斯して卽ちバアシヤが用ひてラマを築きたる石と材木を取りきたらしめ、アサ王之を用ゐてベニヤミンのゲバとミズパを築けり。　二三アサの其餘の行爲と其諸の功業と凡て其爲したる事及び其建てたる城邑はユダの王の歷代史の書に記載さるゝにあらずや。但し彼は年老ゆるに及びて其足を病みたり。　二四アサ其父祖と偕に寢りて、其父ダビデの城に其父祖と偕に葬らる。其子ヨシヤパテ之に代りて王と爲れり。

二五ユダの王アサの第二年にヤラベアムの子ナダブ、イスラエルの王と爲り、二年イスラエルを治めたり。二六彼エホバの目の前に惡を爲し、其父の道に歩行み、其イスラエルに犯させたる罪を行へり。　二七爰にイツサカルの家のアヒヤの子バアシヤ、彼に敵して黨を結び、ペリシテ人に屬するギベトンにて彼を擊てり。其はナダブとイスラエル皆ギベトンを圍み居たればなり。　二八ユダの王アサの第三年にバアシヤ彼を殺し、彼に代りて王となれり。　二九バアシヤ王となれる時ヤラベアムの全家を擊ち、氣息ある者は一人もヤラベアムに殘さずして盡く之を滅せり。エホバの其僕シロ人アヒヤに由りて言ひ給へる言の如し。　三〇是はヤラベアムが犯し、又イスラエルに犯させたる罪の爲め、又彼がイスラエルの神エホバの怒を惹き起したる事に因るなり。　三一ナダブの其餘の行爲と凡て其爲したる事は、イスラエルの王の歷代志の書に記載さるゝにあらずや。　三二アサとイスラエルの王バアシヤの間に、一生のあひだ戰爭あり。　三三ユダの王アサの第三年にアヒヤの子バアシヤ、テルザに於てイスラエルの全地の王となりて二十四年を經たり。　三四彼エホバの目のまへに惡を爲し、ヤラベアムの道にあゆみ、其イスラエルに犯させたる罪を行へり。

◎こゝにアビヤムが、ユダの王となつたとあるのは、前章の終にあるアビヤと同人の事である。歷代志略に記されたる所によれば、（歷下一三・一―一九）彼はイスラエルの王ヤラベアムと對陣する際、敵に向うて大演說を試み、彼等の不信と背敎とを譴責し、したがつて神がユダを助けて、彼等を棄て給ふべきことを說き、「視よ、神みづから我らと共に在して、我らの大將となりたまふ。また其の祭司等は喇叭を吹きならして汝らを攻む。イスラエルの子孫よ、汝らの先祖の神エホバに敵して戰ふ勿れ。汝ら利あらざるべければなり。」（歷下一三・一二）といひ。敵軍が前後から攻め寄せたにも拘らず、神の御力によつて、不思議に之に打勝つた始末を載せてある。然るにこゝに「彼は其の父が、己のさきに爲したる諸〳〵の罪を行ひ、その心其の父ダビデの心の如く、其の神エホバに完全からざりき。」とあるのを見れば、彼がイスラエルと戰うて奇捷を得たる後、忽ち氣弛み、心驕りて、さうした狀態に陷つたものであらう。果してさうだとすれば、これは前日のアビヤムとは、似ても似つかないものになり了つたのである。然しながら昨日まで神の忠實なる僕であつた者が、今日は別人の如き不信仰背敎に陷

つた著しい實例を、私共は既にソロモンに於て見たのであるから、アビヤムがまた、これと同じ經驗を繰返したかというて、全く不思議とも思惟しない。唯々それにつけても、「自ら立てりと思ふ者は倒れぬやうに心せよ。」（コリ前一〇・一二）というたパウロの教の、如何にも大切なことを、今更の如く感ずるのみである。（一一八）

◎ユダの王アサのことについては、歴代志略（歴下一四・一―一六・一四）にも詳である如く、彼は敬虔なる神の僕、又聰明なる爲政者であつた。「アサは其の父ダビデの如く、エホバの目に適ふ事を爲し、男色を行ふ者を國より逐ひ出し、其の父祖等の造りたる諸〻の偶像を除けり。彼は亦その母マアカのアシラの像を造りしがために、之を貶して大后たらしめざりき。而してアサ其の像を毀ちて、キデロンの谷に焚棄てたり。」とある如く、彼はソロモン以來の曖昧なる信仰生活を改め、偶像を除き、淫蕩なる風俗を改めたのである。彼は又その母マアカが、アシラの像を造つた爲に、これを貶して大后たらしめなかつた如き、よくも人情上の行掛りを排して、神を第一におく英斷をしたものといはねばならない。耶蘇の御言に、「我よりも父または母を愛する者は、

我に相應しからず。我よりも息子または娘を愛する者は、我に相應しからず。」（マタ一〇・三七）とあり。私共はその父母、妻子、兄弟等を愛すれば愛する程、それよりも勝つて神を愛し、又その御旨に忠實を盡さむことを、心掛けねばならない。（九―一五）

◎ユダとイスラエルとは、元來一國であつたが、不幸にして南北兩朝に分れたのである。しかもそれが舊來の敵國でもあるかの如く、引續き爭鬪を事としたのは、情ない有樣であつた。今私共の心靈生活がまた之と似て、私共が心一つに神を崇め、之に從ふことを怠るやうになると、必ずその胸の中に紛爭を生ずる。卽ち私共が、身も靈魂も殘らず獻げ、聖き生活を營んでゐないなら、その心の天地は亂れて、一種の交戰狀態に陷らざるを得ない。「御靈によりて歩め、さらば肉の慾を遂げざるべし。肉の望むところは御靈にさからひ、御靈の望むところは肉にさからひて、互に相戻ればなり。これ汝らの欲する所をなし得ざらしめん爲なり。」（ガラ五・一六、一七）とあるのは、それである。それ故私共は胸の隅々隈々までも、殘らず神の御支配の下におき、所謂全き心を以て「主なる神を拜し、たゞ之にのみ事へ奉る」（申六・一三）やうでなくては

ならぬ。またその結果として、私共の胸中には、常に神の平和が宿つて居るやうでありたい。(一六—二一)

◎イスラエルの王バアシヤが、ユダに攻め上り、敵の通路を妨げん爲に、ラマを築いて居つたところ、中途で急に退軍することゝなり、建築材料をそのまゝ遺棄して去つた故、ユダの王アサは、それらの石と材木とを用ひて、ベニヤミンのゲバとミツパとを、築いたといふことである。それと同じやうに、神は屢々惡魔の爲に用ひられた材料を奪うて、神の御國の建設を助けしめ給ふことがあり。パウロが基督を攻むる爲に用ひた才學は、やがて神の御名を異邦人に宣傳ふる爲に、利用せられ、マタイが取稅所の帳簿をつける爲に用ひた筆は洗れて、やがて、山の上の垂訓を筆記する爲に、活用せられ、フインニーが裁判事件を論ずる爲に用ふる筈の舌は、聖別せられて、耶蘇の救を辯護する爲に、善用せらるゝに至つたのである。バアシヤがラマを築く爲に用意した石と材木とを、アサが用ひてゲバとミツパとを築いたといふのは、興味のある物語といはねばならぬ。(二二—二四)

◎ヤラベアムの子ナダブは、父についで王となつたが、「彼エホバの目の前に惡を爲し、其の父の道に歩行み、其のイスラエルに犯させたる罪を行へり。」とある如く、ナダブはその父ヤラベアムの罪惡を、そのまゝに行うたのである。こゝにイッサカルの家の、アヒヤの子バアシヤなる者が起りて、ナダブを殺し、代つて王となつた。しかも「バアシヤ、王となれる時、ヤラベアムの全家を擊ち、氣息ある者は一人もヤラベアムに殘さずして、盡く之を滅せり。」とあり。斯して神がその僕アヒヤに向ひ、「エホバ、イスラエルの上に一人の王を興さん。彼其の日にヤラベアムの家を斷絶べし。」(列上一四・一四)と仰せられたことは、實現せられたのである。諺に、「親の因果が子に祟る」といふことがあり。私共はヤラベアムとその子ナダブとの上に、さうした悲しむべき實例を見るのである。(二五—三〇)

◎バアシヤは、ナダブとその一家の者とを盡く滅し、代つてイスラエルの王となつた。斯して彼はヤラベアムの家筋、又血筋の者を滅したにも拘らず、彼自らは依然として「ヤラベアムの道にあゆみ、其のイスラエルに犯させたる罪を行うた」のである。

その如くいくら家柄のみ變つても、その人が變らねば何の役に立たう。又人のみ變つても、その心が變らねば何の甲斐があらう。要する所のものは、人を新に造る力である。卽ち基督の救である。「人あらたに生れずば、神の國を見ること能はず。」(ヨハ三・三)又「もし汝ら翻りて幼兒の如くならずば、天國に入るを得じ。」(マタ一八・三)等いふ、耶蘇の御敎の有難味が、今更の樣に感ぜられるではないか。(三一—三四)

一九　惡しき樹と惡しき果

(列王紀略上第十六章)

一爰にエホバの言ハナニの子エヒウに臨み、バアシヤを責めて曰く、二我爾を塵の中より擧げて、我民イスラエルの上に君となしたるに、爾はヤラベアムの道に步行み、わが民イスラエルに罪を犯させて、其罪をもてわが怒を激したり。三されば我バアシヤの後と其家の後を除き、爾の家をしてネバテの子ヤラベアムの家の如くならしむべし。四バアシヤに屬する者の城邑に死ぬるをば、犬之を食ひ、彼に屬する者の野に死ぬるをば、天空の鳥これを食はんと。五バアシヤの其餘の行爲と其爲したる事と、其功績は、イスラエルの王の歷代志の書に記載さるゝにあらずや。六バアシヤ其父祖と俱に寢りて、テルザに葬らる。其子エラ之に代りて王となれり。七エホバの言またハナニの子エヒウに由りて臨み、バアシヤと其家を責む。是は彼がエホバの目の前に諸〻の惡事を行ひ、其手の所爲を以てエホバの怒を激して、ヤラベアムの家に傚ひたるに緣り、又其ナダブを殺したるに緣りてなり。八ユダの王アサの第二十六年にバアシヤの子エラ、テルザに於てイスラエルの王となりて二年を經たり。九彼がテルザにありてテルザの宮殿の宰アルザの家において飲み醉ひたる時、其僕ジムリ戰車の半を督る者、之に敵して黨を結べり。一〇卽ちユダの王アサの第二十七年にジムリ入りて彼を擊ち、彼を殺し、彼にかはりて王となれり。一一彼王となりて其位に上れる時、バアシヤの全家を殺し、男子は其親族にもあれ、朋友にもあれ、一人も之に遺さゞりき。一二ジムリ斯くバアシヤの全家を滅せり。エホバが預言者エヒウに由りて、バアシヤを責めて言ひたまへる言の如し。一三是はバアシヤの諸〻の罪と、其子エラの罪の爲なり。彼等は罪を犯し、又イスラエルをして罪を犯し、其虛物を以てイスラエルの神エホバの怒を激さしめたり。一四エラの其餘の行爲と凡て其爲したる事は、イスラエルの王の歷代志の書に記載さるゝにあらずや。一五ユダの王アサの第二十七年にジムリ、テルザにて七日の間王たりき。民はペリシテ人に屬するギベトンに向ひて陣どり居たりしが、一六陣どれる民ジムリは黨を結び、亦王を殺したりと言ふを聞けり。是に於てイスラエル皆其日陣營にて、軍の長オムリをイスラエルの王となせり。一七オムリ乃ちイスラエルの衆と偕にギベトンより上りてテルザを圍めり。一八ジムリ其邑の陷るを見て、王の家の天守に入り、王の家に火をかけて其中に死ねり。一九是は其犯したる罪によりてなり。彼エホバの目の前に惡を爲し、ヤラベアムの道にあゆみ、ヤラベアムがイスラエルに罪を犯させて爲したるところの罪を行

ひたり。二〇ジムリの其餘の行爲と其なしたる徒黨は、イスラエルの王の歴代志の書に記載さるゝにあらずや。二一其時にイスラエルの民二に分れ、民の半はギナテの子テブニに從ひて之を王となさんとし、半はオムリに從へり。二二オムリに從へる民、ギナテの子テブニに從へる民に勝ちて、テブニは死にてオムリ王となれり。二三ユダの王アサの第三十一年にオムリ、イスラエルの王となりて十二年を經たり。彼テルザにて六年王たりき。二四彼銀二タラントを以てセメルよりサマリア山を買ひ、其上に邑を建て、其建てたる邑の名を、其山の故主なりしセメルの名に循ひてサマリアと稱べり。二五オムリ、エホバの目の前に惡を爲し、其先に在りし凡の者よりも惡しき事を行へり。二六彼はネバテの子ヤラベアムの凡の道に歩み、ヤラベアムがイスラエルをして罪を犯し、その虚物を以てイスラエルの神エホバの怒を激さしめたる其罪を行へり。二七オムリの爲したる其餘の行爲と其なしたる功績は、イスラエルの王の歴代志の書に記載るゝにあらずや。二八オムリ其父祖と偕に寢りて、サマリアに葬らる。其子アハブ之に代りて王となれり。二九ユダの王アサの第三十八年に、オムリの子アハブ、イスラエルの王となれり。オムリの子アハブ、サマリアに於て二十二年イスラエルに王たりき。三〇オムリの子アハブは其先に在りし凡の者よりも多くエホバの目の前に惡を爲せり。三一彼はネバテの子ヤラベアムの罪を行ふ事を輕き事となせしが、シドン人の王エテバアルの女イゼベルを妻に娶り、往きてバアルに事へ、之を拜めり。三二彼其サマリアに建てたるバアルの家の中にバアルのために壇を築けり。三三アハブ又アシラ像を作れり。アハブは其先にありしイスラエルの諸の王よりも甚だしく、イスラエルの神エホバの怒を激すことを爲せり。三四其代にベテル人ヒエル、エリコを建てたり。彼其基を置ゆる時に長子アビラムを喪ひ、其門を立つる時に季子ゼグブを喪へり。ヌンの子ヨシュアによりてエホバの言ひ給へるがごとし。

◎イスラエルの王バアシャは、大膽なる活動的の政治家であつた。それにも拘らず、彼はヤラベアムの道にあゆみ、イスラエルの人民を罪惡に誘うて、神の怒を惹起した。それ故神は預言者エヒウを遣して、之を責めしめ給うたのである。神は仰せられた。「我バアシャの後と、其の家の後を除き、爾の家をして、ネバテの子ヤラベアムの家の如くならしむべし云々」と。つまりバアシャは、ヤラベアムと同じ罪惡を行うて、ヤラベアムと同じ滅亡を招くに至るべきことを、警告せられたものである。耶蘇の御言に、「善き樹は善き果をむすび、惡しき樹は惡しき果をむすぶ。善き樹は惡しき果を結ぶこと能はず。惡しき樹はよき果を結ぶこと能はず。すべて善き果を結ばぬ樹は、伐られて火に投入れらる。」(マタ七・一七—一九)とある如く、バアシャとその家族とは、善き果を結ばぬ樹として、伐られて火に投入れらるゝことゝなつたのである。(一一七)

◎バアシャの子エラは、父についでイスラエルの王となつたが、二年の後、彼がテル

ザの宮殿の宰アルザの家において、飲み醉ひたる時、その僕ジムリの爲に殺害せられた。このエラも亦、彼の父と同じく罪を犯し、神の怒を招いたのではあれど、その滅亡に至つた近因は、彼が醉うて前後不覺に陷つたことであつた。「酒が内に入る時に、智慧は外に逃げる。」などいふ諺もあつて、酒くらゐ人を愚にするものは、他にないのである。「禍なるかな、かれらは朝つとにおきて濃酒をおひもとめ、夜のふくるまで止まりてのみ、酒にその身をやかるゝなり。かれらの酒宴には、琴あり、瑟あり、鼓あり、笛あり、葡萄酒あり。されどエホバの作爲をかへりみず、その御手のなし給ふところに目をとめず。斯るが故に、わが民は無知にして虜にせられ、その貴顯者はうゑ、そのもろもろの民は渴によりて疲れはてん。また陰府はその慾望をひろくし、その度られざる口をはる。かれらの榮華、かれらの群衆、かれらの饒富、および喜びたのしめる人、みなその中におつべし。」（イザ五・一一―一四）とあるのは、巧に酒の害を描いた一幅の活畫である。（八―一〇）

◎ジムリはイスラエル王エラを殺したのみならず、彼の全家を滅し、その男子は親族にもあれ、朋友にもあれ、一人殘らず之を殺害した狀は、神が前に預言者エヒウに由りて、バアシヤに警告せられた通であつた。しかも「是はバアシヤの諸〳〵の罪と、其の子エラの罪の爲」であつた。彼等は罪を犯し、又イスラエルをして罪を犯さしめたのである。此の如く一人一家の罪は、やがて全民族の罪となるやうな例が少くない。「上の好む所、下必ず之より甚しきものあり」というて、人の上に立つ者の不德は、殊にその下に屬く人々に、大なる影響を及ぼすものである。「一人の惡人は許多の善事を壞ふ。」（傳九・一八）とは、眞實の事である。（一一―一四）

◎「國の罪によりて侯伯多くなり、智くして知識ある人によりて國は長く保つ。」（箴二八・二）と、ソロモンはいうて居る。國が亂れた時には、野心家が輩出するものである。ジムリがエラを殺して王となると、それを聞いてペリシテ人と交戰中のオムリも、ギナテの子テブニも、皆それぞれ、イスラエルの王とならんことを求めて起ち上つた。しかしジムリが王たりし間は、たゞ七日に過ぎなかつたといへば、彼の壽命は至つて短かつたのである。彼はオムリの襲ふ所となり、その住めるテルザの邑が陷るのを見

て、自ら王の家の天守に入り、火をかけてその中に死んだ。彼が斯く悲慘な自殺を遂ぐるに至つたわけは、「其の犯したる罪によりてなり。」と記してある。或る意味からいへば、罪人は皆一種の自殺を遂げてゐるのである。心掛一つでは、善良、幸福、有用の生活を營み得べきものが、勝手に罪の僕となつて、自らを害ひ、滅亡に至るのは、事實上の自殺でなくて何であらう。パウロとシラスとは、ピリピの獄守が、自殺せんとするのを止め、「みづから害ふな。」(使一六・二八)といつた。私共は世の罪に死につゝある人々を見て、又同じく「みづから害ふな」と、絶叫せざるを得ないのである。(一五—二〇)

◎オムリはジムリを滅したる後、更にテブニに打勝つて、イスラエルの王となつた。彼は銀二タラントを以て、(銀一タラントは我が約四千圓に當る)サマリア山を買ひ、其の上に邑を建て、これまで山の所有主であつたセメルの名に循ひて、之をサマリアと呼んだ。前にヤラベアムがイスラエルの王となつた時、彼は其の都をエフライムの山地なるシケムに定め、後ヨルダン河の東側なるペニエルに移り、更にまたヨルダン河の西なるテレザに移つた。然るにこゝにオムリが、サマリアの山に邑を建つるに至り、以後は引續いて、そこがイスラエル(卽ち北朝)の首府となつたのである。彼はかくして新に王の都を建てた。彼のこの擧はイスラエルの歷史に、長く傳へらるゝことゝなつた。それにも拘らず、彼自らは復しても、「ネバテの子ヤラベアムの凡ての道に歩み、ヤラベアムがイスラエルをして罪を犯し、その虛物を以て、イスラエルの神エホバの怒を激さしめたる、其の罪を行うた」のである。かくの如く世には往々、後世までも記憶せらるゝやうな事功をなしつゝ、一面にはその不德不信の行爲を以て、人を害ひ、世を禍する者が、少くない。けれども私共に最も肝要なる問題は、何を爲すかではなくて、何であるかである。卽ち事業よりも大事なものは、人格であることを知つて、かねてから心掛くる所がなくてはならぬ。(二一—二八)

◎これ迄のイスラエルの諸王は、エホバ神を偶像視して禮拜したのである。すなはちヤラベアムが金の犢を造り、之をエホバ神として拜ませた如き、その實例である。この意味に於て、彼等は十誡の第二、すなはち「汝自己のために何の偶像をも彫むべか

らず。」（出二〇・四）といふのを、破つたものである。然しながらアハブに至つては、直ちに第一の誡命、卽ち「汝わが面の前に、我の外何物をも神とすべからず。」（出二〇・三）といふのを破り、エホバ神を棄てゝ、シドン人の神なるバアル（日の神）を拜んだのである。すなはち、彼は、「ヤラベアムの罪を行ふ事を輕き事となせしが、シドン人の王エテバアルの女イゼベルを妻に娶り、往きてバアルに事へ、之を拜めり」とある如く、彼はシドン王の女イゼベルといふ、善くない婦人を妻に迎へ、それから入智慧をされて、偶像禮拜は勿論その他あらゆる罪惡を犯すに至つたのである。アハブは又アシラ像（月の神）を造つた。その時代にベテル人ヒエルなる者が、エリコの邑を再建したが、その邑のことについては、五百年前ヨシュアが人民に誓ひて、「凡そ起ちて、このエリコの邑を建つる者は、エホバの前に詛はるべし。其の石礎をすゑなば長子を失ひ、その門を建てなば季子を失はん。」（ヨシ六・二六）といふた如く、ヒエルは其の基を据ゆる時に長子アビラムを喪ひ、門を立つる時に季子セグブを喪うた、といふことである。實に「罪の拂ふ價は死なり。然れど神の賜物は、我等の主基督耶蘇にありて受くる、永遠の生命なり。」（ロマ六・二三）私共は基督によつて賜る救にあづかり、又永遠の生命を嗣がんことを求めねばならぬ。（二九—三四）

二〇　預言者エリヤ

（列王紀略上第十七章）

一ギレアデに居住れるテシベ人エリヤ、アハブに言ふ、吾事ふるイスラエルの神エホバは活く、わが言なき時は數年雨露あらざるべしと。二エホバの言彼に臨みて曰く、三爾此より往きて東に赴き、ヨルダンの前にあるケリテ川に身を匿せ。四爾其川の水を飲むべし。我鴉に命じて彼處にて爾を養はしむと。五彼往きてエホバの言の如く爲せり。卽ち往きてヨルダンの前にあるケリテ川に住めり。六彼の所に鴉朝にパンと肉、亦夕にパンと肉を運べり。彼は川に飲めり。七然るに國に雨なかりければ、數日の後其川涸れぬ。八エホバの言彼に臨みて曰く、九起ちてシドンに屬するザレパテに往きて其處に住め、視よ、我彼處の寡婦に命じて爾を養はしむと。一〇彼起ちてザレパテに往きけるが、邑の門に至れる時、一人の寡婦の其處に薪を採ふを見たり。乃ち之を呼びて曰ひけるは、請ふ器に少許の水を我に携來りて、我に飲ませよと。一一彼之を携ち來らんとて往ける時、エリヤ彼を呼びて言ひけるは、請ふ爾の手に一日のパンを我に取り來れと。一二彼いひけるは、爾の神エホバは活く、我はパン無し。只桶

に一握の粉と瓶に少許の油あるのみ。視よ、我は二の薪を採ふ、我いりてわれとわが子のために調理へて之を食ひて死なんとす。一三エリヤ彼に言ふ、懼るゝなかれ、往きて汝がいへる如くせよ。但し先其をもてわが爲に小きパン一を作りて我に携ち來り、其後爾のためと爾の子のために作るべし。一四其はエホバの雨を地の面に降したまふ日までは、其桶の粉は竭きず、其瓶の油は絶えずと、イスラエルの神エホバ言ひたまへばなりと。一五彼ゆきてエリヤの言へる如くなし、彼と其家及びエリヤ、久しく食へり。一六エホバのエリヤに由りて言ひ給ひし言のごとく、桶の粉は竭きず、瓶の油は絶えざりき。一七是等の事の後、其家の主母なる婦の子疾に罹りしが、其病甚だ劇くして、氣息其中に絶えて無きに至れり。一八婦エリヤに言ひけるは、神の人よ、汝なんぞ吾事に關渉るべけんや。汝はわが罪を憶ひ出さしめんため、又わが子を死なしめん爲に我に來れるか。一九エリヤ彼に、爾の子を我に授せと言ひて、之をその懷より取り、之を己の居る樓に抱へのぼりて己の牀に臥さしめ、二〇エホバに呼ばはりていひけるは、吾神エホバよ、爾は亦吾ともに宿る寡に菑をくだして、其子を死なしめ給ふやと。二一而して三度身を伸して其子の上に伏し、エホバに呼ばはりて言ふ、わが神エホバ願くは此子の魂を中に歸らしめ給へと。二二エホバ、エリヤの聲を聽きいれ給ひしかば、其子の魂中に歸りて生きたり。二三エリヤ乃ち其子を取りて之を樓より家に携れ下り、其母に與していひけるは、視よ、爾の子は生くと。二四婦エリヤにいひけるは、此に緣りて我は爾が神の人にして、爾の口にあるエホバの言は眞實なるを知ると。

◎預言者エリヤは、不意に現れ來つて、惡王アハブに會ひ、「吾が事ふるイスラエルの神エホバは活く、わが言なき時は數年雨露あらざるべし。」と宣言した。此のエリヤの父母は何人であつたか、又其の出生地は何處であつたか等のことは、更に知るべき由がなく、彼が卒然として世に出で來つたのを見て、古いユダヤ人の間には、彼は天の使が人の姿をとつて現れたものだ、といふ傳說さへ生じた。然しながら後にヤコブがいうた樣に、彼も「我らと同じ情をもてる人」(ヤコ五・一七)であつたことには間違なく、ただ彼に若し常人と異るところありしとすれば、それは主として彼が活ける神を知つたことゝ、その祈に力ありしことゝであつた。「エリヤは我らと同じ情をもてる人なるに、雨降らざることを切に祈りしかば、三年六ヶ月のあひだ地に雨降らざりき。」(ヤコ五・一七)と記されたのは、それである。聖書の中に、彼と似た人物を求むれば、耶蘇の先ぶれをする爲に現れたヨハネが、身には駱駝の毛織衣をまとひ、腰には皮の帶をしめ、蝗と野蜜とを食物とし、人々に向うては、專らその罪の悔改を促したのが、彼と最も似た型の人であつたやうに見える。卽ち耶蘇がヨハネのことに就き、「もし汝ら

わが言をうけんことを願はゞ、來るべきエリヤは此の人なり。」（マタ一一・一四）といはれたのは、その爲であつた。（一）

◎かくて後、エリヤは神の御言に從ひ、ヨルダン河の東にある、ケリテ川の邊に身をかくした。彼は暫くの間、その川の水を飲み、又神が朝夕烏に命じて運ばせ給ふパンと肉とを食うて、その生命をつないだ。私の恩人吉田清太郎君は、京都同志社に在學中、當時一貧書生であつた私に同情し、その學資を助くる爲に、或る外國宣教師の宅から他の宣教師の宅まで、毎日牛乳を運んで得た勞銀を以て、私の爲にその校費を納むることゝなつた。そのうち君は更に今一人の苦學生を見出し、彼をも助くる爲に盡力し出した爲に、牛乳を運んだ勞銀だけでは足りなくなり、自分の食費金をも其の方にまはした結果、餘儀なくも數日間斷食しつゝ、それでもなほ牛乳の運搬を續けて居ると、或る日、今出川御門を入つた所にある、大きな椋の木の下まで來た時、はからず數十羽の烏が飛んで來て、木の枝を搖ぶり、幾十とも知れぬ椋の果が地に落ちたのを見て、君はそこに立止まり、「神よ、あなたは昔烏にパンを運ばせて、預言者を養はせ給うたお方であります。今は又、それと同じ樣に烏を用ひて、私に果實を與へ給ふことを感謝します。」といひ、落ちた果實を拾うて食べられたと、承知して居る。爾來私は京都に行つて今出川御門をくゞり、かの椋の木の下を通る時には、脫帽せずして、そこを過ぎることが出來ないのである。（二一七）

◎エリヤはやがて又、神の御言にしたがひ、起ちてシドンに屬するザレパテに往き、其處にて或る寡婦に養はるゝことになつた。シドンといへば、アハブはシドン王の女イゼベルを妻に娶り、その神バアルを拜んで、罪を重ねたのである。（列上一六・三一）然るにそれとは反對に、こゝにはシドンに住みながら、エホバ神を信ずる一人の貧しき寡婦があり。それが預言者を饑饉の最中に、世話することゝなつたといふのは、珍しい御取計といはねばならぬ。すなはち耶蘇が後に、「われ誠に汝らに告ぐ、預言者は己が鄕にて喜ばるゝことなし。われ實をもて汝らに告ぐ、エリヤのとき三年六ケ月、天とぢて全地大なる饑饉なりしが、イスラエルの中に多くの寡婦ありたれど、エリヤは其の一人にすら遣されず、唯シドンなる、サレプタの一人の寡婦にのみ遣され

たり。」（ルカ四・二五、二六）と仰せられたのは、それである。或人が山中に獨居する隱者に向ひ、「お隣がなくて、さぞ淋しいでせう」と同情すると、彼は答へて、「お隣には神の攝理が居られます。それ故些とも淋しくありません」といふた。神の攝理に身を委ぬる聖徒は、その奇蹟的の御守護の下に、生存へることが出來るのである。（八、九）

◎漸く唯一度だけ、母と子とを養ふに足るべきパンの原料の粉と油とが、神の御力によつて使用する程增加はり、よく預言者と寡婦と其の子と三人を、長い間養ふに足つたのである。これは後に一人の童子が、大麥のパン五つと小き魚二つとを獻げたのを、耶蘇が祝福し、それを用ひて五千人を養ひ給うたのと、似た話である。（ヨハ六・八）「ほどこし散らして反りて增すものあり。與ふべきを吝みて反りて貧しきに至る者あり。施與を好むものは肥え、人を潤す者はまた利潤をうく。」（箴一一・二四、二五）神の數學は分ける程增すのである。神の國の經濟は與へる程殖えるのである。眞に不思議といはねばならない。（一〇―一四）

◎耶蘇は僅のパンと魚とをもて五千人を養ひたる後、「廢るものゝなきやうに、擘きたる餘をあつめ」（ヨハ六・一二）しめ給ふと、それが十二の籃に滿ちた。それと同じ樣に、貧しい中から預言者を養うた寡婦の家では、その桶の粉は盡きず、瓶の油は絕えなかつた。後に「預言者たる名の故に預言者をうくる者は、預言者の報をうけ、義人たる名のゆゑに義人をうくる者は、義人の報を受くべし。」（マタ一〇・四一、四二）との御言は、彼女の如實に經驗したる所であつた。（一五、一六）

◎エリヤが彼女の家に滯在中、その寡婦の愛兒が死んだのを見て、彼は神に呼はり、その御力によつて之を甦へらせ、その母にかへしてやると、彼女はエリヤに向ひ、「此に緣りて我は爾が神の人にして、爾の口にあるヱホバの言は眞實なるを知る。」といつた。一人の婦人がその死んだ子を抱きて、釋迦の許にゆき、之を甦へらさんことを求めると、釋迦は彼女に向ひ、「曾て死人を出したことのない家から、罌粟の種子一撮みを貰うて來たら、それを用ひて死んだ子を甦へらせてやらう。」と答へた。彼女は喜び、家々をまはつて聞合せて見たが、何處に行つても、曾て死人を出したことのない家といふのが、見つからない。そこで失望して歸り、釋迦にその由を報告に及ぶと、

「それ程何處の家にも、死人のない所はないものとすれば、お前の子供が死んだのも、世の常の習として、諦める他はあるまい」と、釋迦は說き示された。といふことである。然しながら預言者エリヤは、寡婦の死んだ子を甦へらせた。此の如く釋迦の敎は死を諦めしむる道であるに對し、聖書の敎は死に勝つ道を示すのである。「彼（基督）は死をほろぼし、福音をもて、生命と朽ちざる事とを、明かに爲給へり。」（テモ後一・一〇）又「これは死の權力を有つもの、卽ち惡魔を死によりて亡し、かつ死の懼に由りて生涯、奴隷となりし者どもを解放ち給はん爲なり。」（ヘブ二・一四、一五）とあるのは、その謂である。實に「永遠の生命の言」（ヨハ六・六八）は、耶蘇にのみあるのである。（一七—二四）

二一　火を以て應ふる神

（列王紀略上第十八章）

一 衆多の日を經たるのち、第三年にエホバの言エリヤに臨みて曰く、往きて爾の身をアハブに示せ。我雨を地の面に降さんと。二 エリヤ其身をアハブに示さんとて往けり。時に饑饉サマリアに甚しかりき。三 玆にアハブ家宰なるオバデヤを召したり。四（オバデヤは大にエホバを畏みたる者にて、イゼベルがエホバの預言者を絕ちたる時に、オバデヤ百人の預言者を取りて、之を五十人づつ洞穴に匿し、パンと水をもて之を養へり。）五 アハブ、オバデヤにいひけるは、國中の水の諸の源と諸の川に往け、馬と騾を生活むる草を得ることあらん。然らば我等牲畜を盡くは失ふに至らじと。六 彼等巡るべき地を二人に分ち、アハブは獨にて此途に往き、オバデヤは獨にて彼途に往けり。七 オバデヤ途にありし時、視よエリヤ彼に遭へり。彼エリヤを識りて伏して言ひけるは、我主エリヤ、汝は此に居たまふや。八 エリヤ彼に言ひけるは、然り、往きて汝の主にエリヤは此にありと告げよ。九 彼言ひけるは、我何の罪を犯したれば、汝僕をアハブの手に付して我を殺さしめんとする。一〇 汝の神エホバは生く、わが主の人を遣はして汝を尋ねざる民はなく、國はなし。若しエリヤは在らずといふ時は、其國其民をして汝を見ずといふ誓を爲さしめたり。一一 汝今言ふ往きて汝の主にエリヤは此にありと告げよと。一二 然れど我汝をはなれて往くとき、エホバの靈我しらざる處に汝を携へゆかん。我至りてアハブに告げて、彼汝を尋獲ざる時は、彼我を殺さん。然りながら僕はわが幼少よりエホバを畏むなり。一三 イゼベルがエホバの預言者を殺したる時に吾なしたる事、卽ち我がエホバの預言者の中百人を五十人づつ洞穴に匿して、パンと水を以て之を養ひし事は吾主に聞えざりしや。一四 しかるに今汝言ふ、往きて汝の主にエリヤは此にありと告げよと。然らば彼我を殺すならん。一五 エリヤいひけるは、我が事ふる萬軍のエホバは活く、我は必ず今日わが身を彼に示すべしと。一六 オバデヤ乃ち往きてアハブに會ひ、之に告げければアハブはエ

リヤに會はんとて往きけるが、一七アハブ、エリヤを見し時、アハブ、エリヤに言ひけるは、汝イスラエルを惱ます者、此にをるか。一八彼答へけるは、我はイスラエルを惱さず、但汝と汝の父の家之を惱すなり。卽ち汝等はエホバの命令を棄て、且汝はバアルに從ひたり。一九されば人を遣りてイスラエルの諸の人、およびバアルの預言者四百五十人、竝にアシラ像の預言者四百人、イゼベルの席に食ふ者をカルメル山に集めて、我に詣らしめよと。二〇是においてアハブ、イスラエルの都の子孫の中に人を遣り、預言者をカルメル山に集めたり。二一時にエリヤ總の民に近づきて言ひけるは、汝等何時まで二の物の間にまよふや。エホバ若し神ならば之に從へ。されどバアル若し神ならば之に從へと。民は一言も彼に答へざりき。二二エリヤ民に言ひけるは、惟我一人存りてエホバの預言者たり。然れどバアルの預言者は四百五十人あり。二三然れば二の犢を我等に與へよ。彼等は其一の犢を選みて之を截り割き、薪の上に載せて火を縱たずに置くべし。我も其一の犢を調理へ、薪の上に載せて火を縱ずに置くべし。二四斯して汝等は汝等の神の名を顧べ。我はエホバの名を顧ばん。而して火をもて應ふる神を神と爲すべしと。民皆答へて斯言は善しと言へり。二五エリヤ、バアルの預言者に言ひけるは、汝等は多ければ一の犢を選みて最初に調理へ、汝等の神の名を呼ぶべし。但し火を縱つ勿れと。二六彼等乃ち其與へられたる犢を取りて調理へ、朝より午に至るまでバアルの名を顧びて、バアルよ、我等に應へ給へと言へり。然れど何の聲もなく、又何の應ふる者もなかりければ、彼等は其造りたる壇のまはりに踊れり。二七日中におよびてエリヤ彼等を嘲りていひけるは、大聲をあげて呼べ、彼は神なればなり。彼は默想へたるか、他處に行きしか、又は旅にあるか、或は假寐りて醒さるべきかと。二八是において彼等は大聲に呼

ばはり、其例に循ひて刀劍と槍を以て其身を傷つけ、血を其身に流すに至れり。二九斯して午時すぐるに至りしが、彼等なほ預言を言ひて、晩の祭物を獻ぐる時にまで及べり。然れども何の聲もなく、又何の應ふる者も无く、又何の顧る者もなかりき。三〇時にエリヤ都の民にむかひて、我に近よれと言ひければ、民皆彼に近よれり。彼乃ち破壞れたるエホバの壇を修理へり。三一エリヤ、ヤコブの子等の支派の數に循ひて十二の石を取れり。(エホバの言、昔ヤコブに臨みてイスラエルを汝の名とすべしと言へり。)三二彼其石にてエホバの名を以て壇を築き、壇の周圍に種子二セヤを容るべき溝を作れり。三三又薪を陳列べ、犢を截割きて薪の上に載せて言ひけるは、四の桶に水を滿てて燔祭と薪の上に沃げ。三四又いひけるは、再び之を爲せと。再びこれをなせしかば、又言ふ三次これを爲せと。三次これをなせり。三五水は壇の周廻に流る。又溝にも水をみたしたり。三六晩の祭物を獻る時に及びて、預言者エリヤ近よりて言ひけるは、アブラハム、イサク、イスラエルの神、エホバよ、汝のイスラエルにおいて神なること、および我が汝の僕にして汝の言に循ひて是等の諸の事をなせることを、今日知らしめたまへ。三七エホバよ、我に應へたまへ。我に應へたまへ。此民をして汝エホバは神なること、および汝は彼等の心を翻へしたまふといふことを知らしめ給へと。三八時にエホバの火降りて、燔祭と薪と石と塵とを焚きつくせり。亦溝の水を舐潤らせり。三九民皆見て伏していひけるは、エホバは神なり。四〇エリヤ彼等に言ひけるは、バアルの預言者を執へよ。其一人をも逃遁れしむる勿れと。卽ち之を執へたれば、エリヤ之をキション川に曳き下りて彼處に之を殺せり。四一斯てエリヤ、アハブにいひけるは、大雨の聲あれば汝上りて食飲すべしと。四二アハブ乃ち食飲せんとて上れり。然れどエリヤはカルメルの巔

に登り、地に伏して其面を膝の間に容れぬたりしが、四三其少者にいひけるは、請ふ上りて海の方を望めと。彼上り望みて何もなしといひければ、再び往けといひて遂に七次に及べり。四四第七次に及びて彼いひけるは、視ふ、海より人の手のごとく微の雲起ると。エリヤいふ、上りてアハブに雨に阻められざるやう、車を備へて下りたまへと言ふべしと。四五驟に雲と風おこり、霄漢黑くなりて大雨ありき。アハブはエズレルに乘り往けり。四六エホバの能力エリヤに臨みて、彼其腰を束帶び、エズレルの入口までアハブの前に趨りゆけり。

◎三年餘を經て後、エリヤは神の命により、再び身をアハブに現すことゝなつたが、その前に途上で、王の家宰なるオバデヤに出會うた。彼はオバデヤに向ひ、「往きて汝の主に、エリヤは此にありと告げよ」といふと、オバデヤは答へて、「我何の罪を犯したれば、汝我をアハブの手に付して、殺さしめんとする。我汝をはなれて往くとき、エホバの靈、我がしらざる處に汝を携へゆかん。我が至りてアハブに告げて、彼汝を尋ね獲ざる時は、彼我を殺さん。」といふた。このオバデヤは、アハブの宮廷に不似合な、篤信なる神の僕にて、前にイゼベルが、エホバの預言者を殺したる時、オバデヤは彼等の中の百人を二組に分けて、之を洞穴に匿し、パンと水とをもて養うた樣なこ

ともあり、極めて篤行なる君子人であつた。オバデヤは如何にして、偶像禮拜と罪惡とに滿ちたる、アハブの家に事へながら、能くさうした信仰と善行とを、持續することが出來たかといふに、それは彼が敬虔なる兩親の子として、少年時代より早く、神を敬ふことを學んで居つたからである。すなはち彼が、「僕はわが幼少よりエホバを畏むなり」というたのは、その事であつた。それにつけても幼兒を、その素直にして教へられ易い間に、逸早く基督に導きたきものである。「我に七歳迄の兒童を與へよ、さらばその後は誰の手に渡されても、關はない。」と、サビエーがいうたのは、大きに意義あることである。(一一一五)

◎エリヤはオバデヤに向ひ、必ず其處を去らずに、待つて居るべきことを告げた故、オバデヤはアハブに會うてその事を告げ、アハブは急ぎ來つて、エリヤを見るや否や、「汝イスラエルを惱す者、此にをるか。」と、いふのに答へて、エリヤは、「我はイスラエルを惱さず、但汝と汝の父の家之を惱すなり。」というた。人は兎角自分のことを棚にあげて、他人の身の上のみ、詮議したがるものである。過る三年と六ヶ月間の大旱

魃は、エリヤが惹起したのではなく、アハブとその妻イゼベルとが、先に立つて犯した罪悪が、之を惹起したのである。「蝮の裔よ、誰が汝らに、來らんとする御怒を避くべき事を示したるぞ。さらば悔改に相應しき果を結べ。」(マタ三・七、八)と、後にバプテスマのヨハネがいうたのは、そのまゝ此の場合のアハブに當嵌るべき言であつた。(一六—二〇)

◎エリヤの請求にしたがひ、アハブは急に人を遣りて、イスラエルの諸の人、中にもバアルの預言者等を、カルメル山に集め、彼と對決せしむることゝなつた。向ふの側には、王と人民とバアルの預言者四百五十人、その又同類とも見るべきアシラ像の預言者四百人が、一團となつて坐つて居るのに對し、エホバ神の側に立つ者とては、エリヤが唯一人であつた。然しながら神と偕なる一人は大多數である。エリヤは大聲に人民に向うていうた。「汝等何時まで、二つの物の間にまよふや。エホバ若し神ならば之に從へ、されどベアル若し神ならば之に從へ。」と。人は二人の主に兼事ふることが出來ない。イスラエル人民は、エホバか、バアルか、いづれに屬くかを判然と定むべきことを、警告せられたのである。かくて後、彼は二つの犢をそなへしめ、之を截り剖きて薪の上に載せ、バアルの預言者と、エリヤとは、順繰に天からの火が、犧牲の上に降らんことを祈り、その祈に應驗を與へた神を、神として受容るべきやう、勸告したのである。「汝等は汝等の神の名を顧べ、我はエホバの名を顧ばん。而して火をもて應ふる神を神と爲すべし。」と、彼がバアルの預言者に告げたのは、それであつた。その如く、眞の神は火をもて應ふるお方である。火は燒くものである。その如く神の火は、私共の罪のけがれを燒きつくすのである。火は照すものである。その如く神の御靈は、私共を照し導き給ふのである。火は熱を與ふるものである。その如く御靈の火は、私共をして心を熱くし、主に事へしむるものである。私共は火をもて應ふる神を、私共の神として居らねばならぬ。(二一—二四)

◎バアルの預言者は、「其の與へられたる犢を取りて調理へ、朝より午に至るまでバアルの名を顧び、「バアルよ、我等に應へ給へ」というたが、何の答もない故、彼等は其の造りたる壇のまはりに踊り、果は刀劍と槍とをもて其の身を傷つけ、血を流しつゝ

且祈り、且叫んで、夕に及んだけれども、遂に何の顧みる者もなかつた。元來神を禮拜するに必要なことが二つあり、その第一は、如何なる神を拜むか。第二は、如何に之を拜むかを、考慮すべきことが、是である。其の事に就いては耶蘇の御言に、「神は靈なれば拜する者も亦、靈と眞とを以て之を拜すべきなり。」（ヨハ四・二四）と仰せられて居る。歌に「祈りても、しるしなきこそ、しるしなれ、願ふ心の、まことならねば」とあり。十分に心得て置かねばならぬことである。（二五—二九）

◎かくて後、エリヤは人民を招いて彼に近寄らしめ、イスラエルの支派の數にしたがひ、十二の石を取つてエホバの壇を築き、薪を陳列べ、犢を剖きて其の上に載せ、四つの桶に水を滿て、三度までも之を燔祭と薪との上に注ぎ、然る後神に祈つた。「アブラハム、イサク、イスラエルの神、エホバよ、汝のイスラエルに於て神なること、および我が汝の僕にして、汝の言に循ひて是等の諸の事をなせることを、今日知らしめたまへ。エホバよ、我に應へたまへ。我に應へたまへ。此の民をして汝エホバは神なること、および汝は彼等の心を翻へしたまふといふことを、知らしめ給へ。」と、彼は

熱心をこめて神に求めたのである。時にエホバの火が降りて、燔祭と薪と石と塵とを焚きつくし、又溝の水までも餂涸したのを、民は見て驚き、異口同音に、「エホバは神なり、エホバは神なり。」と叫んだ。するとエリヤは彼等を指圖し、バアルの預言者を捕へて一人も逃さず、之をキション川に曳下りて殺さしめた。こゝにエリヤの祈は聽かれて、天より火が降つた如く、神は今も眞實を以て求むる者に、天よりの火を與へ給ふ。すなはち弟子たちが十日間、眞實をこめた祈の後に、ペンテコステの聖靈降臨となり、「烈しき風の吹ききたるごとき響、にはかに天より起りて、その坐する所の家に滿ち、また火の如きもの舌のやうに現れ、分れて各人の上に止まる。」（使二・二、三）とある如きは、その活きた實例である。しかもこれはその以來、絶えず世界の各地に繰返されつゝある、たふとき惠の經驗ではないか。（三〇—四〇）

◎エリヤはアハブに向ひ、「大雨の聲あれば、汝上りて食飲すべし。」と忠告しおき、一人カルメル山の巔に登り、其處にて神に雨を降らさんことを祈つた。これは信仰の祈であつた。必ず神が大雨を降らせ給ふことを信じて、求めたのである。これは謙遜

の祈であつた。彼は地に伏し、面を膝の間に容れて、祈つたのである。これは又忍耐の祈であつた。その昔ヤコブが神と角力したのと似た（創三二・二四）堅忍不拔の祈であつた。彼が少年をして地中海の向ふに、人の手の如き小き黑雲の起るまで、七度も往いて海の方をのぞましめつゝ、祈りつゞけたといふのは、そのことを意味する。果然彼の祈は聽かれた。驟に雲と風おこり、霄漢黑くなりて篠をつく大雨がふり來つた。後にヤコブがそのことを語りて、「正しき人の祈は、はたらきて大なる力あり。」（ヤコ五・一六）というたのは、如何にも適切な言である。（四一—四六）

二二　靜なる細き聲

（列王紀略上第十九章）

一アハブ、イゼベルにエリヤの凡て爲したる事、および其如何に諸の預言者を刀劍にて殺したるかを告げしかば、二イゼベル使をエリヤに遣はして言ひけるは、神等斯なし、復重ねて斯なしたまへ。我必ず明日の今時分、汝の命を彼人々の一人の生命の如くせんと。三かれ恐れて起ち、其生命のために逃げ往きて、ユダに屬するベエルシバに至り、少者を其處に遺して四自ら一日程ほど曠野に入り、往きて金雀花の下に坐し、其身の死なんことを求めていふ、エホバよ、足れり。今わが生命を取り給へ。我はわが父祖よりも善きにはあらざるなりと。五彼金雀花の下に伏して寢りしが、天の使彼に捫り、興きて食へと言ひければ、六彼見しに其頭の側に炭に燒きたるパンと一瓶の水ありき。乃ち食ひ飲みて復偃臥たり。七エホバの使者復再び來りて、彼に捫りていひけるは、興きて食へ。其は途長くして汝勝ふべからざればなりと。八彼興きて食ひ、且飲み、其食の力に仗りて四十日四十夜行きて神の山ホレブに至る。九彼處にて彼洞穴に入りて其處に宿りしが、主の言彼に臨みて彼に言ひけるは、エリヤよ、汝此にて何を爲すや。一〇彼いふ、我は萬軍の神エホバの爲に甚だ熱心なり。其はイスラエルの子孫汝の契約を棄て、汝の壇を毀ち、刀劍を以て汝の預言者を殺したればなり。惟我一人存れるに、彼等我生命を取らんことを求むと。一一エホバ言ひ給ひけるは、出てエホバの前に山の上に立てと。茲にエホバ過ぎゆき給ふに、エホバのまへに當りて大なる强き風、山を裂き、岩石を碎きしが、風の中にはエホバ在さゞりき。風の後に地震ありしが、地震の中にはエホバ在さゞりき。一二又地震の後に火ありしが、火の中にはエホバ在さゞりき。火の後に靜なる細微き聲ありき。一三エリヤ聞きて面を外套に蒙み、出て洞穴の口に立ちけるに、聲ありて彼に臨み、エリヤよ、汝此にて何をなすやといふ。一四かれいふ、我は萬軍の神エホバの爲に甚だ熱心なり。其はイスラエルの子孫汝の契約を棄て、汝の壇を毀ち、刀劍を以て汝の預言者を殺したればなり。惟我一人存れるに、彼等我が生命を取らんことを求むと。一五エホバかれに言ひたまひけるは、往きて汝の途に返り、ダマスコの曠野に至り、往きてハザエルに膏を沃ぎてスリアの王となせ。一六又汝ニムシの子エヒウに膏を注ぎてイスラエルの王となすべし。又アベルメホラのシヤ

パテの子エリシヤに脊をそゝぎ、爾に代りて預言者とならしむべし。一七ハザエルの刀劍を逃るゝ者をばエヒウ殺さん。エヒウの刀劍を逃るゝ者をばエリシヤ殺さん。一八又我イスラエルの中に七千人を遺さん。皆其膝をバアルに跪めず、其口を之に接けざる者なりと。一九エリヤ彼處よりゆきてシヤパテの子エリシヤに遭ふ。彼は十二耦の牛を其前に行かしめて、己は其第十二の牛と偕にありて耕へし居たり。エリヤ彼の所にわたりゆきて、外套を其上にかけたれば。二〇牛を棄ててエリヤの後に趨せゆきて言ひけるは、請ふ我をしてわが父母に接吻せしめよ。しかるのち我爾にしたがはんと。エリヤかれに言ひけるは、行け、還れ、我爾に何をなしたるやと。二一エリシヤ彼をはなれて還り、一軛の牛をとりて之をころし、牛の器具を焚きて其肉を煮て、民にあたへて食はしめ、起ちて往きエリヤに從ひて之に事へたり。

◎神はカルメル山上、火をもてエリヤの祈に應へ、更に又三年六ヶ月の大旱魃の後に、大雨を降らせて、之を惠み給うたについては、イスラエル人はそれを機として神に立歸り、以來エリヤのいふ所を傾聽するに至つたかと思ふと、さうではなくて、エリヤの身邊には、これ迄よりも大なる迫害が押寄せて來た。アハブがイゼベルに、エリヤの凡て爲したる事、取分け其の如何にバアルの預言者を刀劍にて殺したるかを告げると、イゼベルは使をエリヤに遣して、「神等、斯くなし、復重ねて斯くなしたまへ。我必ず明日の今時分、汝の命を彼の人々の一人の生命の如くせん。」といはしめた。つまり、イゼベルは、二十四時間以内に、エリヤの生命を奪はずしてはやまじと、決心したのである。すなはち耶蘇が「我がために人、なんぢらを罵り、また責め、詐りて各樣の惡しきことを言ふときは、汝ら幸福なり。喜び喜べ、天にて汝らの報は大なり。汝等より前にありし預言者等をも、斯く責めたりき。」(マタ五・一一、一二)と仰せられたのは、それである。ヤコブの書に又、「兄弟よ、主の名によりて語りし預言者たちを、苦難と耐忍との模範とせよ。視よ、我らは忍ぶ者を幸福なりと思ふ云々。」(ヤコ五・一〇、一一)と教へてあるではないか。(一、二)

◎緊張の後に、その反動としての弛緩を來すことがある。エリヤはアハブと、バアルの預言者四百五十人とを向ふにまはし、敢然としてエホバの御名を證し、その御教の爲に戰うた後、イゼベルからの申入に接し、昨日までの元氣は何處へやら消え失せ、忽ちぐむ球に孔をあけた樣に、全く彈力を失うたのである。彼は一日路程の距離を走りゆきて、曠野に入り、金雀花の下に坐し、その身の死なんことを求めたといふのは、

意氣地のないことのやうであれど、これは昔から多くの人々の、ひとしく經驗する所である。どんな大人豪傑といへども、つまりは人間である。神の御助なしには、見る影もなく弱い者である。「汝ら我を離るれば、何事をも爲し能はず。」（ヨハ一五・五）と、耶蘇が仰せられたのは、眞實のことである。けれども私共は彼に依賴むことによつて、强くせらるべき希望がある。すなはちパウロが、「我を强くし給ふ者によりて、凡ての事をなし得るなり。」（ピリ四・一三）というたのは、それである。神は天の使を遣り、炭で燒いたパンと一瓶の水とを備へて、エリヤをいたはり慰めしめ給うた。「母のその子をなぐさむる如く、我もなんぢらを慰めん。」（イザ六六・一三）といふ御言もあり、私共の神は慈母の愛を以て、私共を守り養ひ給ふのである。眞に忝いことではないか。（三―八）

◎こゝに神の山ホレブとあるのは、その昔モーセが神に見えたのと、同じ場所であつたらう、とのことである。（出三・一）其處にてエリヤが、洞穴の中に宿つて居ると、神の言は彼に臨み、「エリヤよ、汝此にて何を爲すや」と問ひ給うた。そこで彼は、「我は萬軍の神エホバの爲に甚だ熱心なり。其はイスラエルの子孫、汝の契約を棄て、汝の壇を毀ち、刀劍を以て汝の預言者を殺したればなり。惟我一人存れるに、彼等我が生命を取らんことを求む。」と答へ奉つた。後にイザヤの書に、「義をおひ求め、エホバを尋ねもとむるものよ、我にきけ。なんぢらが斫出されたる磐と、なんぢらの掘出されたる穴とを、おもひ見よ。なんぢらの父アブラハム、及びなんぢらを生みたるサラをおもひ見よ。われ彼をその唯一人なりしときに召し、之を祝してその子孫をまし加へたり。」（イザ五一・一、二）とあり。神に選ばれた唯一人の僕又は婢が、その御旨にしたがひ、御力によつて起ち上る時、他の幾千幾萬の人にも勝る貢獻をなし得る場合が、決して少くない。私共はそれにつけても、神に身を獻げた人一人の力の、如何に大なるものかを知らねばならぬ。「エホバは全世界を徧く見そなはし、己にむかひて心を全うする者のために、力を顯したまふ。」（歷下一六・九）のである。（九、一〇）

◎エリヤは神の命にしたがひ、その過ぎ給ふのを待つて居ると、エホバのまへに當りて大なる强き風あり、山を裂き岩石を碎いたが、風の中には神が在さなかつた。風の